道南女性史研究

第十五号

表紙　山形　和子
題字　星　眠

はじめに

十四号を出版してから二年がたち、ようやく『道南女性史研究　第十五号』をお届けすることができました。

思えば、国際婦人年を契機として誕生した道南女性史研究会ですが、おおよそ三〇年に渡って、地域の女性たちの歴史を書留めてきました。毎号、次回は出せないかも知れないという不安の中、なんとか途切れる事なく十五号まで発行できたのは、多くのかたがたの励ましやご支援があったからと思います。女性の歴史に対する関心がまだまだ薄い中で、聞き書きを通して新たな発見があり、それが私たち女性史研究会が継続している理由の一つではないかと思います。今、書き残しておかなければ、歴史の闇の中に消えてしまうかも知れない女たちの「生と性」。それをなんとしても残しておきたいという思いでここまできました。

今回の十五号には、寄稿文二篇、会員の体験・聞き書き五篇を収録しましたが、いずれもみな昭和二〇年八月十五日の敗戦で終わった戦争前後の記録です。

現在、「9・11」以降、九条改正を中心とした憲法改正論議が日本中で吹き荒れています。戦後六〇年という節目の年に、韓国や中国との関係が悪化する事態も起き、日本ではかつての戦争を忘れようとする勢力が台頭してきています。この風潮は平和の危機以外のなにものでもなく、過去を知り過去から学ぶ大切さを一層感じています。このような時代だからこそ、女性史はどうあるべきか模索しつつ、これからも歩んで行きたいと思っています。

御協力くださった方々に厚くお礼を申し上げ、あわせて本号へのご感想、ご助言をお願い致します。

二〇〇五年七月

道南女性史研究会

目次

特別寄稿

私の戦中・戦後
—悔いなき人生を求めて— ……斎藤律子……1

北海道第二師範学校女子部の頃
—臥牛の山懐に抱かれて— ……三上哲子……14

聞き書き・体験・その他

私の戦中・戦後ノート ……清野きみ……28

み心のままに —永田 美さん— ……作山すみ子……45

戦前、単身北京に渡った遺愛の卒業生
—門田昌子さんの戦中・戦後ノート— ……酒井嘉子……57

戦争の時代を生きて
—青島(チンタオ)、長岡、函館の記憶— 豊田文子さん ……四ッ柳敦子……79

韓国人の誇りを胸に —曺(チョ) 末順(マルスン)さん— ……大場小夜子……92

報　告

秩父事件一二〇周年記念作品映画「草の乱」上映にかかわって……清野きみ……104
総合女性史研究会大会に参加して……酒井嘉子……113
寄贈図書・会報目録……119
あとがき……120
住所録・奥付……123
はがき添付

特別寄稿

私の戦中・戦後

―悔いなき人生を求めて―

斎藤律子

生れ故郷に帰って

「イカ、イガー」の売り声で、朝、目が覚める。「あ――。函館に帰って来たんだ」と。リヤカーで烏賊（イカ）を売り歩いていた昔の風景を思い出す今日此頃です。

生れ育った函館の地を去って四二年、室蘭・徳島・岡山と廻って戻って来た故郷。函館弁を聞くと何故かホッとした安らぎの気持が広がります。私の育った浅蜊（あさり）坂。両隣の佐々木豆腐屋さんと井上米穀店は、当然、代替りはしておりましたが、まだ在りました。

かつて住んだ青柳町の家は、もう跡形もなく近代的な建物に変わっていました。

〝東京以北で最大の繁華街〟と云われていた十字街は、その面影もなく、スズランの咲いていた原野や畑は、いま、車や人の波です。時の流れを感じます。

どんな人にも人生を歩みながら他人にない〝宝物〟を心に持ち続けているのではないでしょうか。私の宝物の一つは、室蘭での

－後援会パンフレット－

十六年間の市議会議員をしていた当時、新日鉄独占の街を少しでも住みやすい街にしようと、一緒に手を繋いで頑張った人達が、手書きで作ってくれた『こんにちは、斎藤律子です』というパンフレットです。「律子さんの歩んだ道を書いて」と云われて、文章を書くのが苦手な私が綴った〝生いたちの記〟があります。加筆しながら振り返ってみたいと思います。

「欲しがりません。勝つまでは」

私は、一九二九（昭和四）年、函館の相生町で、兄一人姉二人私と四人兄弟の末っ子として生れました。同じ長屋には、〝酒は涙か溜息か〟〝こゝに幸あり〟などの作詞家であるかの有名な高橋掬太郎や元市議の上田小八重さんの実家・芦立産婆さんも住んでいたと聞いております。いま思えば、この年に世界恐慌が始まっていました。

生家は呉服の商いをしていましたが、不景気のあおりで貸し倒れが多く商売は旨くいかなかったようです。その後、浅蜊坂に青果物店を開き、私が小学校に入学した頃は、働き者の母が父を支え、よい品を安く、笑顔と持前のバイタリティで随分と店は繁盛しました。

朝捥ぎのとうきびを近郊の農家から直接、馬車で運んで貰い、「甘い、美味しい」と評判でアッという間に売り切れでした。

その忙しい中、母は相生町にあった日本基督教会に通い、私はクリスチャンの両親の元で厳しく育てられました。母は交際が広く、その中でも、森好春牧師、庁立高女の舎監もしていらした東マス先生、奥村季吉校長夫人の光野さんとは随分懇意にして頂いておりました。

自分が無学だった為でしょうか。優れた人々から学びたかったのだと思います。口癖のように「教育と教養は違う。お前は教養のない人間になるな。稲の穂は稔れば稔る程頭が下がる。頭を高くするな」と私に云い聞かせておりました。兄は既に京都大学に進んでおりましたが、私が庁立函館高等女学校（現在の西高）三年生の時、父が他界し、上の学校に進むのは家計から見ても大変でした。

「上の学校にいきたい」という私の願いは、周りの親戚などからも「女は行かせなくともよい」と反対を受けま

した。しかし、母はその反対を押し切って宮城県女子専門学校（現在は東北大学に包摂）に進学させてくれました。母が私を進学させようと思ったのは、自分が叶えられなかった思いを我が子に味わわせたくない、これからの女性は学問が必要なこと、もう一つは進学に反対したら律子は、一生文句を云うだろう、でも自分で落ちたら何も云わないと判断したのでしょう。私学は金がかゝるから官学、浪人は駄目、なるべく函館に近い所と三つの箍をはめられました。

どうしようかと思い悩んでいる時、生物の村松康先生から札幌の女子医専（現在の札幌医大）を勧められました。母は「困っている人からはお金を取らず、貧乏人を助ける医者になりなさい」と云いましたが、もし、私のミスで人を死に至らしめる事があったら堪えられないだろう、医者は私の性格には合わないと判断し、宮城女専を選びました。それからが大変でした。従兄弟が東大受験に使った大事な処に赤線の引いた本を木のリンゴ箱一杯詰めて貰い、俄づくりの猛勉強。なんとか入学出来たのは従兄弟のお陰だったと思います。

女専に入学した年は、敗戦の翌年、昭和二一年でした。女学校は五クラスで卒業生は二〇一名、この中で上級学校に進学したのはまだ僅かな頃でした。

戦争中は、強制的な事だらけで、女学校の時は髪型・スカート丈も規制を受け、やがてモンペ姿に変わりました。ある日、担任の森敦子先生から呼ばれ「高木さん、あなたまさかパーマネントをかけているのではないでしょうね」と注意を受けました。私は憤然として「天然パーマです！」と答えると「あゝ、それならよろしいのですが……。でも、いゝですね」と私の髪の毛を撫でました。そう云う先生の髪には、しっかりパーマがかゝっていました。勤労動員は、国鉄や貯金局にも行かせられました。七重浜や上磯方面の援農、芋掘りは大変で今と違って手作業、長い畝の畑です。手鈍な私は、一個も残さないようにと土だらけ、汗だらけの悪戦苦闘でした。

「欲しがりません。勝つまでは」の毎日でした。白い鉢巻を締めての薙刀練習の時間もありました。音楽の「ドレミファ」は「ハニホヘト」に変わり、英語は鬼畜米英の敵国語とされ、一年生の一学期まで、教科書は七頁でおしまいでした。あの有名な「敵を知り己れを知れば百戦百勝…」と云う格言はどこにいったのでしょうか。

生き甲斐を求めての青春時代

女学校四年生の夏に敗戦。今まで、正しいとされていた事が間違いという、ひっくり返る様な大転換でした。戦争中は碌に勉強も出来ず自分を見つめて生きる時間など与えられませんでした。戦後、女専に進学し、仕送りも少なく食物も不足勝ちでした。でも「人生いかに生きるべきか」を悩み、兄の蔵書の中から西田幾多郎・倉田百三・キェルケゴール・ニイチェなど手当り次第に読んだりもしました。

寮生活でしたから、徹夜で友達とわいわい議論した日々。その中で青共（日本青年共産同盟）の友人が理路整然と話していたのも、懐しい思い出です。

相生町の教会（日本基督教会）の日曜礼拝で牧師が説教の中で〝赤岩栄〟について批判しました。赤岩栄（注1）とは当時赤い牧師というので話題になった人です。私は共産党がどんな政党なのか全く判らず、ただ、うろ覚えにキリスト教は〝観念論〟共産党は〝唯物論〟。私は〝唯物論〟をいわゆる言葉上だけで判断し、〝タダ物論〟的に解釈。

唯物論者は物質が満たされれば人間の精神などは度外視する考えだと勝手に思っていました。ですから共産党の考えとキリスト教の考えを併せたら、よい世の中を実現する事が出来るのではないかなど真剣に考えたりもしました。私の〝タダ物論〟的考えが如何に間違っていたか。〝唯物論〟とは「人間らしく本当に生きて来て良かったという世の中にするために、自然や社会を科学的に分析して創りあげた理論」と判ったのは、さらに何年も経った後の事でした。

教師になって

女専を卒業した昭和二四年には、函館市内の高校には家庭科教員の欠員がなく、函館市立旭中学校に勤めました。旭中学は、平成四年に閉校となり現在はサン・リフレ函館（函館市勤労者総合福祉センター）が建っています。当時では市内でも大きい中学校で、一クラスに約六〇人の生徒。九クラスありましたから一学年が約五〇〇人。一五〇〇人規模の学校でした。教員の数は七〇人位はいた様な気がします。仲々、気骨のある個性豊かな教

師が多かった様に記憶しています。

生徒の家庭境遇も様々で裕福な家もあった反面、かなり貧しい家庭もありました。

体操の時間にはくブルマーや運動靴を買えない子供達。その頃は、完全給食ではなくアメリカからのララ物資の脱脂粉乳が昼食時に配給になりました。これはアメリカでは家畜の飼料に使われていた物で、脱脂粉乳が入っていた袋からスパナが出てきたりしてあちこちで大騒ぎになった事は何処にでもありました。

－旭中学校の同僚の教師達と－
前列右側が私（昭和27年頃）

ある時、生徒の一人が「先生。○○君、弁当の時間に居なくなるでしょ。御飯を食べに帰るふりをしているけど、家に帰っても食物がないんだョ」と私の気付かなかった事を教えてくれました。

早速、家庭訪問をすると、その家には戸がなく蓆（むしろ）が下がっていました。母親は「先生、あいにくお茶の葉をきらしておりまして申し訳ないのですが」と白湯（さゆ）を出してきました。風が吹いて茶碗の中に蓆の一片が入りました。私は「有難うございます」と飲み干しました。

世の中の様々な暮らしを肌で感じました。当時は、先生が不足で色々な教科のかけ持ちもありました。校長から「英語と歴史を教えて欲しい」との話です。私は「とんでもない。英語は碌に勉強してこないし、歴史も私達の教わったのと全く違う。ましてや免許状もないのに」と固辞しましたが、校長に押し切られました。私達が戦争中に習った日本歴史とは、日本の国は神様の剣から落ちた七つの雫から出来、天照大神が天の岩戸を開けた時から始まったと、歴代の天皇（当時、一二四代）の名前を暗記させられ、天皇は現人神（あらひとがみ）と教わりました。日本は神国であるから神風が吹いて戦争は絶対に負けないなどと――。こんな非科学的な事を教える訳にはいきません。

教師用の本はあるけれど自分で納得出来ない事は受売り出来ない。いろいろ学者の書いた日本史を集めて来て、この中から十数冊広げて、僅か一時間の授業に毎日夜中の三時まで教材調べ。昨年、当時の教え子と逢った時、「先生の歴史の授業は紙芝居を見ている様に面白かった。大化の改新のところは熱が入って今でも覚えています」と云われてびっくりしました。私自身も専門の家庭科の授業より楽しかった様に思います。五年間、旭中学校に居りましたが、函館市立東高校に空きが出来たと連絡を受け移りました。東高校に勤めていた時に、数学の教師をしていた斎藤幹雄と知り合い結婚しました。

封建色の根強い家に嫁いで

斎藤の家は、旧家といわれた網元で大黒町に住んでいた頃の全盛期には畳が百枚以上もあったそうですが、私が嫁いだ頃は択捉島の漁場も無くなり、すでに斜陽になって本町に居を移しておりました。祖父、両親、弟一人、妹四人と私共夫婦の十人家族、三世代が一緒でした。憲法では男女同権が謳われていましたが家の中はあの古い封建制が根強く残っていました。実家の母は「苦労知らずのお前はあの家では務まらない。どんな納得のいかない事があっても〝ハイ〟と云いなさい。たとえ家に戻っても敷居は跨がせない」と反対しながらも私に肩身の狭い思いはさせたくないと、斎藤家にひけをとらない嫁入り仕度をしてくれました。結婚した昭和三一年の前の年に登場したばかりの電気洗濯機も「お前は手鈍いし、大家族だから」と云って持たせてくれました。その頃の時代には、嫁入り道具に持参した人は殆んどいなかったと思います。出始めの洗濯機は今の様な全自動ではなくハンドル式の脱水装置でした。ある日、祖父の丹前下を

母と結婚半年前の私
－昭和31年３月25日－

脱水しようとローラーの間にはさみ、強く引っ張ったら袖付けの処が綻(ほころ)びました。「洗濯機という物は布が痛みますね。洗剤も水も随分使いますね」と姑に云われ、それ以後、私は二度と洗濯機を使いませんでした。

結婚がきまり、斎藤家に挨拶に行った際、両親に「結婚してからも律子を勤めさせて頂きたい」と母が頼んだそうですが「ウチは、嫁に働かせるまで落ちぶれては居りません」と断わられたと云っておりました。

斎藤家としては長男の嫁は良家の子女で、学歴は女学校程度、右を向いて居なさいと云ったら何時までも右を向いている様なおとなしい人が望ましかったのだと思います。私の母は我が子が何も出来ない嫁だと云われまいと、私が退職した次の朝から弁当を作って「今日から、縫物を習いに行きなさい」と命令しました。お茶やお花の稽古事は一応していましたが縫物も出来なければと思ったのでしょうか、私には一言の相談もなく裁縫の先生を見つけ、結婚までの半年間、毎日、朝十時から午後三時まで、縫物の個人教授を受けさせられました。着物も一人で着れる様でなければと思ったのか、それまでお茶のお稽古の時など母が着せてくれておりましたが、着付けの特訓も受けさせられました。何しろ旧家なので結婚式から一週間、誰方が挨拶に見えるか解らないので和服を着ている様にと云われ母の特訓がすぐ役立ち、縫物もお陰で姑から褒められました。

－夫・幹雄と結婚当時（昭和32年頃）－

祖父栄三郎は、昔、区会議員をした事があり、信用金庫の理事長や商工会議所の会頭もしていましたが、私達の結婚には大喜びで五島軒での披露宴の凡ての準備やら、私にダイヤの指輪を贈ってくれたり、結婚してからも「寒いからあたりなさい」と優しい言葉をかけてくれるなど威厳はありましたが、心の暖かい人柄でした。私達

夫婦が住む離れも用意し、母屋と廊下でつないでくれましたが、私はその離れには殆んど居ることがなく四六時中母屋での生活で、坐る場所は何時も下座でした。実家から母や兄が盆と暮には挨拶に来ていた様ですが、私は「行っていらっしゃい」と云われない限り実家には行きませんでした。たまに行っても長居はしない方がよいのではと判断し、一時間程度で帰る様に心掛けました。帰り際に母は必ず護国神社の通りまで出て見送ってくれ、私の姿がずーッと坂下の入村質店辺りに小さくなるまで、立っていました。

ある雨の日、紺地の着物を解いていましたが、だんだん暗くなり布地を切ってはいけないと窓際に移った途端、「そこは、あなたの坐る場所ではありません」と姑に窘(たしな)められました。「ハイ」と云って暗い元の場所に戻り、溢れ出そうな涙をぐっとこらえました。私の安らぐ唯一の場所はお便所でした。庭に面したポカポカと陽が当たる広い便所で便器に跨がり、よく居眠りをしたものです。

『山宣』を読んで共産党に入党

色々な思いの中から「嫁とは何か」「女とは何か」を考え〝女性の解放〟を掲げる日本共産党に入党しました。入党の時に二つの疑問がありました。一つは「クリスチャンであることと矛盾しないか」もう一つは「自分はついてゆけるのか。止めたい時は拘束しないか」でした。夫の幹雄は、私の母が戦争中、教会の前に官憲が立っていた時も礼拝に通い続けた事を知っていました。彼は「正しい事を貫くのは勇気のいる事なんだよ。俺達二人の共通の土台は、よい世の中を創る為の道を一緒に歩む事だ」と話してくれました。私の入党の積極的な動機となったのは『山宣』という本です。「こんな生き方があるのか」という衝撃を受けました。『山宣』と呼ばれた山本宣治。私の生れた昭和四年、あの悪名高い〝治安維持法〟に反対し、右翼に暗殺された人です。「山宣一人孤塁を守る。しかし背後には民衆が……」の碑が物語る労農党代議士でした。死後、共産党員として葬られました。京都の大きな老舗(しにせ)の旅館に生まれ、植物学者として生きていれば何不自由なく暮らせたものを、命を賭して民衆の

為に筋を通して生きぬいた人でした。同時に幹雄の影響も大きかったと思います。夫は北大の学生時代、イールズ事件（注2）に関係し、思想を変えれば大学に残すという学部長の言葉を振り切って大学を去りました。身についた社会主義の理論をひけらかすことなく、暖かい人間愛で私を包んでくれる共産党の人間像がそこにあったからです。

新日鉄独占の街・室蘭で

昭和三七（一九六二）年、夫が函館の市立東高校から室蘭の道立高校に転勤しました。当時は全国で〝アカ〟と思われた教員の転勤が行われていました。

二人で降りた室蘭の街は新日鉄の高炉の煙が立ちのぼり、家々は茶褐色で染まっていました。凄い公害の街。私は「こんな処にずーっと住むことになるのかしら」の思いがしました。転勤して間もなく夫が「警察が校長に今度函館から来た斎藤には注意して下さい」と云ってきたと私に話しました。

室蘭の三〇余年は、まさに私の人生にとっての試金石でした。高校の時間講師をしていた私に、新日本婦人の会室蘭支部の事務局長にという話がありました。これが川股きみ子さんとの出逢いでした。彼女は五九才で世を去りました。私は〝永遠の友よ〟という次のような追悼の文を書きました。

「……私が事務局長をした時、しっかり私を支えてくれ、キミちゃんを通して婦人運動を教わりよき指導者でした。……私の母が急逝し、函館に向かうべく駅にいると走って来て白い封筒を渡してくれました。中は私を察して書いた手紙で、これがキミちゃんの形見になりました。この一通の手紙は私の生涯が終わる時、共に灰になるでしょう。私の忘れえぬ永遠の友よ」と。

昭和四一（一九六六）年、東京で開催された第十二回日本母親大会の河崎なつさんのことも忘れられない思い出です。実行委員長をしていらした河崎さんは、後で知った事ですが、その頃食べ物も呑みこめない程とても衰弱しておられ、囲りの人々が心配してテープでの御挨拶をと勧めたそうですがそれを断り、壇上に立ってふり搾る様な大きな声で「母親が変われば社会が変わる」と三度繰り返されました。間もなくその年の十一月に亡く

なりましたが、私達日本の女性に対し、生涯をかけての叫びだったのだと思います。たゞ一度だけしかお目にかゝったことのない方の死に一筋の涙が流れました。私は四〇年近く経った今でもあの時の河崎なつさんの全身からふり搾る様な声を忘れる事は出来ません。私は多くの人々から教えられ支えられながら歩み始めました。

市会議員になって～室蘭民報から

幹雄は、昭和四五（一九七〇）年に教員を辞め共産党の常任になりました。

思いがけず私に市会議員に立候補をという話があり、家を売って白鳥台団地の市営住宅に移り住みました。「女性を議会に送ろう」を合言葉に多くの人々が頑張って下さいました。

当選。新聞は「十二年ぶりの紅一点。初陣・二位当選」の見出しで「市民とくに女性層の地位向上、明るい家庭の建設に一筋の灯ともる」（「室蘭民報」五〇年四月付）と書きました。その頃の室蘭市の人口は約十六万人。議員定数は四〇名でした。

街はずれの白鳥台は、毎晩の様にピーポーと救急車が走る〝医療砂漠〟の団地でした。人口一万人の団地に内科・小児科を兼ねた医院が一軒しかありません。町内会や自治会などあらゆる団体に呼びかけ、〝病院を建てさせる会〟を作り団地有権者の五〇％を上廻る署名を集め、対市交渉や、道衛生部交渉など三年間にわたる住民運動を広げました。私も粘り強く市議会で取り上げ、遂にベット数三五〇床の〝太平洋病院〟が建設されました。

議員の活動を市民に知らせるのは議員の責務です。私の二番目の〝宝物〟は『こんにちは斎藤律子です』の通信を綴った物です。

毎週、プリントゴッコのカラー刷りで十二年間続けた六四〇号の色褪せた分厚い一冊。一号から綴じていた人もおりました。

団地の住民から「ものすごくガス臭い」と知らせがあり、その原因が団地の下にある日本石油室蘭製油所である事を突きとめ、市議会で追及しました。

「私の買った分譲地が、おかしいから調べて下さい。他党の議員に頼んでも埒があかないので――」。調べてみると、白鳥台の個人の分譲地は総て過不足があり、十

一年前の市の団地造成はデタラメでした。全国でも滅多にない行政の欠陥について昭和五二年の九月議会で追及しました。永年保存しなければならない筈の書類は出てきません。なんと杜撰（ずさん）な事をやったものです。市は住民に対して土地の不足分は返金するが、多い分は払い戻せという態度に出ました。これは凡て行政の責任であると厳しく追求し、多い部分は固定資産税の補償も含めて住民から取らない事で一件落着。

新日鉄、日鋼の会社、労組から推された議員の中には、市民の声を市政に生かそうと頑張る私達共産党議員を〝目の敵〟の様にしている人も中にはいました。議会で私がある労働問題を取り上げた時、「会社を名指しで発言したのはよくない。現在係争中の事を議会で取り上げるのは問題だ。発言を取り消せ、取り消さなければ懲罰にかける」と新日鉄出身の議長から圧力がかゝりました。会社の名前は新聞でも公表され、市民も衆知の事で、議会人としての立場から労働者の権利を守る発言は当然でこれを妨害する行為は許されません。私は「発言は取り消さない。懲罰をかけるならかけなさい。議会が下した判断が正しいか、市民の判断が正しいか。私は毎日市内を宣伝カーで廻る」と一歩も引きませんでした。懲罰は飛んでしまいました。

医療、生活保護、道路、街灯、サラ金など様々な相談に取り組みました。ノートで調べましたら昭和五四年から四年間で一〇五八件ありました。ついた渾名が〝かけこみ寺の律子さん〟でした。十六年間の議員生活で沢山の手紙や電話が寄せられました。

行動する党に社党は脱皮を

無職　千葉　臨治（室蘭市・79歳）

社会党は今回の党首交代劇でスンナリと石橋新委員長を決めた。混乱もなく、これという反対もなく、その交代が決まったことは、まことにめでたしというところであろう。しかし、この委員長交代で社会党が今までの低落基調を脱し得るであろうか。私は「ノー」と言いたい。

かつて飛鳥田氏と委員長ポストを争った下平元副委員長はその選挙戦でいみじくも言ったではないか。「社会党は実践力のないオシャベリの党である」と。私はこれが現今の社会党にいだく大方の不満であると思うのである。

室蘭市が大雨のため被害があった時、一番先にわれわれの地区を見舞い、その実情を把握して、被害者をはげましたのは、市議である共産党のS女史だった。この人たちのまことに行動力に富んだ行為を私は今でも忘れることが出来ない。この人らの尽力、配慮がどれほどあったかは知らないが、数日後にはガケ崩れの危ない家の前には立派な土留めが構築されていた。

しゃべることもいい。宣伝することもいい。しかし、それに実践、行動が伴わなくてはわれわれにとってまことにむなしいことである。今回の新委員長も決して言葉の少ない方ではない。われわれはこれを迎えるに当たり、その言の葉に美しい実をむすぶことを切に願うものです。

1981（昭和56）年
5月8日付
道新〝読者の声〟より

「御夫婦で先生をしていたら恩給がついて楽な生活なのに、風呂も無い団地の市営住宅に住んで、毎日あちこちの家に行って膝を交えて話し合うのは共産党でなければ出来ない事です。電話一本ですぐ来て下さる先生……」と。

函館を終焉の地として

みなさんに支えられて無我夢中で過した十六年間の市議活動。六〇才を過ぎて次のステップを考える時期になりました。

徳島に住んでいる夫の教え子が市会議員になったばかりの頃でした。「徳島に来て呉れないか」という話です。二人で相談して〝津軽の海を渡る〟ことにしました。

もう二度と北海道には戻らないだろうと、去る前に小樽の港の見える小高い丘にある〝小林多喜二〟の碑を訪れました。デスマスクの下に誰か供えたのか命日でもないのに美しい深紅のバラが置かれていました。

徳島に三年余、岡山に約八年住み、一昨年函館に戻りました。早いもので二年余りが過ぎました。昨年、催された〝春を呼ぶ女性の集い〟で酒井嘉子さんから〝函館出身の二人の女性〟についてのお話があり、私は大変興味深くお聞きしました。その中の一人である門田昌子さんは現在、東京在住で区と都の議会議員をされた人で私も何度かお逢いしたことのある方でした。酒井さんとの出逢いで、この度の原稿を書く事になりました。

昨秋、庁立高女の時の先輩である清野きみさんのお誘いで秩父事件〝草の乱〟上映実行委員のメンバーに加わりました。

あっという間に過ぎた七五年だった様な気がします。これからもなんとか前向きに歩み続けたいと念じながら筆を擱きます。

斎藤律子さん（旧姓　高木）略歴

一九二九（昭和四）年、函館生まれ。

青柳小学校、庁立函館高等女学校を経て、一九四九（昭和二四）年、宮城県女子専門学校卒。函館市立旭中学校、函館市立東高等学校教諭。

新日本婦人の会室蘭支部支部長。

一九七五（昭和五〇）年から一九九〇（平成二）年

まで、室蘭市議。
現在、函館市湯川町に在住。

（注1）　赤岩栄は一九〇三年愛媛県出身のキリスト者。一九三一（昭和六）年、論文「マルクス主義とキリスト教」執筆。三六年日本キリスト上原教会牧師。戦争末期、徴用され、軍需工場で働かされた反省の中から戦後の活動を展開、一九四八（昭和二三）年日本キリスト教団主催の全国指導者修養大会で日本共産党支持の発言をし、翌年の総選挙で共産党立候補者を応援して、教団から離脱勧告をうけた。翌年共産党入党。一九六六年、六三才で没し、上原教会に埋葬。著作多数。

（注2）　北大イールズ事件。一九五〇（昭和二五）年五月十六日、北海道大学におけるGHQ民間情報教育局教育顧問W・C・イールズの共産主義系教授排除の講演会は学生の阻止で中断するが、退学四人、無期停学四人、停学一年一人、譴責（けんせき）一人の学生処分が決定した。（北海道大学125年史編集室編『北大125年』二〇〇一年より）

北海道第二師範学校女子部の頃

―臥牛の山懐に抱かれて―

三上哲子

はじめに

道南女性史研究会の酒井さんより、「谷地頭に函館師範学校の女子部があったことを知らない人が多い。是非そのことを書いてほしい。」という依頼があった。

たしかに私は女子部を卒業しているが、卒業後六〇年も過ぎて、すべてが茫々漠々の世界。まったく心もとないので再三辞退したがことわりきれず、それではということになった。

とりあえず同期の幾人かに情報提供を願ったり、教育大学函館校の図書館へ足を運んだりしたが、敗戦の翌年設置された女子部の資料は極端にすくなく『北海道教育大学函館分校創立六十年史』（以下『六十年史』という）にも女子部設置の項目で三枚だけであった。他にはセピア色をした冊子『北海道第二師範学校創立三十五年並女子部設置祝賀記念誌』だけで、私の意図したものは見出せなかった。

手元には夕陽会発行の『八十年誌』や同期会が折にふれて発行した記念誌『巴水』や五〇周年記念の『源遠流長』と、立派な表紙の記念誌があるのだが手掛かりはありそうでない。

しかし、引き受けた以上その責をなんとか果たしてみたいと思う。

師範学校予科

昭和18年３月、官立の師範学校が設置されたとき、修業年限２年の予科が開設された。その後出された「師範教育令」により、19年度入学者より修業年限が３年と定められている。予科入学者は昭和18年には78名（この年既に予科２年116 名、３年112 名の在籍があった）、19年80名、20年77名、21年（この年より女子部が設置される）105名、22年137 名となっている。昭和22年の３月、教育改革により修業年限が４年となった。

４年修業に該当する学生は昭和25年卒業生103名、26年の128 名である。

（『夕陽会80年誌』p26より）

昭和21年（一九四六年）

本科入学　男子約六十名、新設の女子部本科入学約五十名予科よりの進級者約七十名、合計百八十名となる。

女子部創設され、谷地頭小学校校舎を利用、専門教科により履習時共学となる。母校創立三十五周年並びに女子部設置祝賀式典、祝賀行事として作品展・音楽会・運動会・紅い鳥童話大会を実施。

（『源遠流長』p19より）

女子部が谷地頭に設置された頃

『夕陽会報一四四号』（平成三年発行）に、共学への模索－女子部草創期－として、同期の近況を知らせる欄に岡田溪子（女子部一期生）さんは書いている。

「女子部の発足は終戦の翌年になる。学芸大学分校要覧によると『昭和二十一年六月二十二日函館市より寄付の旧谷地頭国民学校の校舎に女子部を設置する』とあるが、入学式と続く数日間の授業は、休暇中で人影のなかった本校校舎で行われた。暑い時期であった。今にして思えばこの年が、六・三制実施の前年で、母校の三十五周年にも当たり、女子部設置への対応を急がれながらも、実施に苦慮した発足であったことがうかがわれる。谷地頭へ移ったのは二学期からである……。」

終戦の翌年がどういう状況だったのか、『六十年史』に「生きねばならぬ」飢餓からの脱出として記述がある。

「戦争がもたらすものは、いつどこにおいても荒廃である。数多く失われた命、各所にくり広げられた悲惨な破壊、そして何よりも恐るべき精神の荒廃、絶望、虚無、退廃など、それらすべてを包んで敗戦後におとずれる混

迷の中から発せられる声は、『生きねばならぬ』の叫びである。敗戦直後わが学園においてまずなされねばならなかったのは、援農のため道内各地に散在していた生徒の学園復帰また授業短縮によって卒業させられ出陣していったものの学園復帰そして授業再開であった。」

女子部の設置は戦後の混乱と資材の欠乏のなかで、占領軍の諸政策を背景として強行されたと『六十年史』にある。占領政策としての婦人政策（現代婦人問題講座1）によると、「日本における戦後民主々義の出発はそれが数百万の同朋の死と血、世界最初の原爆の被災という人類の歴史にかってなかった苛酷な結果として購われたものとはいえ、そこには非常に特殊な条件がその過程を制約していた。それは連合軍、とくにアメリカ占領軍による軍政のもとに日本の新生がはじまったということである」と論じているが、『六十年史』では、戦後女子教育の方針として次の記述がされている。

「戦後の教育改革が実質的意味で始まるのは昭和二十一年三月来日したアメリカ教育使節団の勧告を受け入れた後からである。しかしそれに先立つ昭和二十年十月GHQ（占領軍）からいわゆる五大改革（注1）が提示され、その中の一つとして婦人解放、男女同権が要求された。その結果政治面では昭和二十年十二月成立の新選挙法における婦人参政権として実現され、教育面では「女子教育刷新要綱」が閣議決定、方策が示されたとある。その内容は「男女の教育の議会均等、教育内容の平準化、男女相互尊重」を基本方針とし、具体的には女子に対して高等教育機関を解放し、女子中等学校の教育内容を男子中等学校と同程度とし、大学における男女共学を実施すること（文部省編「学制百年史」）である。」

敗戦後の昭和二一年四月一日勅令第二〇八号『教員養成諸学校官制』が定められ、恒常的に不足していた教員の養成が急務となり、教員養成機関としての北海道第二師範学校に女子部が急遽設置されることになった。

私と同じく女子部一期生の大川原洋子さんは、この間の気持を次のように手紙で回想する。

「函館に女子部が出来るまでは、青森か秋田の女子師範に行くしか道はなく、高女の専攻科を卒業して教員資格をとるのが大部分のコースだったようです。当時女学校を出るということは、小学校の一学級で一割たらず、他は高等科へ進むのが大部分でしたから、その中で教員

志願の前途は大変だったのです。学費は免除とはいえ、函館を離れて過さねばならないわけですから誰でもが出来ることではなかったのです。その意味で女子師範の存在は函館人の一部には羨望の的でもあったと思われます。」

大川原さんは卒業後谷地頭小学校に勤務しているので、学校創立六〇周年記念誌『谷地頭』を持っていて、資料として見ることが出来た。その記念誌の巻頭文には看過できないものがあった。学校長松浦直文氏は「……しかし想起すれば、本校の今日までに至る道程は決して坦々たるものではなかった。太平洋戦争末期には、廊下に仕切板が設けられて校舎の半分は兵舎となった。昭和二一年には更に致命的な衝撃を受けた。廃校である。全生徒は青柳小学校に移送されそこで卒業した。校舎は師範学校女子部の、そしてその後は男女共学の同校予科の校舎として使用された。このように本校は他校と異なって教育の目的や方法等に改変があったという程度だけではなしに、学校そのものの存亡という極めて重大な問題とかかわりながらここまできたのである……。」と実情を校舎の改変に事寄せて嘆いている。

函館へ女子部を設置をとの要請は早くからあった。昭和十五年に設置の札幌、昭和二〇年設置の旭川より遅れたのは、函館市には女子部設置に振り向ける校地や校舎の余裕が無かったためである。時代の要請とはいえ多くの関係者の複雑、深刻な想念を振り切って、女子部はあわただしく設置されたのである。

当時予科へ入学した笹浪貞子さんに回想してもらう。

函館に師範学校女子部設置

笹　浪　貞　子

「女子部設置」のニュースを知ったのは、私が国民学校高等科卒業を前に、将来への夢を持ち得ないでいた終戦数か月後の頃だったろうか。予科生四〇名募集という。

入学が決まった時は、未来への扉が開かれる思いで次の要項案内を待っていた。しかし、開校は七月。入学式は男子部の校舎を借り、わずか十日間で夏休みに入る。満されない思いでの帰省……。どんな環境で二学期を迎えられるのだろうか。ハングリーの中で勉学心は、少しずつ高まっていったように思う。やがて九月。谷地頭小

学校の校舎を使う事、宿舎として一教室を割り当てられている事などを知る。

本科、予科生合わせて十三名の寮生が、畳を敷いただけの大部屋に、寝具と僅かばかりの荷物を置くスペースを、それぞれに確保する。プライバシーも何もない共同生活が始まった。食事は別教室で炊事係が担当、私達は食後の食器洗いだけが約束事である。食糧難時代のこと、食欲は決して満されるものでは無かったけれど、時間的には自由だった。勉強すること、本を読むこと、語ることが私たちの生活のすべてだったように思う。肩に力を入れ、背伸び人生も、今は懐しい。

二・三才より年令差のない本科生が大人のように感じられる。暗くなってから廊下伝いに行かねばならないトイレは嫌なものだが、上級生から怪談を聞かされ、オッカナビックリ二・三人連れ立って、大きな声で歌いながら用をたしたのも忘れがたい。授業のベルが鳴るギリギリの時間に、クラスへ駆け込めるのは、寮生の特権でもあった。教科書も文具も何ひとつ満足なものは無かったけれど、学習も教師も級友も、快い緊張と刺激を与えてくれる。

二学期が初まって間もない頃だったと思う。一枚の大きな模造紙風なものを手渡された事があった。表・裏ビッシリ何か印刷されている。指導教官の説明によると、テキストを作るのだという。何回か折り曲げて、ハサミを入れ、ページの順番を間違えずに閉じると、薄っぺらではあるけれど、当分の間は使えるテキストが出来上る。ほとんどの教科が、先生の声に耳を傾けノートをとる形で進められた中で、この手づくり本は有難い。教師個人の発案であったのかどうか。ある先生は、週三・四時間の担当教科を『人間学』と稱して、宗教、哲学、文学を要素にした講義で生徒を魅きつけたし、授業が終り廊下でも質問を受け付けてくれた。

美術の時間、画用紙が手に入らず、西洋紙を代りに水彩えのぐを使い、ビショぬれたまま途方に暮れたこともあった。

翌年の四月、函館八幡宮近くに引越すことが出来た寮生は、ようやく人並みの住まいが得られる。学校は、予科生全部が谷地頭校舎で、初めての男女共学を経て、学芸大学へと形を整えていくのである。

昭和24年３月　送別会
寮生活を終えて旅立つ一期生（前列）

寮の同室メンバー
哲人そろいで雰囲気が固いと
中道さんは言う。
前列中央が三上さん

昭和23年５月
（写真は中道三子さん所有）

昭和二一年は食糧危機の最も深刻な年であった。しかもインフレ、旧円封鎖、新円発行がそれに続きすべてが混乱の中で喰うための苦しみに長い間あえいでいた時代であった。この様な環境の中では教育そのものも混迷の中にありすべてが右往左往していた。しかし教官と学生とが裸で接し合える楽しさもあった。乏しさをわけ合いながら、人間いかに生きるべきかの核を学び、教えられたのである。

昭和二二年には、女子部寮は八幡宮下の保育園が寮として使われることになった。私は本科二年になってこの寮生になり、多くの思い出を残す日々を送った。

寮生は、室蘭、虻田、豊浦、岩内、銀山、瀬棚、江差、八雲、森など道南一帯から集まって生活を共にした。出身地の室蘭で教職を全うした一級下の斉藤静子さんに寮生活を思い出して原稿を寄せてもらった。

青春のシンボルとしての寮生活

斉　藤　静　子

今、手もとにセピア色をした古い写真があります。師範学校女子部寄宿舎の玄関前で、写したものです。十七名の予科、本科生と、舎監の先生、賄いの小母さん夫婦。みなの笑顔と共にここで過ごした三年間の遠く懐かしい思い出がよみがえってきます。当時、女性の進学の道はせまく東京への夢も消えていた時、師範ならと親に許されてようやく入学できた学校でした。その学校や寮での生活で、まさしく、初めての貴重な体験をしました。個性あふれる先生方の講義をとおして考えもおよばない広い学問の世界にショックを受けたこと、親元を離れた寮生、友とのふれ合いの中から生まれた強いきずな、この三年間は私にとって、まさに青春の維新とも言うべき時代でした。

寮は、もとは幼稚園として使われていたのでホールを入ると右側に二階への階段、調理場があり一番奥が遊戯場で、そこに目の粗い古畳を敷きつめた所で寝起きしました。その後二階へ移り、払下げられた病院用の古ベッドを使いましたが、ベッドで寝れることが嬉しくて、バネのはずむ感触を味わっては、眠りにおちたものでした。

何といっても一番の思い出は粗末な食事でした。南瓜やじゃがいも入りの雑炊、蕗や豆が浮いた汁ものなど。

―成長期の私たちのために物のない時代小母さんも大へんだったことでしょう。―ついにがまんし切れなくなると勉強にも身が入らなくなります。友と目で合図をすると家から持ってきた貴重なお米を出しあってこっそりと炊き出しをするのです。遊戯場の隅でこんろで炊いたごはんと梅干しの味は今でも忘れられません。昼食はすいとんを食べに谷地頭の坂を走り下り、また午後の授業にかけ上っていくのですが、あたりは閑静な所で庭木に囲まれたしゃれた感じの家が多い中、学校へ抜ける野原の近道を息をはずませながらよく往復したものです。

また、当時パン屋では小麦粉とパンを交換してくれました。谷地頭終点前にあったパン屋さんから小さなパンを大事に抱えて帰った記憶も懐かしいです。服装は女学生時代の制服や手編みのセーター、ブラウスやスカートなどは自分で作った物を使いました。一度、空き巣に入られて貴重なセル地のスカートや初めて作ってもらった革靴が盗まれ、その口惜しかったこと今でも忘れられません。貴重なレコードでシューベルトの「未完成」や、「鱒」を聴き音色の美しさに感動したこと。先輩の卒業を祝って寸劇をしたり、古い蓄音機から流れるメロディにのってダンスをしたり、夜遅くまで議論に泡をとばしたり思い出はいっぱいです。寮は家庭であり寮生は家族でした。あの不自由な時代を大きなトラブルもなく過ごせたことは、家族としての思いやりや協力心、そして、若さのエネルギーだったのでは、ないでしょうか。

谷地頭の寮は、今でも私の青春のシンボルとして残っています。

女子部の寮に、哲学の山田宗睦先生が一時期お母様と住むことになった。哲学の授業はギリシャ神話から始まった。実存主義とかカントの哲学理念とか京大哲学科出の先生の師西田幾太郎、田辺元など、そのうちマルクスの資本論になった。どれも興味深かった。休日になると寮生たちは先生と散歩に出かけたりした。デカンショ節は男子学生たちがよく歌っていたが、デカルト、カント、ショーペンハウエルという哲学者の名をもじったものとこの時代に知った。

女子部設置祝賀の催し

記念式典、来賓、同窓生、父兄その他関係者五百余名、職員、生徒、児童代表約六百名が席に着き、荘厳に記念式典が挙行された。

山中肇校長は「……茲に三十五年の歴史を持つ当校に女子部の設置を見て、名実共に備った師範学校となった、…略…殊に婦人参政権は与えられ、婦人の教養、地位の向上が叫ばれる時代に於て本校女子部が誕生したことは、函館市に於ける唯一最初の女子専門学校という意義に於ても、其の健全なる成長は社会の注視を浴びていると申すべきでしょう」と述べ新しい文化国家建設の為に、永遠の平和に輝く人類世界の実現の為に、偉大なる歴史を創造してゆく気魄をもって進んでもらいたいと檄文を残している。記念行事、研究会、北海道第一、第二、第三師範学校聯合研究会を挙行する。付属の先生方による研究授業、國民、理数、体錬、芸能の四部に分ちそれぞれ真摯な討議が行われた。

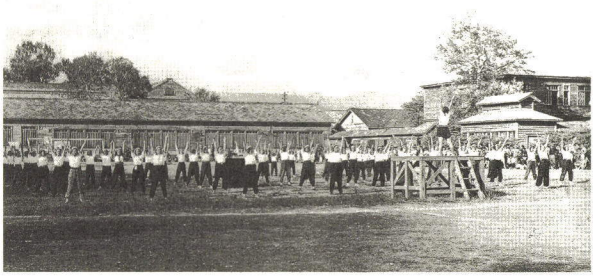
○講演会　新教育の理念と題して山中肇校長満場立錐の余地なき盛況、熱弁は全聴衆に深い感銘を与えた。

新憲法の理念　東北帝国大学教授高柳眞三高柳博士は、改正憲法の由来より、内容へ、その受け入れ方、女性の権利の自覚に及ばれ深遠なる学理を平易に説き満堂の男女両教官に深大なる感激を与えた。

○展覧会　図画、書道、工作は本校階上教室と図画教室で催された。

○運動会

○音楽会　記念行事の最後を飾り午後六時から市内の宝劇場で華々しく開催。男子部女子部による混声合唱で、校歌と記念祝歌が、編曲作曲者の林教授指揮のもと荘重に演奏され万雷の拍手を浴びた。第三部は特に当夜の白眉をなす曲目、無伴奏混声合唱「霜の旦」「閃く星」はアカペラ特有



女子部設置記念運動会　昭和21年10月６日
（写真は寺井和子さん所蔵）

混声合唱　－北海道第二師範学校創立35年記念
並びに女子部設置祝賀音楽会－
（宝劇場にて、昭和21年11月13日夜　寺井さん所蔵）

の合唱の醍醐味が遺憾なく発揮され、「子等を思ふ歌」では現代日本に於ける作曲第一人者信時潔氏の芸術が心にくき迄に表現され、函館市に於ける最初の学生による混声合唱として聴衆を魅了した。当時の写真は古色蒼然として、今昔の感しきりである。

臥牛の山懐に抱かれて、先生と生徒の交流「友好の源は遥かに遠く、その関係はいつまでも長く続く」の意味を持つ『源遠流長』と『巴水』の中から、谷地頭にあった女子部を偲ぶ二人の同期の文を拾う。

スプリング・エフェメラル－はかない春－

岡田　溪子

……山田先生は函中時代、胴乱と地図を携えて函館の近郊を歩かれ、現実（オリジナル　植物や地形）と概念（コピー　図鑑や地図）の関係から哲学的思考の礎地を作られたという横津の連山を、わが哲学の原風景と名指しされた。私には思いの中の花々の美しさ、はかなさ、かしこさ、たくましさ、そしてまた、そののびやかさが同期の面影と重なって偲ばれる。魂の揺籃期を育んでくれた谷地頭の、早春の光の中のスプリング・エフェメラル（注2）が原風景のように懐かしい。

（『源遠流長』より）

おせんべいと蕪村

伊藤　万喜

……国語の石田先生が「今日の午後は外へ出かけて授業しよう――お菓子でも買って…。とお金を下さったのです。戦後の開放感の中にあっても「楽しみ方」となると全く発想の乏しい私たちでしたから、いただいたお金に少々戸惑いながらも大喜びでした。

校舎の裏の山道を立待岬寄りに少し行った所の草原に十数人で車座になり、おせんべいを広げ、先生が印刷して下さった蕪村の作品を鑑賞しましたが、その時初めて「春風馬堤曲」を知り、蕪村が自由詩を書きあげていたこと、そしてその作品の新鮮さとに驚き、十字街の浪月堂で七部集を買ったりしたものでした。

（『巴水』より）

教育実習のこと

一期生は三年になり教育実習が課せられ、十二週の実習期間で、一学期のほとんどが当てられた。私は付属小、大森小、光成中で実習。当時は小・中校両方の普通免許取得の基礎資格として、教育実習が必要であった。実習の期間それぞれ市内の学校に分散、然しこの期間の思い出が鮮明に残っている人が多い。

昭和二四年三月、一期生はそれぞれの任地に職を得て、卒業して行き、その後谷地頭校舎は予科の男女共学の校舎となっている。予科四年を谷地頭で学んだ被服科を専攻した相馬勝子さんに当時を回想してもらう。

新聞紙の原型　被服科を選択して

相馬　勝子

自然のむしろに、黄金の玉散り／恵みの御光り、輝き渡りぬ／森にはさえずる　ももちの小鳥／谷にはかなずる、泉のほとり／名もなき小草の、けなげな姿／いとしと語りし、春日もありしな／心も晴れゆく、み空のかなたゆ／静かぜ招くを、急がずや小牛よ／

予科生が集まると心を一つにしてハモル牧歌です。六〇年前のオカッパ頭の顔が思い出され目頭に熱いものを感じます。牧歌を口ずさむ時いつでも予科時代にかえれる、絆のあることを幸福に思っています。

昭和二四年四月、男女共学、六・三・三制度となり予科四年を学ぶことになり、私は家庭科・被服科を選択。山中きみ先生（お茶の水女子大出身）の一時間目、担任のご挨拶の後、被服科は洋服を仕立てるとの説明で、とても嬉しかった。先生の着衣は紺のスーツにエンジ色の斜のドレープを流した、見た事のないすばらしいデザインで目に焼きついています。

講義はブラウスとスカートの作成にすぐ入る、洋服生

地の無い時代で人絹が少し出て来た位なので、和服地又は男物の二重マント、防空服の更生物の布地利用、被服室は無くミシン、ボデー裁台、カーブ尺も角尺も、何も無かった。メジャーは紐を使った。自分のものが縫えることで皆わくわくしていました。

製図は教室で、新聞紙利用の自分の原型を作る、布の裁断、仮縫は宿題でした。着物巾がせまいと接ぎ合わせたり、つくろったりして裁断は畳の上でやった人もいました。仮縫い前身頃前の折り返し、肩線を縫い合わせ、前後の脇縫いと順序を指導の通りにする。肩線の少しの丸み、胸の高さを出すのが難かしかった。仮縫着用、教壇に上り一人一人補正の仕方を教わり、始めてのことばかりで、洋裁・洋服作りはめんどうな仕事と実感したものでした。ミシンの無い人が、土曜・日曜と私の家に集まり、洋裁教室のように賑やかに、一生懸命縫いました。ピンタックをブラウスにするのが大流行で、私は何人分も縫いました。山中先生のお話上手、話題の豊富さに、あっという間の二時間、和気あいあいの中に終るのが惜しまれる程、楽しい授業でした。

被服科は共学とは何ら関係がなかったけれど、卒業前の修学旅行が、とても心に残った行事でした。

学制改革と師範学校の廃止

谷地頭に女子部が設置された翌昭和二二年、学制の変動がはげしく六・三・三制が実施され、新制中学校の校舎不足で函館市は四苦八苦。その上新制大学を発足させようとしていたから師範学校女子部本科の募集は、一期生卒業後停止、予科制度はアメリカ教育使節団から廃止の勧告がされ、昭和二二年度入学生を最後に募集が停止された。私が卒業後、昭和二四年度学芸大学が発足、本科二年、三年と進んだ下級生は八幡町にある本校で男女共学となった。予科はその年度一年間谷地頭校舎で男女共学となった。

昭和二五年四月、谷地頭の校舎は再び函館市へ返還され谷地頭中学校として使用される。めまぐるしい学制改革の中で、私たちは過したわけである。同期の大川原さんは、「女子部というのは、戦後の函館に咲いた数年間の『幻の花』みたいだった。」と回想しているが、全く同感である。

おわりに

学舎（まなびや）は青少年研修センター（愛称ふるる）になった。平成八年七月開館したばかりのふるるに十三名の同期が集まり見学した。同期会ノートに門馬喜久栄さんが記録を残していた。

「…明かるい感じに変身した校舎の外側をまわって中に入り、メモリアルホールで教職にあったころの展示物に約五〇年前の事柄を確認。生徒のいすに腰かけて、三上さんが持参した山田先生を囲んでの話し合いのテープ（ＮＨＫでの）（注3）と岡田さんの旧懐の思いあふれた朗読を聴く。その後センター職員に全館を案内していただき、質素だけれど機能的な宿泊室、浴室、体育館、食堂を見学した。…」

鳩の巣喰っていた学舎は形をかえ無くなっていたが、女子部はそこに存在した。敗戦後の三年間その時代を生きたという思いは消えない。記憶はそれぞれ、ひとくくりには出来ない。ひとりひとりの自分史を持っている。

聞き書きの女性史を緻密に綴る意味が、だからこそ大切なのだと思いながら擱筆（かくひつ）する。

同期の寺井和子さん大川原洋子さん、そして中道三子さんには、この稿をまとめるに当ってご協力をいただいたことを感謝いたします。

三上哲子さん（旧姓　高木）略歴

昭和二一年、庁立八雲高等女学校卒業。

高女一年のとき、父（当時、山崎小学校校長）の勤務する学校で、援農に行くかわりに代用教員を勤めた。卒業後、父のすすめで、昭和二一年開設したばかりの函館師範学校女子部に進学。大町に下宿して徒歩にて谷地頭へ通う。二年目から寮生となる。父はじめ七人兄弟全て教師となった教員一家。

（注1）ＧＨＱの五大改革、①婦人の解放・男女同権　②労働者の団結権　③教育の自由化　④専制政治からの解放　⑤経済の自由化

（注2）スプリング・エフェメラル（エゾエンゴサク・キバナノアマナ・ヒトリシズカなど可憐な花たちのこと）

「ヨーロッパでスプリング・エフェメラル―はかない春―とよぶ一群の草本がある。温帯林の林床では雪が

とけてから高木が葉を繁らせるまでの短い間に草本がいっせいに活動をはじめ、発芽・生育・開花をおえる。高木層に葉が繁ると光が遮られて、活動に必要な条件がなくなるからである」（山田宗睦著『花の文化史』より）

（注3）　ＮＨＫ放送のテープ、「海峡の街、わが心の原風景」というラジオ番組のレポーターとして函館に取材に来られた哲学の山田宗睦先生をＮＨＫスタジオで囲んで話しがはずんだ時のもの。谷地頭小学校がまだ昔のままだった時、なつかしんでいる声も入っていた。

参考資料

・北海道教育大学函館分校創立六十年史
・北海道第二師範学校
　創立三十五年並女子部設置祝賀記念誌
・八十年誌　北海道教育大学夕陽会
・巴水　卒業三十五周年記念誌、二十四年卒同期会
・源遠流長　北海道第二師範学校昭和二十四年卒業
　五十周年記念誌
・夕陽會報　第一四四号
・婦人政策・婦人運動、田中寿美子、日高六郎編
　現代婦人問題講座1
・創立六十周年記念誌谷地頭（昭和五十九年）
　谷地頭小学校創立六十周年記念協賛会

聞き書き・体験・その他

私の戦中・戦後ノート

清野きみ

母と私

私は一九二七年（昭和二年）函館市で生まれた。函館には父の勤務地（八戸）変更のために住むようになった。遠洋漁業の大船団の機械技師で、父の点検が終わらないと出航出来なかったとか。母は南部藩の紺屋の娘で、東京裁縫女学校（現家政大学）で学ぶ。長女の私は母の実家（三戸）の習慣にならって四五日は、初子の里帰りをし、四五日過ぎて函館に戻ってきた。家の手伝いの人たちに手厚く迎えられ、不自由せずに成長したが、成長するにつれて父は、「この子が男だったら」と口説いていたそうだ。女三人男三人の六人きょうだいの長女として、〝君臨〟してきたそうだ。いま残っているのは弟二人で、名古屋と埼玉にいる。時折出合うと、一番上のお姉さんであり、母代わりとして扱われて、その上、下の弟とは十五歳も離れているためか、「あれ！だんだん母親に似てきたね」と冷やかされたり、懐かしがられたりする。父は私が三〇歳になる前に亡くなった。激しい気性で寡黙の人、気に入らないときは、母を叱り飛ばし、お膳がひっくり返ることがある。幼いながらに、こんなに気が合わないのは、きっと夫婦の年齢が離れ過ぎているからかしらと、妙に納得して、自分が相手を選ぶ時は、なるべく同じ位の年齢の人がいいなと思ってしまった。むかしはねえやさんといっていた良ちゃんという人は非常に

よく出来た人で、「旦那さん、奥さん」と言いつつその場の騒ぎを収めてくれる、世の中にこういう人もいるんだな凄いことだなあと、これもまた心に納得しながら成長してきた。

小学校に行くようになってからは、洋服を着ていたのだが、田舎の祖母や叔母たちは遊びにくる度に、あんたは幸せだという。「洋服を着ているお陰で、劇になると男役に廻るのよ、なにが幸せだって」と心で反論したものだ。

結婚後、母は私に、家に戻って弟たちを監督してほしいという。私の夫の方は、「はい」と答えたが、私は仕様がないなあという気持ちで同居し、生まれた二人の男の子をよく可愛がってもらった。カラカラと陽気に様々のことを喋る。

大学の講義の準備や学生指導、その上、夏休暇には社会（村落）調査で家を空ける私のすべてを、母と妹がそれぞれ手分けして助けてくれた。その甲斐あって今日まできた。

特に母あっての仕事と家庭、育児の両立であったことを、心から感謝している。私の家で私が子供と遊ぶのは、でんぐり返しや縄とび、歌の発表会位で、子供らは本を読んだり、ラジオを聞いたり、夫と砂浜に行ったり、自転車で空港に行ったりであまり手をかけていない。少し成長してからは、スキーに行ったり市民ハイキングで函館山に登ったりしたことがある位で、それも中・高校生になると全くといってよい程、子供と遊ばなくなった。ただ、気をつけてきたのは毎日の食事で、「今日は蛋白質を帰りに買ってくるから、おばあちゃんは野菜ね」と約束して家を出るが、蛋白質源の魚を、とても安くて良いのがあったと二人で買い物の品が搗ち合ってしまうことがしばしばであった。家事の調整というのはなかなかむずかしいものだと覚ってきた。

とに角、病気にならないで健康に育ってくれて、その上、ひとりの生活に耐えられればと願ってきたが、何とか二人の子が独立し、家庭をもってくれて、いってみれば、人生の伴走者が出来て、おばあちゃんとしての私は、大いに満足しているところである。

ところでこの母から聞かされた話がある。母は結婚前に東京に在住していて、一九二三年（大正十二年）九月一日の関東大震災を体験している、（三日間燃え続けた

ことや、多くの死亡者、行方不明者が出たこと）その時、大学生の学生服に警察や誰かが白チョークでマークしていったのをみて、本当にびっくりしたといっていた。「へえー、どうして？」の気持ちが大きく広がったが、うまく聞き返せないできた。

後で（勉強して―）判ったことだが、日清戦争（一八九四～一八九五）日露戦争（一九〇四～一九〇五）第一次世界大戦（一九一四～一九一八）と大きな戦争が続き大戦終結へとむかう一九一八年夏には、二ヶ月にわたって富山県の漁村の主婦運動から始まった米騒動があった。全国に拡がった「米騒動」の地域内には、陸軍の司令部がおかれ、民衆の運動に軍隊が出動し鎮圧するといった歴史的な時代の背景があった。もちろん都市や軍港に鎮圧のための軍隊がおかれ要塞が築かれていく。悪名高い「治安維持法」（注1）や平塚らいてうの新婦人協会（男女の機会均等と男女の協力）によって婦人参政権をと要求したのも一九二〇年代である。そこには我が国の軍国主義への布石の時代相が横たわっていた。母はその断面を切りとって忘れないでいたのだ。

女学校入学

女学校の入学には、小学校の担任の先生から、庁立（北海道庁立函館高等女学校）を受けてよいと言われ、いよいよ受験することになる。ところが此の入学試験は当時「入学考査」と呼ばれ、面接試験が導入された最初の年次でひとつの変わり目の年であった。

「考査」とは今の試験のことで改めて調べてみると、私が受験した年度は昭和十五年で、その前の年にはいわゆる戦時体制への教育の布石が相次ぎ、その一貫として通達された「入学者選抜は学科試験廃止、内申書・口頭試問・身体検査の総合判定」によることがわかった。（昭和十四年九月二八日文部省「中学校入学者選抜に関する件」通達）の新規程として、昭和十四年九月十四日教育審議会「中等教育に関する件」答申、（中学校を、中学校・実業学校・女子中学校に区分、三～五年制、理科教育の振興、実践訓練・体育の重視など）また同年の九月十一日には国民精神総動員実践期間設置に関する件が定まる。軍医の需要に即応するため帝国大学医学部の設置（同年五月五日）や天皇、全国学生生徒を閲兵し「青少年学徒

ニ賜ワリタル勅語」下賜（勅語の聖旨奉戴を訓令すること　伊ヶ崎暁生・松島榮一編　日本教育史年表　三省堂による）。昭和十五年になると、教員不足を補うことと戦威高揚のため臨時教員養成所三校が設置され、私の知っているところでは尉官クラスの戦争未亡人が最初に東京女高師で一緒になり、それは人材育成そのものであった。

昭和十五年四月八日には「国民体力法」が、また「文部省総動員取扱・機密文書取扱」規制と続き、昭和十六年四月一日に国民学校全制定となるわけで、私たちが軍国少女であったというとき、実弾が飛び交っただけでなく、日常の生活のひとつひとつの枠組がどう決められていくかが係わってわかってくるのである。

考査に面接が入るその流れを辿ってみたが、実はこの高女から受験する東京女高師でも面接があり、面接の時の緊張感は、高女入試よりも遙かに強く、大きく、様子は今でも胸から離れていない。

さて、女学校の面接でどんなことを聞かれたか、私は型通りの名前・生年月日と短いものであったようであまり覚えていないが、当時のクラスメート二人に聞いてみたところ、よく覚えていた。

Hさんは、大変だったわよと「みんな入りたいがみんなが入るとは限らない、どういう方が受かると思いますか」と聞かれたという。Hさんは「まず健康で、頭がよくて、勉強がよくて、行いも正しい人」と答えた気がすると話してくれた。「八二〇人の応募者の中から合格したのは二五〇人、私の小学校のクラスでは七人が受かって、担任の先生の鼻が高かった」（談）としっかり覚えておられた。「面接する先生は三人で真中に女の先生が坐られて、質問された。女学校は女の先生が偉いんだなと思った、校長先生はずっと右側の後ろの方におられたから―」（談）

Kさんは、坐っている椅子から立ち上がろうとしたら椅子がギーと音をたてて、「もう駄目だ落ちる―」と思ってしまい、家へ帰ってわぁーんわぁーん泣いてしまったと教えてくれた。昭和十五年入学、十九年卒業生の私たちには、たかが面接試験、されど面接試験なのである。後で、受験するときに小学校の担任は、「学校からいく内申はとっても大切になったの、だから先生は、必ず受かると思う人を推せんしているの」と優しく柔らかい声で

言ったことを思い出し、総合判定のことだなと納得して受験した。

入学してからは、颯爽とした気分で、人見町から千代ヶ岱の電停へ、そして十字街で電車を降りて、東本願寺の脇を抜け登校した。帰りは教会の石垣に添って、旧函館放送局の桜を見たり、真直ぐ近道をしながら坂を降りて帰宅する。今考えると、よく歩いたものだと思う。家へ帰ると先ず靴下の破れを点検したり、雨に濡れたりすれば、皮靴に新聞紙をまるめて入れたりと、足もとに気を配るので気忙しかった。だから季節風を伴なう雨風、濡れ雪の日が厭で、学校が近かったら、どんなにいいだろうと、元町附近の友達を羨ましく思っていた。ただ、学年が進んで、遠足、援農、農場行きとなると人見町が便利になり、春が来たように思ってしまって、何となく笑顔が出てきていたのを覚えている。

援　農

二年生になると戦局が厳しくなる。当時援農は、「つゝじが丘」（注2）年史関係をみると農作業をする場所は、桔梗、上磯、久根別、七重浜での農園作業を指し、家の近くの人見町農園も入る、戦中・戦後の食糧不足を補うためと勤労作業による体験が重視され、私たちにはなかったが他の学年で湯川造林所の角材運搬があった。よく覚えているのは、先の人見町農園行と、七飯療養所の縫製作業である。技術を磨くために、和服の早縫競争が裁縫時間にあり、製作時間を計られて、私は割と早い方だったようだと友達が覚えていてくれていた。

昭和16年（1941）５月２日人見町相馬氏所有地借入５月６日
教職員生徒一同鍬入式作業開始　写真は９月収穫（清野蔵）

二年生の頃の学生らの様子を、「つつじが丘」六二号

（北海道庁立函館高等女学校報告団、昭和十七年三月十七日、A四版九四頁）から紹介しておく。

目次全体が「大東亜戦争特輯」「学校行事」「文苑」「報告団だより」に枠づけられ、それぞれに、日常書いたものが位置づけられ掲載されているが二年生の私の分は柄にもなく、「文苑」の一短歌である。（七六頁）恥をしのんで掲げておく。

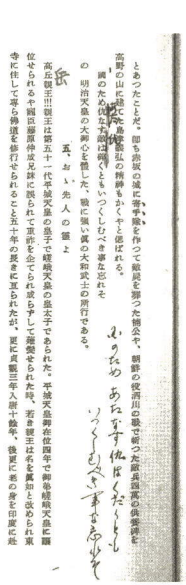
新しき日記を買ひて嬉しさに開きて見つつまた閉ぢて見つ　　二ホ　山中きみ

今日街で幼き頃の友と會ひ歸りて讀みぬ古き日記を

庁立高女卒業と進路、度々の上京

女学校を卒業して何になるか、在学中一度も考えたことはない。ただ、授業が面白く、関連する読書が好きで先生が口を滑らせて紹介する本でも探して読むといった具合であったから進路など真剣に考える心の余裕はなかった—と今でも考えている。廻りの人が何をしようとあまり気にならないのもそんなところからきているらしい。

つゝじが丘62号の表紙である。A５版総頁94頁。目次は、大東亜戦争　特輯、学校行事、文苑、報国団だより。表紙には検閲印があり、不良と発行人及校長連名始末書が赤字で要求されている。



62号の４、５頁。検印の内容４箇所あり

ところで、女学校の卒業を控えたある日、担任の先生から女高師（東京女子高等師範学校）受験を進められた。それもいいかなと頷く少女時代である。少しだけ友達の話しで残っている言葉に、女子挺身隊という言葉があり、そこに入ったら？行ったら？働くんですってと言い合っていることを耳にした。大した気にもならなかったが、「人に（正確には軍に）働かせられるのはいやだなあー」とふっと思って、上の学校を受験してもいい、受験しようと思い始めたのが正直なところである。

受験勉強というのは普段の勉強をしっかりすることであり、英語と数学は他府県受験者特に東京の場合と比べると、力を足さなければならないと教えられた。庁立の先輩で女高師に合格した例や、既に卒業して庁立高女の教員になられている諸先生からは温かく見守られたように思う。

学科をどうするか、父は受験そのものに反対、母は自分が東京在学中にみた学校の生徒たちの例を引いて文学部系の学生はいつ勉強しているかわからない、喫茶店にたむろしている、だらしないと言いつつ文系はダメ、理系はとんでもない、医者は家族が大変だ、家政系ならよしということになった。何よりも担任の先生が女高師出身の家政系でごきょうだいがそうだから、母はすっかり説得され、面接の心得のアドバイスを感心して伺ってきた。面接が重視されてきているのだ。第一次試験は学科、東京に集まるのは大変な時代になっていたから受験地は北海道の人は札幌でと全国ブロック別、北海道では二八人受験し、二人が合格して二次試験に臨んだ。二次試験は前述のように、身体検査、運動機能検査、そしておよそ学科教員全員（記憶では十人近く）が揃った席での面接試験であった。どれもひとつひとつ覚えていて再現出来る程、緊張して受けた記憶がある。運よく四年生から入学することが出来たのだが……。

話しを元に戻そう、私はためらいもなく女高師を選んだが、友人は、これからの世の中で資格をもたなければ子供も育てられない、男は兵隊にとられるから、と母に言われて薬専に、ある友人は、私の母の母校家政系の学校を進められて受験し、二人とも合格した。が一人は卒業、もうひとりは戦争が激しくなったというので上京を中止し学校を中退してしまった。

人生の中でたった四年間に過ぎない学生生活が、その

後の生き方、歩み方の原点になるという重い選択が女性の高等教育への受験にあった。そして、それぞれが「女子挺身隊」をキーワードにしていたことは間違いない。男性優位の社会そして激動の社会のなかでの通過点となった女子挺身隊は女学校卒業年次の昭和十九年の八月二三日「女子挺身勤労令」（注3）公布となった。神風特攻隊がレイテ島沖で米艦船に体当り、B29が東京爆撃を開始したのが昭和十九年十一月二四日に始まり、「中学高校生の学徒が通年動員可」となったのもこの年の七月二一日であった。既に予科、高等学校を加えた大学、専門学校の繰り上げ卒業が開始されていたときである。

家政科（注4）のクラスは留守部隊として二週間の援農を除き東京に残り講義を受けていたのは幸いといってよかった、だが東京での空襲体験にはすさまじいものがあった、只今B29が〇〇方面より接近中、〇〇岬の方角より本土へ向けて敵機襲来と何度聞いたことか、遠州灘とか室戸岬の存在はこうした報道で覚えたといってよい程で、その度に防空壕へ出入りする。ズルズルと滑る霜柱には悩まされ続けた。上級生は兵器廠へ動員され名古屋方面に派遣された学科もあった。それでも私は休暇に入ると、ときに二四時間かけても函館に帰ってきていた。よく青函連絡船を利用したものだとつくづく思うし、必ず大きなリュックを背負っていたから、バックひとつで旅をしたいと心から願うようになっていた。結核で療養されていた先生にはバターを、友達にはするめをお土産にしていたので、いつの間にか私のニックネームは〝いかのおすまし〟となってしまった。おすましというのは、あまりおしゃべりしないからと言うことのようだ。その頃先生方の講義はときに自伝ともなったりしてそれぞれの学問分野の深いところに触れたようで、妙に魅力があったが、それも昭和二〇年四月六日、寮（注5）（中国の「四君子」からとって命名された蘭・竹・梅・菊の名称が各棟に付けられていた立派な近代的な建物、ラジエーターも取りつけられている）が焼失し、四月十三・十四日には本校焼失、分散疎開しても食物もなしで、各自帰宅して連絡がいくまで自宅待機することになった。授業再開は九月一日、各学年が揃ったのは十月になってからと記憶している。

自宅待機と〝三ヶ月のお手つだい〟そして授業再開

食物不足と分散避難が続き、東京在住の友人らも家を失ない仮住まいの寮に一緒に入り込んだり、困難なことが重なって、時折戦局の話しが出たり、中国の留学生が帰国したまま日本に帰れなくなったりと身の廻りにも戦争の傷あとが大きくなってきた。東京に戻る東海道線の列車で、あまりの混雑に乗降口で夜を明かした友人が、気が付いたら連結部分からレールの上に放り出されていた話しや、自ら生命を絶った先輩のことなど、とにかく毎日学校で顔を合わせていないと不安な日々が続き、話すことによって「挫折」に陥入らないように気を合わせていた。そんな時に、ふーと出てくる話しに、「本当なら今頃は京都の柊家旅館に修学旅行よね」と戦争でなければ楽しい想い出になること等の話しが出て一瞬現実を忘れさせるときもあった。二人以上集まると、とにかく唱う、ハモる、よく歌っていた。

緊張と安堵の激しく交差している時、自宅待機はともあれひとつの区切りとなった。

授業再開までの約三ヶ月間函館での自宅待機は、思いのほか充実したもので、母校の庁立高女に毎日通う。ある時は化学実験の手伝い、ある時は裁縫時間の個別指導、また家事室の備品の整理などだが、一見無機物には命がないようだが物性というものがあることや材料をあまり使わずにいまでいうリサイクルにあたるソックス作りを指導してみたり、後輩の生徒たちとはすっかり仲好しになってしまった。その彼女たちが十勝管内芽室に援農に行くことになり、先生方の指導でそのお手伝いをすることになり同行していった。農業の仕事はつらいといえばつらいが防空壕も見当らず、見渡す限りの青い空、落葉樹の美しさ、夜になると破れた屋根から月の光がさし込んで、先づは「海行かば」を合唱するが、そのあとは誰ともなしに、音楽の時間で習った歌の数々を大声で歌い合う、その楽しさは格別のものがあり、先生方や生徒たちとの共同の生活に付き合ってきた。ここはどこ?と聞きたくなるような静寂、畦道でお能やお仕舞の足摺りの練習とその会話の楽しさをじっと聞いてきたことは、援農とはいえ一番心に残っている心象風景といえる。その時の国語の先生、家政の先生、引率の男の先生のお名前

と仕種のほかに、鮮明に覚えていたのは、当時の生徒で私の後輩たちのことである。第二師範女子部入学者や新制大学になってから入学してきた後輩たちの顔をしっかりと覚えていて、私は彼女たちからきみ先生と呼ばれていた。

敗戦の知らせを聞き、学校から連絡が入って上京、三年生になって吹き出すような学校での文化活動、アカデミックな研究発表と演劇がとても盛大に催され、その顛末は『私の女高師　私のお茶大』（東京女高師、お茶の水女子大学　五〇年代を記録する会発行　二〇〇四年十二月　創英社制作　私家版）に精しい。とくに昭和二一年の徽音祭（キインサイ）（注6）は戦争中は勝手に入室できなかった大講堂徽音堂で、各科対抗の演目で競い、私たち家政はイブセンの人形の家、友人と組んで三人で演出をしたし、文科はアルルの女、勧進帳、理科はシラノ・ド・ベルジュラックを上演し、先の書には、観客の学生らはみなうっとりと夢見心地で……と書かれている。何せ舞台用ドレスを借りるのも演出の仕事というわけで、私は松竹の衣裳部にお願いに行って、タランテラを踊るノラのピンクのドレスを借りてきた。そのドレスを私は着てみたくなり、その夜の寮の仮装舞踏会に身にまとって出場した。その時の絹のダンダンフリルのついたドレスの思いのほかの暖かさにすっかり感激し、男子禁制なので借り物の燕尾服をきた友人とステップを踏んでみた。その時インドの貴婦人に扮した友人は、東京都の水に関係する研究員になったが、程なくしてそのひょうひょうとした素敵なキャラクターを、自ら絶っていった。

戦後の虚脱感、私は間違っていたと学生に謝る怖かった寮の舎監の先生をみて、心の中で謝って済むことではないと大声で叫びたくなった私、生命を守ってきたけれどもどう生活し、学問を追究するか、答えを求めてあちこち大学の講座や教授に会い、また多くの著書に触れ、週一遍開かれる女高師応接室でのＣＩＥ（注7）の会議のお食事やお茶の接待（四年生であったから助手さんのお手伝いをさせられる）をこなし、帝国女子大学の構想に熱をあげたりした。（このことについては埼玉大学紀要の、私の退官記念論文集において発表してある）

とも角、戦争が終って構内は花が咲いたように活気づいていった。前掲書三八頁に、後輩は、その時の状況を次のようにあらわしている。「それまでの女高師髷とい

われた束髪風の髪型もしなくてもよくなって……四年生の平田信子や山中きみは早速パーマネントを髪にかけくっきりと口紅を塗って登校した。学校は花が咲いたようだ」。藤村の初恋の歌をうたい、三木露風のふるさとを詠じ、啄木の「東海の…」をうたい、帝劇の赤じゅうたんを運動靴で歩き歌舞伎通いをし、やがて友人らと社会科学研究会（顧問波多野完治教授）の魁けを模索して真剣に学習し合う。戦後になって始めて自立への歩を進めることになる。

就職決まる。そして課題

昭和二三年（一九四八年）三月三一日北海道第二師範学校文部教官（判任官）の発令を受け、四月一日から北二師女子部勤務となった。新学制による師範学校女子部のこととて、新進気鋭の教師たちや勉強したくて集まった本科・予科の生徒らが生き生きと学舎を彩っていた。

私はこの発令の前年の秋には、庁立函館高女と聞かされていたが、聞けば六・三・三・四制の学制の実施や男女共学実施の通達によって新制大学要員人事のためという。

寒流と暖流の交差する豊かな海と心地よい潮風―函館の風土は好きだったので言われるままに着任した。しかし着任後の仕事は思いのほか多忙なもので、時間を惜しんでノートづくりに精を出し、休暇は必ず上京して、研究会、夏期講習に参加し、ときに母校の先生方に内容を伺ったり、確認し合ってきた。とくに、学生時代から続けて東大川島武宣教授の理論枠組みを勉強し、陰に陽に教えて頂いた。（川島先生のお弟子さんにあたる星野英一教授とは放送大学で一緒で、妹さんは女高師の同期生でそれぞれのご縁を大切にしてきた）

また、家政学の分野では、家政学原論部会でご一緒の松下英夫教授とは夏期ゼミで、今日まで理論的なおつき合いを頂いている。もちろん、終戦後の講義担当の諸先生は本学の黒田チカ、保井コノ（共に我が国初の女性理学博士）帰国間もない湯浅年子、石母田正、玉城肇、今和次郎、西山卯三と、専任、非常勤を問わず新しい研究成果を伺うことが出来、それらは、就職後の専門領域、一般教育領域、そして教職科目の全体について担当することになった筆者の大きな支えとなっている。一年に一

編は学術論文を作成するように心掛けてきた。そうしないと子育て家庭との両立のアレコレに自分が流されてしまうからである。旧制から新制にわたって大学教育に携わって半世紀、多くの知友、会友、先輩、後輩の出会いがあった。二国立大学名誉教授を頂き、学会の研究部会でも名誉会員に推挙され本当に有難いことと感謝している。いまはご恩にお返しのつもりでNPO法人お茶の水女子大学学術事業会の終身会員として少しだけボランティアをしている。

戦争が終結して、青い広い空を見上げたとき、戦争はなくなった、どう民主主義をつくっていくのかと考え、さしあたり憲法二四条、二五条は持ち続けてきた課題である。最低生活の最低とは何か、文化生活とは？　いまもその課題を引きづっている。ただ判然としていることは、出来るだけ対象に対して異領域、異文化と共有し合う関係をもつことであると、交錯領域やAとBの間に注目している。

ところで、半世紀に出会った学生たちとの思い出など、現在も続いている人たちがいるが、これらのことは稿を改めることにしたいと考えている。

（注1）　この時代背景を一九二〇～二五年に限ってその概略をみると、一九二〇（大九－三）男女平等を主張して市川房枝ら新婦人協会を結成、一九二二（大十一－四）治安警察法第五号一部削除（婦人の政談集会参加許可）同五月新婦人協会治安警察法改正祝賀演説会開催、同七月日本共産党非合法成立、一九二三（大十二－一）婦人参政権同盟結成、一九二三（大十二－九）関東大震災、東京市ほか五郡に戒厳令施行、朝鮮人暴動の流言がひろがり朝鮮人虐殺はじまる。同十月法制審議会、女子参政権否決、同十一月国民精神作興に関する詔書発布。一九二四（大十三－十二）婦人参政権獲得期成同盟結成（理事久布白落美、市川房枝、一九二五・四婦選獲得同盟と改称）一九二五（大十四－三）治安維持法案修正可決、両院協議会成立は三月二九日である。（出典　東京学芸大学日本史研究室編『日本史年表』増補三版　東京堂出版　二〇〇四年一月）

なお、治安維持法の実際―とくに教師・師範学校生、高等師範学校生、大学研究者らへの行使の状況、足跡について、札幌市在住の岡野正氏が「年表・一九三〇年代

教員運動」に詳細にまとめられ、一九九九年八月私家本として発行した。その寄贈を受けた筆者は改めて、治安維持法の強権性に怒りを感じた。治安維持法は一九四五（昭和二〇年十月）年に廃止されている。（出典は東京学芸大学日本史研究室　二〇〇四年一月）

（注2）　北海道庁立高女現西高校百周年記念誌編集のための資料整理中、見付けた校友会誌のことを指す。五五号（昭和十二年七月三日）五七号（昭和十三年三月二六日）六〇号（昭和十五年二月十五日）六二号（昭和十七年三月十七日）である。ここでの叙述は紙幅の関係上無理ながら、用語や巻頭紙面、また分類項の起こし方などに軍国主義体制への急激な加速がみられる。ちなみに六〇号は皇紀二六〇〇年特集記事が中心で一二〇〇部印刷一部五五銭、本校関係者応召氏名が歓送迎葬儀参列日記（十三年度分）に、また慰問日誌、事局講話日誌、事変係の係員・任務・内容の記録がある。生徒らが馬車に乗っていも掘りに出る写真もある。

（注3）　「女子挺身勤労令」関連のこと。

私が女学校在学中の入学時に、一九四〇（昭和十五－一〇）大政翼賛会発足、一九四一（昭和十五－三）国民学校令公布、同年八月文部省、中等学校以上に学校報国団編成を指令、十月大学・専門学校などの在学年限短縮決定、一九四三（昭和十八－七）国民徴用令改正公布、女子学徒動員決定、九月二五歳未満の未婚女子を勤労挺身隊に動員、十二月徴兵年齢一年引下げ、第一回出陣学徒入営、一九四四（昭和十九－一）女子挺身隊の動員強化（緊急国民勤労動員方策要綱決定によるもの）一九四四・二月に、国民登録を男子十二～六〇歳、女子十二～四〇歳に拡大する。六月に、女子挺身隊（十二～四〇歳未婚者）強制促進決定、八月二三日、「女子挺身勤労令」公布。この頃は学童疎開促進、国民学校高等科・中学校低学年の動員、深夜業強化を閣議で決定している。昭和二〇年三月国民勤労総動員令が公布され、九日から十日にかけて夜間にB29による東京大空襲があり、以後大都市への空襲が続く。（出典は（注1）と同じ）

（注4）　家政科設置の経緯及び昭和二二年勤労動員状況

大正八年にこの改正規則による生徒が卒業した時、専攻科卒業者で相当の成績を得た者に対しては、中等教員家事科免許状授与の特典が与えられた。この時は家事科だけであったが、十年三月、従来の専攻科第二部と第三部を廃止し、新たに国語・英語・家事の三部を置くようになると、翌十一年七月、専攻科卒業者で相当の成績を得た者に対し、各部の当該学科の中等教員免許状を授与することとなった。

大正十二年九月、関東大震災のため煉瓦づくりの校舎はくずれ落ち、木造校舎も全焼し、わずかに表門衛所一棟だけが残った。罹災後の応急処置として、附属高等女学校専攻科の仮教場を東京府女子師範学校内に、本科および実科の仮教場を女子学習院内に設けるなどして、授業を再開した。翌十三年三月に本郷区湯島三丁目の旧校舎跡に仮校舎が竣工し、ここに全部移ったが、昭和九年には現在の大塚の校舎新築工事に着手し、翌十年三月に移転した。

昭和六年四月、本科の教科課程に新たに公民科が加えられたが、さらに十八年四月には同年三月制定の高等女学校規程に基づき、教科課程の大幅な変更が行なわれた。その教科課程は、教科と修練に分けられ、基本教科には国民科（修身・国語・歴史・地理、理数科（数学・物案・生物）、家政科（家政・育児・保健・被服）、体練科（体操・武道・教練）、芸能科（音楽・書道・図画・工作）、増課教科には家政科（被服）、実業科（農業）、外国語科（英語）があり、修練は日常、定時または随時に行なわれるべきものとされた。この時公民科は修身に吸収統合された。

昭和十八年十月になると「教育ニ関スル戦時非常措置方策」が発表され、十九年三月には「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱」が決定されて、中等学校以上の学生・生徒は年間を通じて勤労動員が実施される体制がつくられた。その際、女子の勤労動員には、できるだけ「学校設備ノ工場化」を考慮するよう指示されたのに基づき、附属高等女学校では四月十五日に全国に先がけて学校工場を開設した。その作業は、第一陸軍造兵廠の指示による弾丸の部品検査であった。さらに七月に入ると、学校工場の一部を解消し、勤労動員が行なわれるに至り、そのため授業は毎週木曜日に限られるという、事実上学校としての機能停止の状態に陥った。動員状況は、上表に見られるとおりである。

勤労動員状況　（出典『お茶の水』第59号・祝開記念号　昭和22年）

動員年月日	動員先	参加学年と人数
昭19.7.27-20.5.25	大日本印刷株式会社 櫻町工場	本科5年　63名，専攻科3年　36名
昭19.7.29-20.3.24（工場勤務以外の別動隊）	当校三階裁縫室・軍服作業	本科4・5年，専攻科2・3年の体の強い者　13名
昭19.9.1-20.5.9	海軍水路部	本科3年　82名
昭19.4.15-19.11.14	東京第一陸軍造兵廠	本科4年　120名，5年　76名，専攻科1年　65名，2年　41名，3年　46名
昭19.11.17-20.6.18	〃	本科4年　91名，専攻科2年　32名
昭20.1.8-20.5.6	安立電気株式会社	本科2年　87名
昭20.1.17-20.3.20	安田火災保険株式会社	専攻科2年　34名
昭20.1.17-20.3.20	日本勤産火災保険株式会社	専攻科2年　24名

（「お茶の水女子大学百年史」p726～727より）

（注5）　入寮時の寮の憲法は、「四年生は神聖にして犯すべからず」「二年生は上級生なるが故に敬うべし」「一年生は茶坊主にして茶を汲むべし」で「三年生はお部屋のお母様」と教えられ、特にお部屋でのお食事には、上級生に合わせ、ご飯をおつけする（お代わりする）などの体験をした。初めてのお使いは、お部屋（同室）の上級生からお汁粉を買ってくるようにいわれ、同室の一年生と二人で、アルミの薬缶を下げて校門から大塚仲町を通って、大塚（現ＪＲ大塚駅）まで出掛けた。おだんごの入らない小豆汁であったが、お部屋のパーティーには主役となった小豆汁である。

（注6）　徽音堂と徽音祭と社研

徽音堂―「お茶の水女子大学創立一三〇周年記念徽音堂施設整備に関する募金事務局」より抜く。

徽音祭―一九四六（昭和二一）年に様々な班が立ち上げられ徽音祭はその発表の場となった。「五〇年代を記録する会」より抜く。（四二～四三頁参照）

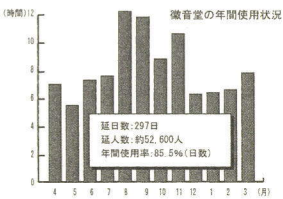
ご存知ですか？ 徽音堂の名の由来。

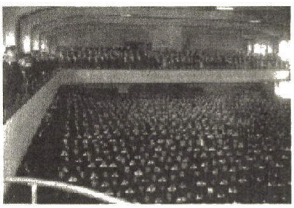
昭和7年8月31日竣工、鉄筋コンクリート造2階建、延460.22坪(1,518.726m^2)、1494席。「徽音」という語は、「詩経」大雅の思斉篇のなかの句に見られ、(1)美しく優れたことば (2) 優れた評判・名誉 (3) 美しい音楽 の意味をもちます。竣工の年、吉岡郷甫校長が細田剣堂教授に命名を依頼し、東伏見宮妃の筆による「徽音堂」の額が掲げられました。

お茶大のシンボルとして…

入学式・卒業式など、学生生活は徽音堂にはじまり、徽音堂に終わります。東京女子高等師範学校、お茶の水女子大学のシンボルとして、あの穏やかで薫り高い雰囲気を後世に伝え、歴史を共有してまいりましょう。

▲落成式





▲昭和24年お茶の水女子大学開学式

施設整備について…

式典はもとより附属学校園の諸活動、学会、大学のサークル活動等、徽音堂は年間日数にして85.5%も使用されています。しかし、暖房設備も不十分な上、冷房がありません。今回の募金では、主に冷暖房設備を整備し、一年中快適な環境を整えます。伝統的意匠を守りつつも高い機能性を備えた新しいホールとして、徽音堂が生まれ変わります。

卒業生の思い出が 昔も今もいっぱいの 徽音堂！

(昭和７年卒業生)徽音堂へは最敬礼で入った。皇后、天皇の絵がかかっていたので。へこおびではだめ。あらたまった服をきて入った。

(昭和14年卒業生)昭和12年4月26日に、ヘレン・ケラーの講演を聴いた。とても感動した。

昭和21年徽音祭で、学生による「アルルの家」「シラノ・ド・ベルジュラック」「人形の家」の劇を観た、とても上手だった。

(昭和26年卒業生)そのころは、椅子が固定されておらず、椅子を端っこに寄せてダンスパーティーをした。

(昭和57年卒業生)徽音堂で法学の井上茂先生の講義や試験を受けたことが心に残っている。

(平成3年卒業生)社会が凄いスピードで変わっていく中で、古きよき時代を感じることができる徽音堂は大好きな場所でした。

(昭和９年卒業生)卒業式は、小学校、女学校、本校(大学)と一緒に行った。厳かな式だった。

諏訪根自子さんのバイオリンを聞いた。

同じ頃に建てられた建物は？

国会議事堂、大隈講堂(早稲田大学)、兼松講堂(一橋)，安田講堂(東大)などは、徽音堂と同時代の建築物です。

安田講堂は大規模改修済み、大隈講堂は2007年の125周年へ向けて改修費用の募金活動中、兼松講堂は改修中で音響効果に優れたホールに再生します。各大学ともシンボル的建築物の保存と再生に意欲的に取り組んでいます。

▲講堂入り口正面の飾り

(写真提供：中野欣子／27年社)

社　研　社会科学研究班

堰を切って溢れ出した文化活動

敗戦。学生たちは勤労動員先から帰校し、新学期が始まると、文化活動が一斉に華ひらく。宗教班（カトリック、プロテスタント）、英会話、演劇、国劇班等々。社研も1946（s21）年には発足。確かな歩みを始めていた。だが……。↘

▲私たちの社研成立記念　（1947年）

……既成の社研の行き方にあき足らず、学びたいテキストを選んで新たに立ち上げた新社研のメンバー。写真上は、講堂を背に、折しも来校していた写真家土門拳氏によるポーズをとった貴重な一枚。左から大竹輝子、可児公子、平田信子、山中きみ、佐藤淑子、飯田フミさんら。（写真提供：飯田フミ／24年化学）

▼先輩（平田、山中、坂本さん）の卒業を記念して

◀（1948年３月18日　講堂の前で）

（写真提供：山崎恭子）

1947年～1950年　出所は（注４）と同じ卒業を祝ってくれた後輩の提供

（注7）　ＣＩＥ―連合国最高司令部（通称総司令部といわれ、ＧＨＱとあらわされている）の文化・教育部門を担当していた民間情報教育局をＣＩＥとあらわす。昭和二一年の夏、女子教育関係者の自立的な団体として「女子教育研究会」が設立され、主として都内の著名な女子教育者・学識経験者二四人が発起し、多くの賛同者を得て、九月十日に東京女高師で第一回総会を開いた。この研究会に、ＣＩＥのホームズ女史らオブザーバーとして出席し、女子高等教育を前進させるための勧告や、情報交換、アンケート調査などで活躍した。「女子大学連盟」や「大学婦人協会」「社団法人大学婦人協会」等もこれらの動きの中に包括される。とくに国内のみならず国際的な学術交流の成果は大きい。「学制」に関することが法案化され、教育基本法と同じ手続きを経て、二二年三月三一日に学校教育法が法律二六号として公布され、翌日から施行となる。

（出典　お茶の水女子大学百年史より）

参考文献・資料

・『お茶の水女子大学百年史』昭和五九年（一九八四年）「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会

・『女子学徒たちの敗戦』二二年文科の会編　草莽送書（一九七八年）

・『日本教育史年表』（一九九〇年）伊ヶ崎暁生　松島栄一編

・『昭和・平成世相史（草稿・第一巻）』（一九九六年）加藤秀俊　退官記念祝賀会で列席御礼（私家版三〇〇部限定）

・北海道庁立函館高等女学校（一九四三年）『思ひ出　紀元二千六百四年　第三六回卒業アルバム』（清野蔵）

・『木犀』東京女高師卒業アルバム（一九四八年）（清野蔵）

・Home Economics INTERNATIONAL SPOT FEATURES －IN PICTURES－Chiyono Matsushima（二〇世紀の収録）（二〇〇二・六）

・『民法のすすめ』星野英一　岩波書店（一九九八年）

・『法学者のこころ』星野英一　有斐閣（二〇〇二年）

・『日本史年表（増補三版）』東京学芸大学日本史研究室編　東京堂（二〇〇四・一）

み心のままに

―永田　美さん―

作　山　すみ子

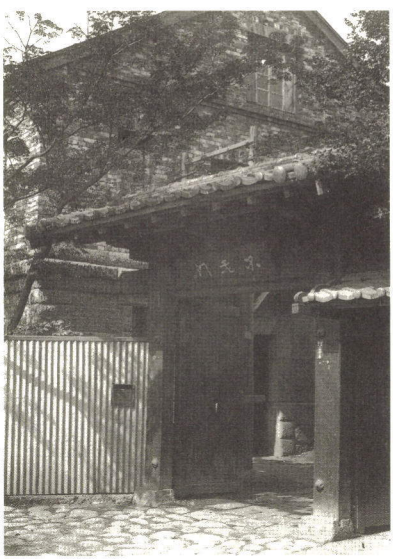
牛込のレンガの家

私は、大正八年十二月六日、東京の牛込で生まれました。家は明治のころは小作人を何人も使っていた大地主で、敷地が五百坪もあった。なんでも祖父の家系は代々宮内庁の大膳職（注1）をしていたと母から聞いたことがある。使用人も、書生、お手伝い、父母、祖父母の部屋係、子守も一人ずつなど十人くらいいた。

家はレンガと石造りの三階建で避雷針もついていて「牛込のレンガの家」といわれていた。

祖父はお茶の師匠でもあって、皇族の北白川家や青山学院にも教えにいっていたが自宅にも茶室があり、家の門の上に「不老門」と大きく立派な文字が書かれていた。

関東大震災の時も家はビクともしなかったが、三歳だった私は、ばあやに乳母車に乗せられて庭に避難したのを



「牛込の生家」
東京大空襲で直撃弾を受け消失した

覚えている。そんな頑丈な家も昭和二〇年の空襲で国の重要な建物と勘違いされアメリカの直撃弾を受け、三つくらいあった倉も全部焼けてしまった。その時はみんな庭の防空壕に入っていて助かった。

母は後妻で前妻にこどもが無かったので、跡継ぎを生むために、二五歳くらいのとき二〇歳も離れた父と結婚した。母の実家は石川県金沢の大きな米問屋だった。

母の兄は稼業を継がないで横浜に会社のある欧州航路の船に乗っていた。私と弟は「横浜の伯父ちゃん」と言っていた。よく家に遊びにきてチョコレートをもらったり、英語とドイツ語が上手でトランプや手品を英語で教えてくれた。

父は仕事に就かなくてもいい身分で祖父から見ると「道楽息子」だったが、あちこち外国に行って知識の広い人で、当時としては民主的な人だったと思う。

しつけが厳しく使用人を自分の身勝手で使うとひどく叱られた。おかげで後々遺愛の寮に入ってしつけの面で困らなかった。また父は「美田を残さず」といつも言っていたので、母は「本当にお父様は西郷隆盛と同じね」と幼い私に話していた。外国を旅していた父は中国では一巻になっている洋服生地を何巻も購入して家に送らせたり、その当時日本に初めて数台輸入されたシンガーミシンを母に買ってくれた。母は和裁が得意で金沢の伯母はいつも母に頼んでいたくらい上手かったが、ミシンのために洋裁を習いにいって、弟のベビー服や、従姉妹になる伯母のこどもとおそろいのフリルやレースの飾りのついた服を父から送ってきた生地で作ってくれた。その父も昭和五年肝臓ガンで亡くなった。

私には、大正十一年十一月一日生まれの弟がいた。父が自分は贅沢に育ったがこの子の時代は共和の世界になるだろうと言って名前を「共和」と書いて「ともかず」

母の手縫いのレースのついた
おそろいの服を着て
左から従姉妹、伯母、弟、母、美さん

と付けた。その弟は、フランス系の暁星小学校に入学したが、結核を患い昭和十七年に亡くなった。母が「金のわらじを履いても薬が手に入らなかった」と後年くやしそうに語していた。

祖父は私が小学校に入学するころ亡くなったが、祖母は、屋敷の離れに住んでいて、弟と離れに行くとき、祖母に教えられたとおり襖を開けて一回おじぎをして部屋に入ると「御膳をお食べかい」と二人に聞いて誰かからいただいた「甘納豆」を紙にくるんで「お食べ」と言ってくれるのだが、それは砂糖が溶けてすえた匂いがした。また宮中から戴いた「らくがん」もカビくさくて食べられなかった。祖母は自分が食べないで孫のために取っておいてくれたのだろうが、申し訳ないが私はあまり離れにはいきたくなかった。

母は祖母のことを「ご隠居さま」といっていた。母から後に聞いたことだが、いつも食事の後かたづけの時女中がへっつい（竈）の底に残ったご飯のおこげを祖母のところへ持っていくことになっていた、祖母はそれをざるにひろげて干して、「干飯」（ほしい）にし、三月のひな祭りに煎って砂糖を溶かしてまぶし「あられ」を作ることになっていた。あるとき十二・三歳の新しいねえやが白いご飯を持ってきたので祖母が「おや、これはどうおしだえ」と聞いたところ鍋底のおこげを洗う時うっかり食べてしまい、あわてて白いご飯を持ってきたので祖母に叱られたそうだ。祖母は物を大事にする人だったと電器釜の底に残ったご飯をみるたびにそのことを思い出し、今でも胸がキュンと熱くなる。

遺愛女学校へ

東京で生まれ育った私がなぜ海を越えて遠い函館の女学校へ入ったのか、それは父の遺言によるものであった。

昭和五年に亡くなった父はからだの弱いひとり娘の私のために遺言をしていた。世界を見て歩き、外国に友人を沢山持ち、進歩的だったので女の子もこれからは学問が必要と考えていたようだ。父の遺言には、女学校は函館の遺愛女学校、大学は共立専門学校へ行きなさいと書いてあった。どうも函館にいた友人の助言があったように思う。当時永田家は函館郊外の旧銭亀村に牧場を持っていて普段は管理人を置いて私は夏休みに東京から毎年

避暑に来ていた。

昭和七年、父の遺言どおり遺愛女学校に入学した。親戚はなにもそんな遠い函館に行かなくてもと反対したが東京よりも空気がいいと母も一緒に来た。

一学年六八名、二クラス、私は家がある銭亀村から歩いて海岸まで下り、湯の川から電車で学校のある杉並町まで通った。電車賃は一区一銭で、ちなみに当時の人は、大門から末広町まで市内、湯の川から大門（注2）までは市外といっていた。

昭和７年　遺愛女学校入学
前列左　美さん

学校に通うのがあまりにも遠くて大変なので寮に入った。休みの日には家から馬車が迎えに来てくれた。冬は馬橇でポカポカのおコタ（炬燵）に入って帰った。

寮生は全員教会へ通い、学校の雰囲気も整っていたので当然のようにクラスのほとんどが洗礼を受けた。私も三年生の十五歳の時洗礼を受けた。

英語の授業は週に七～八時間あって、ミス・チニー先生は厳しい方だった。教科書は使わないで会話だけ、それも日本語は全くなしで、箱からいろいろなものを出して、「ミス・ナガタ、ホワッツイーズ」と言われても何のことかさっぱり分からない、立て続けに「スタンダップ」「オープンザドアー」指されたら分かるまで立たされる。最初のころは英語の時間がいやでたまらなかったのに、ひとつ、ひとつ覚えるようになると次第に楽しくなった。そして文法もわかり、ヒアリングはミス・チニーの顔、手の表情を見ただけでいつのまにか理解出来るようになっていた。

ミス・チニーは、昭和十年まで校長をしていたが、その後東京の青山学院へ移り、十二年には神学部副部長になったが戦争で迫害が激しくなって、昭和十六年まで遺愛に居たミス・ワグナーと共に三月六日にアメリカへお帰りになった。

寮は規律が厳しくて、外出やましてデパートへ行くなどとんでもないことで、せいぜい日曜に教会へいくだけだったので、休みに家に帰るとお手伝いさんが「籠の鳥のお嬢さんが帰ってきましたよ」と母に言っていた。私の住んでいた旧銭亀村は現在の中野町で、そこで管理人を置いて、永田牧場をしていたが、後に金子さんと言う人に二十町歩売ったのが今は酪農公社の函館牛乳になっている。

そのころの牧場のまわりは春になると一面スズランが咲きほこり、遺愛の生徒たちが遠足にきてスズランを摘み（注3）、ミス・チニーやミス・ワグナーは私の家の二階で母のもてなしのごちそうを食べて帰った。

昭和十二年遺愛を卒業して日本女子大学校（現日本女子大学）の入学試験を受けるはずだったが、からだの弱かった私は五年生の時、今病院（現杉並町）に入院していて試験どころではなかった。英語が好きで行くのなら英文科と思っていたが、その試験は十二月に終わっていた。熱は上がるし、悔しさと悲しさで病院のベッドで泣いていたら担任の先生が家政科ならまだ間に合うからと願書を出してくれた。病みあがりの身を心配した母と二月二〇日過ぎ上京し、三月の試験に間に合うことが出来た。天気が荒れて連絡船がひどく揺れたのを今も忘れることができない。

日本女子大学校へ

昭和十二年四月私は日本女子大学校家政学部第二類へ入学した。その当時学校は三類に分れていて、一類は、無試験で入学金と授業料を払ういわゆる花嫁修業を目的とする人、二類は検定試験を受け将来教師を目指す師範科で北海道からは私とあと一～二人しか入らなかった。三類は社会学科で主に福祉関係の仕事に就く人が多く、同期に一番ヶ瀬康子（注4）さんがいた。

牛込の家は祖母が亡くなって、父の妹になる叔母が婿養子をとって住んでいたが、学校のある文京区目白台まで電車を乗り継いで通学するのが大変なので寮に入ることにした。寮生は百人以上いて寮監は作家の大岡昇平の伯母に当たる人だった。

私が入ったのは「泉山寮」という洋風の部屋でベッドがあり二～三人部屋だった。他に畳の和風と和洋折衷の

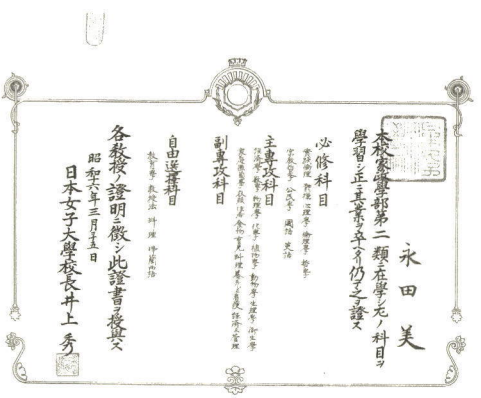
部屋もあった。

寮生にはハワイの日系二世や、朝鮮の貴族の娘もいた。みんな日本語で話すが、自分たちだけになると自国語で話していた。私は同室の趙さんから韓国語を教えてもらって楽しかったが、中には同室をいやがる人もいた。みんな日本名を名乗っていた。

そのころ私には婚約者がいた。叔母の夫の弟に当たる東大出の軍医で、満州に赴任していて休暇に叔母の家で会っていた。

私自身は婚約者とは知らなかった。母と叔母が決めていたのだ。ある日叔母の家に行って彼と話をしていたとき、中国人が虐殺された写真を見せられた。多分軍医なのでそういう写真を持っていたのだろうがどうして私に見せたのか理解できなかったが、今イラクの爆撃などの報道写真を見ると、昔見た写真と重なって愚かな時代を繰り返しているように思えてならない。婚約者は支那事変（日中戦争）のとき戦死した。このことは今まで誰にも話しことがない。

昭和13年　日本女子大学校の頃



本校家政學部第二類在學ノ者ノ科目ヲ學習シ左ノ學業ヲ卒ヘタルコトヲ證ス

永田美

必修科目

主專攻科目

副專攻科目

自由選擇科目

各教授ノ證明ニ依リ此證書ヲ授與ス

昭和六年三月五日

日本女子大學校長井上秀

卒業証書

前年に大政翼賛会が結成され、軍事色濃厚となった昭和十六年三月、日本女子大学校家政学部第二類を卒業した。私は食品化学の勉強をもっとしたいと思い、学校の推薦と面接を受けて慶応大学の食物栄養管理科へ就職が決まっていた。

結婚・樺太へ

私は知らなかったのだが、函館の遺愛女学校のミス・チニーのあとをうけて校長になった小畑信愛氏から母に私が卒業したら遺愛に来るようにとの手紙をもらっていた。昭和十二年に起こった支那事変（日中戦争）の出征で男の人がいないことと、戦争の最中に私を東京におく訳にいかないという母の希望もあって、小畑校長と取り決めていたのだ。私はこれに従った。

昭和十六年四月遺愛女学校の英語と家庭科の教師として赴任した。しかし男の先生がいないので、持っている免許以外の日本地理も教えなければならなかった。毎晩マニュアルと首っぴきで勉強した。給料は八〇円だった。

教師の仕事も一年経て、要領が分かりようやく慣れてきたころ、母から縁談を進められた。私は進学、就職などすべて母や叔母から言われるままにしてきたので、この縁談も、私が承諾する以前にもう母とむこうの父親の話し合いで進められていた。

夫になる片桐憲治は三六歳、樺太、大泊の缶詰工場を営んでいた。国の防衛召集で主に軍需品のタラバガニや佃煮等の缶詰を作っていた。片桐の父は「いい嫁が見つかった」と喜んで、縁談はトントン拍子に進み、十七年七月二日に五島軒で結婚式を挙げた。夫の憲治の仕事は人にまかせられないので、樺太からなかなか戻って来られず、夏の結婚式となったのだ。私は二三歳だった。

仲人は義父の家の隣に住んでいた函館中学校の草野先生で、招待客は、両家合わせて五〇人くらい、私の方は小畑校長はじめほとんどが遺愛の先生だった。

戦争中で「パーマネントはやめましょう」という国防婦人会のスローガンのもと、衣服はみんな切符制（注5）で、一人に足袋三足とか晒一反などと決められていて、花嫁衣装の、まして夏用の着物は手に入らなかったが母が東京三越で絽の裾模様の振り袖を誂えてくれた。母が「誰かに聞かれたら、もらったものと言って着なさい」と言ったがそれは時勢を考慮してのものだった。

結婚式の引き出物は夫がやはり切符制のなかなか手に入らない砂糖をノーレッテルの缶詰にして樺太から送らせて、それで羊羹を作って配ったので今でも後ろめたい気がしている。

義父は樺太、真岡でカニ、エビの加工業を手広くして

昭和17年７月２日
母が東京三越で誂えてくれた
絽の振り袖

いた。四男三女のこどもがいて夫は三男で大泊中学から東京物理学校（現東京理科大学）に進学した。

娘たちは、豊原にも女学校があったが札幌の藤女学校に行っていた。夫の母は早くに亡くなり、使用人には「奥様」と呼ばれていた内縁の妻がいた。こどもたちは「床上げばあさん」と言っていた乳母だった人のようだ。

結婚式を挙げてすぐ夫は樺太へもどり、私は本町の今医院の向いに家を借りた。遺愛へはその年の九月まで専任として、十月から翌十八年六月三十日まで講師として勤務した。

樺太から通って来ていた夫が、戦火がはげしくなり、函館に来られないので、私が樺太に行くことにした。母はそんな遠いところにやりたくないと反対したが、結婚した以上夫が函館に帰ってこれないとなれば私が行かなければならなかった。ベルベットのコートを来て行った記憶があるので寒い十二月だったと思う。

函館からブルーシートの二等の汽車を乗り継いで稚内に着いた。樺太の大泊までの稚泊連絡船は一日に一本しか出ないので、どうしても稚内に一泊しなければならなかった。稚内には木賃宿といわれた旅館が一軒しかなく、夜は電気もつかず、ほの暗い明かりのランプだった。見知らぬ他人が何人も同室に泊まるので、狭いし、気持ち悪くて寝られず座ったままの不安な一夜を過ごした。

翌日朝早く連絡船に乗った。大泊まで八時間かかった。当時、鳥も通わぬといわれた最果ての外地（樺太）にたった一人の旅、不安と心細さ、行けども行けども茫々たる景色は、今でもあまり思い出したくない新婚の記憶となっている。

大泊の家には私が行くので雇われた六十歳過ぎのばあやがいた。名古屋出身とかで「奥様、ようおいでたねぇー」と言って迎えてくれた。食事の支度、掃除、洗

濯、布団の上げ下ろしまで家事をすべてやってくれたので私は事務所で、来客の接待、給料の計算などの事務の仕事をした。

大泊は雪はあまり積もらないが、外に出る時は指先も凍るほどの寒さで手袋をはいた。大きな街でタクシーも走っていた。

夫の工場では缶詰を作る日本人の技術者が十人ほどいて、他は下働きの「出面」といわれている韓国人が主だった。その人たちは土間にムシロを敷いた粗末な家から通っていて、仕事を終えて帰るとき必ず私に「オクサン、イマカエルカラ」と片言の日本語で挨拶をした。

私は身体が弱くこどもは出来ないだろうと思っていたが、十九年三月に長女弘子が生まれた。その年の秋戦局もはげしさを増し、防衛召集で早くに情報を知った夫が「レニングラードがだめだから、日本は負けるよ」と言っていた。それからしばらく経ってから私と生後半年の長女を日本へ帰すためにどこからか船をチャーターしてきてくれた。

弘子が生まれて六ヶ月になっていたので十九年十月だったとおもうが大泊から船が出ると夫に言われるままに、こどもの着替えだけであとは着のみ着たままであわてて家を出た。「奥様どこぞへいくのかね」と何も知らないばあやに聞かれ「ちょっとね」と答えたが、ばあやにも内緒だったので、残してきてその後どうしたかと、うしろめたさに今でも胸が痛む。

港に着くと、女、こども、年よりなど船に乗る人たちが大ぜい集まっていた。船に乗ろうとしたとき、船長らしい人が「万一の時大人だけは助けるが、赤ちゃんは助けられない、こどもは捨てなさい」と言われた。私は死ぬ運命ならこの子と一緒に死のうと思った、そして、こんなことを言う人は命なんかどうとも思っていないのではないかと怒りがこみあげてきた。

敵の駆逐艦に撃たれるのを避けるため、船の明かりを消し、定期行路を外れて海峡を航行しているので夜の海はまっ暗でひどく揺れた。

不法にチャーターした船なので、日本軍にも攻撃されるかもしれないという話も聞いていた。これからどうなるのだろう、このまま死ぬかもしれない、本当に稚内に着くのだろうか、と不安でたまらなかったが、函館で母が待っているからとそれだけを考えて耐えた。このつら

い体験は誰にも話さなかったが昭和四十年私が函館商業高校教師の時、卒業していく三年生に講演をする機会があり、初めて引き上げて来たときの状況を話した。前で聞いていた男子生徒が涙ぐんでいたのが今でも印象に残っている。

ふたたび教師として

戦争が終わって、昭和二三年ソ連に抑留されていた夫が帰ってきた、病気で帰されたと言っていた。

翌年次女康子が生まれた。病身の夫と幼子の親子四人の生活は母がみてくれた。農地改革で不在地主の土地が取り上げられるまでは地代金が入っていた。土地が無くなったとき母は「こんなになっちゃったのよ、お父さまがいらしたら何とおっしゃったでしょう」と嘆いていたが、私たちは母がいてくれて助かった。

昭和二五年、市内高校再編成があり（注6）、中部高校で教員免許の一級取得者で女の教師をさがしていた。たまたま校長の大根田資雄氏が就任の挨拶に昭和二一年に再来函していた遺愛女学校のミス・ワグナーをホワイトハウス（注7）に訪ねた。そのときミス・ワグナーが「ミセス・永田が樺太から戻ってきているはずです」と言ったので、大根田校長が私の家に訪ねてきた。当時、教育制度が変わったので、戦前からの教師はほとんど仮免許で、正教員の資格を得るために夏休みに北大へスクーリングを受けに行っていた。私は家庭科一級の教員免許を持っていたが、病気の夫とこどもをかかえて、母も勤めなくてもいいと言ってくれていたので本当はやりたくなかったが、何回も頼みにみえたので承諾した。だから発令は四月ではなく五月三一日付けになっている。

家のことは母とお手伝いさんがしてくれるので助かったが、朝六時に家を出なければならなかった。下の子を湯川寺で経営していた保育所に預けた。そこの住職の奥さんが私の遺愛の後輩だったのでずいぶんお世話になった。

勤めはじめてしばらくして遺愛高校の小畑校長にお会いした。小畑校長はミス・ワグナーが日本に戻ってきたときに持ってきた米軍のジープを二瓶さんという運転手つきの専用車として乗っていた。「教員に同窓生がいなくて困っている、遺愛に戻ってこないか」といわれたが、

中部高校へ勤めたばかりなのでお断りした。小畑校長は母とも親しかったので私によく目をかけてくれた。

それから中部高校に十七年、商業高校に十四年と定年まで勤務した。中部高校は一日も休まなかった。昭和二九年に母が亡くなり、三四年に夫が抑留生活からの全身衰弱が元で亡くなった。夫が亡くなった後、墓守をしなければならなかったので永田の姓に戻った。

生まれて間もなくから保育所に預けられて、寂しい思いをした次女が小学生のとき「ママ、私は大きくなっても勤めないからね、赤ちゃんがかわいそうだから」と言った言葉は今でも忘れられない。胸がいっぱいになった。

遺愛女子高校には公立高校を退職後、昭和六十年から一年間講師を勤め、さらに同窓会長、現在は理事として係わらせていただいている。思えば十五歳で洗礼を受け、クリスチャンの精神を学ぶことができたのは遺愛で育ったおかげと思っている。

いまふりかえってみて私は自分の意志というより父、父の死後は母や伯母の指示に従がって、進学、就職、結婚と人生の大事な節目を過ごしてきた。でも、いつの時も神の大きなみ心に支えられ、めぐみにあずかっている、決してひとりではないと思っている。

取材を終えて

三月七日、永田美さんに初めてお会いした。大きなお屋敷のこと、結婚式の様子、樺太からの引き揚げなど体験した本人の言葉として、興味深かった。二度、三度とお会いし、話しを伺っていくなかで、「いままで、誰にも娘たちにも話したことないんですよ」と戦死した婚約者のことを語った。そのとき見せられた写真と、繰り返される愚かな戦争の犠牲者の悲惨なすがたが重複し、永田さんの心にずうっと長く封印されていた思い出がこころをよぎったのではないだろうか。

経済的に恵まれていたとはいえ、戦争の時代の悲惨さ、戦後のこどもをかかえての勤務の大変さがお話しのはしばしに伝わってきた。お話を聞いて、八六歳だが凜としたなかにも誠実さとさわやかな明るさが感じられた。それはクリスチャンとしての深い信仰からくるものなのだろう。

いま、一人ぐらしだが、生活習慣病にならないように塩分、糖分に気をつけた食事を心掛けているそうで、さすが家庭科の先生と思った。

（注1）　宮内省に属し、宮中の会食の料理などをつかさどった役所

（注2）　停留所名は「松風町」大正九年十月、遺愛女学校が函館水電公社に対し「大門停留所」改称を要望し、「松風町」となる

（注3）　明治三五年発刊の川上滝弥、森広著の「はな」のスズランの項に「聞説函館の遺愛女学校にては百合採りとて初夏の一日を遊興する行楽を、この花盛りに催すとぞ、あわれやさしき人々の心かな」とある

（注4）　「福祉を専門にすると変人、奇人あつかいされた時代」から、五〇年以上にもわたって、福祉の研究や活動を第一線でリードしている。

（注5）　昭和十五年、国民生活新体成運動で、米、砂糖、マッチを切符制にした。同年、米穀通帳配給制、二割節米運動などがあった。

（注6）　昭和二四年五月三一日教育職員免許法公布、二五年四月市内高校再編成、函館中部、西、東高校誕生

（注7）　遺愛の宣教師館。白ペンキ塗りなので明治時代より市民に認知されていた。平成十三年国の重要文化財に指定される。

（参考文献）

南北海道自然保護協会会報
三吉明著「北海道社会事業史研究」敬文堂出版部
「遺愛百年史」遺愛一〇〇年史編集委員会

昭和５年　リリー摘み
－遺愛女学校の学生と教師達－

戦前、単身北京に渡った遺愛の卒業生

―門田昌子さんの戦中・戦後ノート―

酒井嘉子

はじめに

門田（旧姓佐藤）昌子さんのことを私に教えてくれたのは『道南女性史研究　第十二号』（一九九九年）に「石本の小母さんの思い出」を寄稿してくれた礒部智恵さんである。

戦後初めての函館市議会議員に立候補した四人の女性（注1）のうちの一人石本モヨノさんを彼女は記憶していた。そしてもう一人、礒部さんは佐藤昌子さんの名を上げた。

「私は父の勧めで庁立函館高女を出ましたが、本当は遺愛に行きたかった。柏野小学校を一番で出て遺愛に進み、遺愛を出てから北京の崇貞学園にいらした方が佐藤昌子さんで、彼女とご一緒に『少女の友』編集長の内山基さんを函館にお呼びしたことがあるの」と思い出を語ってくれた（注2）。

そんな礒部さんの話がきっかけで門田さんは勿論、崇貞学園のことも、『少女の友』のことにも私は関心を持ち、その門田さんについてここに紹介できることを嬉しく思う。

門田さんには最初私の取材申し入れを、ノンフィクション作家の「山崎朋子さんの取材を受けているので」と断られたが、東京の女性史研究者折井美耶子さんのお骨折りで、昨年夏、東京のご自宅でお話を伺うことがで

きた。折井さんは門田さんと住まいが近く、戦後、世田谷地域で婦人運動を一緒にされた旧知の間柄だった。戦後の詳細は折井さんに書いていただくとして、私は主に戦中・戦後の戦争時代に焦点を当てて、若い門田さんがどのように生きていったかを浮かび上がらせたい。山崎朋子著『朝陽門外の虹―崇貞女学校の人びと』(注3)に書かれていない側面をも伺えた。

生い立ち

門田さんは、男五人女四人の九人兄弟の三女として、一九二一(大正十)年四月三〇日に北海道中湧別(現北見市)の官舎で生まれた。一番上の姉は遺愛に入学し寄宿舎生活を送ったが、国鉄(当時)に勤務していた父親が退職したとき、末三人の娘たちは自宅から遺愛女学校に進ませたいと考えていた母親の意思で函館に家を建てて落ち着くことになったという。彼女が柏野小学校一年に入学する前年であった。

「私の小学校時代はよく五稜郭城址で遊んで、家で勉強した覚えはありませんが、いつも全甲でした。小学校時代は近所の遊び仲間に双子の兄弟がいて、誘われて建前の餅拾いに行った事があるの。それが随分遠いところで帰る頃にはすっかり暗くなってしまい、家では心配していて大目玉をもらいましたが、その一人は井上信興さん、現在広島市在住の啄木研究家として有名になって、今も著書を出すたび送ってくれます。啄木といえば、遺愛女学校時代、わたしは新聞など読んでいなかったけれど、新聞に啄木忌があるって書いてあったから行ってみないかと友人に誘われて、三人で行ったことがあるの。当時は青柳町の図書館で開かれていましたよ。私達以外は小父さんばかりで、向こうも驚いたでしょうけれど私達もびっくりしました。〝南部せんべいとミカン〟の会合でした」と。

さて、父佐藤金次郎は山形出身で、中学を卒業してからは独学で英語を学び、機関車に関する英語の本を外国から取り寄せるなど、根っからの汽車好き人間だったそうで、国鉄に就職した。汽車の開通基地、新潟県長岡に勤務していたころ紹介された女性が近藤りうさんだった。

母近藤りうの実家の祖父は「新しい物好きで身上をつぶした」といわれた人、祖母はクリスチャンだったとい

う。函館と同じく幕末からの開港地で外国人が多かったということだろうか。そんな家庭に育ったりうは、やがて真面目な金次郎さんと結婚した。昌子さんは「母は、祖母と同じくクリスチャン、たしか遺愛と同じメソジスト派で、賀川豊彦の崇拝者。小樽ではバチェラー夫人から編み物を習ったり、北見ではピアソン夫妻（注4）と交流があり、ピアソン夫人が家に来られたことも時々ありました。鼻の高いピアソンさんが幼い記憶に残っています。母は函館に来てからは、年も取っていたし、教会には行かなかったと思います」と話し、その母親の意志で、昌子さんたち三人は女学校の裏門から五分ほどの新興住宅地に建てられた新居から通学した。

遺愛に学んで

門田昌子さんが一九三四（昭和九）年から三九年までの五年間学んだ函館の遺愛女学校は、一八七四（明治七）年創基（注5）、一八八二（明治十五）年開校のミッションスクールで、当時校長は十年間勤めたミス・アリス・チニーが一九三五年三月退任後、日本人男性の小畑信愛が校長に就任している。函館の他の高女より一年長い五年制の、寄宿舎併設の北海道で最も歴史ある女学校であった。

門田さんは後年に「充たされた少女時代」と題して「…女学校は五年制の全校生徒三百人の小規模校で、自由で家庭的な雰囲気に溢れていた。日本が戦争の色濃くしてゆく時代で、アメリカ婦人の校長から日本人の男子校長に変わったりしたが、軍国主義教育に傾斜することもなかった。授業は厳格だったが特色のある教師が多く楽しかった。試験勉強が嫌で、私は日常的によく勉強した」（注6）と書いている。この時期の門田さんはテニスに親しむ一方、文学少女として多くの本・雑誌を読み、函館の啄木忌にも顔を出し、日曜日には教会に通っていた。「わたしは何故か分からないけれど、日基（にっき）、元町の坂の上にあった（当時は）日本キリスト教団の教会に通っていました。女学校四年生のとき、その福島牧師の家に、牧師の妻の父親で東京の市谷教会の外村牧師がたまたま来函されていて、その方から洗礼を受けました。北京大学に入学した翌年、帰京した際に市谷教会で中国のことを話したことがあります」と。

月刊誌『少女の友』と

『少女の友』について、法政大学教授で少年少女図書史の研究家アン・ヘリングは次のように書いている。「『大正デモクラシー』に向けての新風がすでに吹いていた明治四一年、東京・銀座の実業之日本社より世に送られた月刊誌で、約四〇年間、日本全国の進歩的な家庭の女の子の良き相手となった。『少女の友』の刺激があってこそ、多くの女性ジャーナリスト、教師、文化活動を支える知識人、女性芸術家たちが巣立つ結果となった。作家となった旧読者には瀬戸内寂聴氏、田辺聖子氏などがおられる。…」（注7）と。

一九三一（昭和六）年から一九四五（昭和二〇）年までこの雑誌の主筆を務めたのが内山基で、前掲書には「内山基氏編集の『少女の友』で最も特色のあったのが通信欄の「友ちゃんくらぶ」と、読者の集会「友ちゃん会」であろう。…戦時体制が進むにつれ、これを非難する声があがった、不謹慎、軟弱と。しかし誌上名は単なる感傷からだけではない。もの堅い地方の女学校では、『少女の友』の都会趣味をよろこばぬ所もあり投書などするのは不良少女視さえされた。誌上名は少女たちの自衛策でもあったのだ。…」とある。

その「友ちゃんくらぶ」は地域別に「東京クラブ」以下、北は北海道の「北海クラブ」から日本の植民地であった朝鮮、台湾、「異国クラブ」まで、読者のハガキ通信と内山主筆の返事が載った。

女学校時代の門田さんは『少女の友』の愛読者だった。函館の磯部さんも毎月『少女の友』が届くのが楽しみだったと語ったが、門田さんは雑誌を読むだけでなく、聖銀鐘というペンネームで「友ちゃん

函館第一回友ちゃん會のお知らせ

待望久しかつた函館第一回友ちゃん會も、いよ〳〵八月十三日内山先生の御來場を得て、樂しく開くことになりました。遠くから來られる内山先生に函館のよさを滞山吹きとんで函館への理解を深めて頂きませう。會則は左の通り、尚御出席の方は八月一日迄に齋きます様中島町五、早川富代宛に御返事下さいませ。

時　八月十三日午後一時より
所　末廣町　金森ビルディング
會費　五十錢（當日持參）
幹事　聖銀鐘、友待草

も友ちゃん會開いて下さらない？　オネガとします。茶目テヤマ沒なさらないでネ、（函館　藤村みどり）

（M）いよ〳〵開かれる様です、是非お集り下さい。

▲友ちゃんのうたとても素敵ですのね、函館の友ちゃん會の時は皆でうたへる様に致しますわ、ふゆかれ様お投書なさつて？　眞帆ちゃん面影草様みふるひなさいませね。學校を卒業致しましたら一層友ちゃんがはなしがたくなりました。（函館　聖銀鐘）

（M）今度はお目にかゝれますね。

▲友を受取るたびに、何處から讀んだらよいかと唯くるくるるまはしては母に何時も笑はれる子です、小樽のみなさまみ振ひ遊ばせ。（小樽　ミツマメ）

▲今月の表紙可愛いくて大好きです。それから服裝帖有難うございました。札幌はこれから若葉の季節です。札幌でも友ちゃん會なのかしら。

『少女の友』昭和14年８月号

くらぶ」に投稿していた常連で、愛読者なかまでは有名な存在だったという（注8）。

『少女の友』昭和十四年八月号、三〇三ページには、「函館第一回友ちゃん会のお知らせ」とあって、その会は八月十三日午後一時より末広町金森ビルデイング（尼崎製缶KKを経て、現在ウィニングホテルが建つ）で開催された。会費五〇銭、幹事は聖銀鐘、友待草の二人。昨年秋、私が門田さんから受け取ったはがきには「お尋ねの友ちゃん会のこと、私と久慈さん（旧姓）たちが開催したのは昭和十四年七月か八月、…私が北京に参ります年の夏です。私と久慈さん（注9）とで内山さんを立待岬などへご案内し、五島軒で夕飯を御馳走になった想い出があります」と。その時の記念写真には、遺愛や庁立高女の制服姿や私服の女学生たちが、内山編集長を囲んで六九人も参加している。門田さんは『少女の友』に紹介された絵を参考に、東京文化服装学院出の先生に教えてもらって自分で縫ったワンピースを着て出席、この時、北京の崇貞学園に行くことを打ち明けたという。

1939（昭和14）年８月13日午後－末広町金森ビル屋上にて記念撮影－
内山基氏の向かって右側２人目が門田昌子さん

北京の崇貞学園へ

崇貞学園（注10）とは、同志社大学神学部出身のクリスチャン清水安三・郁子（注11）夫妻が北京の朝陽門外に経営していた学校で、日中戦争の頃には学校規模も拡大し、一九三九年には崇貞日本女子中学校も設立した。しかし月謝も払えないような中国の貧しい家庭の子どもたちが主に学んでいたから、清水安三は常時各方面から寄付を募った。崇貞学園が発行していた「支那之友」（注12）には、日本全国だけでなくカラフト・満州・中国・朝鮮・台湾、ハワイやニューヨーク…等々にいたる各地からの崇貞学園寄付者名が載り、その中には遺愛女学校も再三登場した。一方、清水安三自らは印税を見込んで中国のこと・崇貞学園のことなどを日本の雑誌に書き、また本を多数出版していた。

『少女の友』昭和十四年四月号には「日本と支那の女学生に与える」と題した清水安三の七ページの記事がある。その中で「日本と支那が本当に仲よくなるにはどうすればいいのだろうと、わたしはよく人から聞かれます。その度に私は日本と支那の少女たちがまず仲よくすることですとこたえています…　私が北京で経営している崇貞学園から今日本へ数人の（支那の）女生徒が留学しています…」とあり、多くの『少女の友』愛読者も読んだと思われる。

しかし、門田さんに衝撃をあたえたのは、次の一冊の本だった。

一九三九（昭和十四）年遺愛を卒業する門田さんは、推薦を受けて東京女子大学校に進みたいと考えていたが、学校長の「雰囲気の違う学校にしてはどうですか」という進めもあって東京女子高等師範学校を受験するため上京した。しかし受験当日、時間の手違いで受験に失敗、失意のなか何気なく入った函館の本屋で〝北京の聖者清水安三牧師〟というタイトルが目に留まり、購入したのが、出版されたばかりの『朝陽門外』（昭和十四年四月二〇日、朝日新聞社発行、一円三〇銭）であった。

『朝陽門外』の表紙

彼女は「一気に読み終えたときの深い感動を今も忘れません。それは小説とは異なって、事実に基づいた生々しい記録であったからです（今にして思えば、安三先生独特のホラも混じっていたかもしれませんが）。…」と書いている（注13）。そしてさっそく「中国の貧しい子どもたちのために私もお役に立ちたい」と北京へ手紙を書いたという。日中戦争が始まってすでに二年、戦争直後の八月「支那渡航取締方の件」が出されていて（注14）、簡単に中国へは渡航できなくなっていたが、北京から初夏のころ「是非来てください」と返信が届き、単身赴く決心をする。両親も反対しなかった。

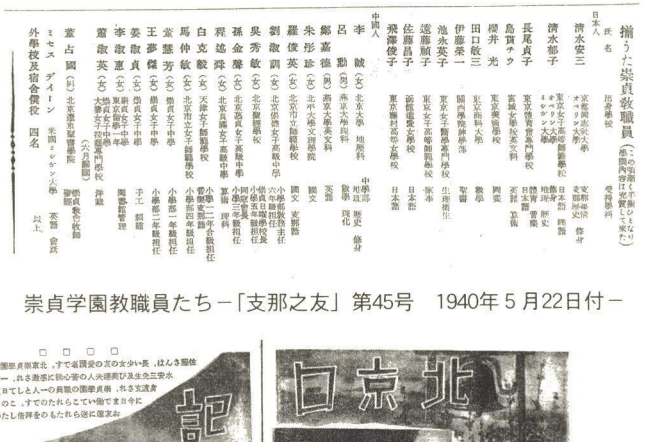
「安三先生の元には、多くのそんな手紙が届いていたでしょうに、私を呼んでくださった」と門田さんは語ったが、一九三八年九月十日付「支那の友」には、寄付者録に北海道遺愛女学校女子青年会殿・金八円、三九年一月二〇日付には十三円八七銭、同年七月五日付には函館遺愛女学校ＹＷＣＡ殿・金七円九〇銭、および金十円六九銭、…とあり、清水安三・郁子夫妻にとって函館遺愛女学校はたびたび目にする名前だったとも思われ、その遺愛からの一途な手紙は大歓迎だったと思われる。

「私が崇貞に着いたとき、安三先生はアメリカ講演旅行中でお留守でした。…棗寮（なつめ）の門をくぐった私は郁子先生に迎えられました。小柄な郁子先生は濃紺のどんすの中国服を着ておられ一見こわい感じでしたが、眼鏡の奥の眼は優しく感じました。（その日の夜の歓迎会で）…寄宿生は中等部の学生で…はじめて聞く中国語はことばのくぎりがないようで、いつになったら分かるだろうかと不安になりました。…日本人の学生が日本語の流行歌をうたい、朝鮮人の学生がタンバリンを持って踊ってくれました。」（前掲書）

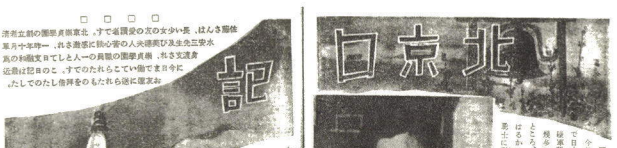
崇貞学園は北京の東、朝陽門外に続く商店や民家の密集地域から更に外れた場所に建てられていたが、門田さんが行った頃は小学部校舎一棟、中国レンガの中等部校舎二棟、運動場と図書館に、立派な体育館が完成していた。

前掲一九四〇年五月二二日付「支那之友」（次頁参照）を見ると、教職員は日本人が安三・郁子夫妻に佐藤（門田）さんを加えて十一人（うち女七人）、中国人が十七人（うち女十四人）、アメリカ人（女）一人、ほか学校及び宿舎僕役四人と陣容は充実していた。

新しい環境で小学部、やがて中学部の日本語教師として働く門田さんの〝北京日記〟が『少女の友』昭和十六年五月号と九月号に二回掲載された。



崇貞学園教職員たち－「支那之友」第45号　1940年５月22日付－

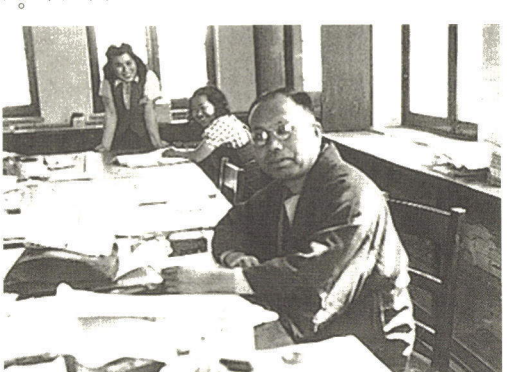


門田さんの“北京日記”－『少女の友』昭和16年５月号より－

当時の北京（北平）

ところで日中戦争以降の北京はどんな状態だったのか。

一九三七年七月七日、北京郊外の盧溝橋で事件が勃発したのち、『北京の日の丸』（注15）によると、北京（北平）は八月八日、日本軍が進駐し、一九四五年の日本敗戦まで八年間、日本軍占領下の日々が続く。九月には北京の各大学はミッションスクールを除いて休校に追い込まれた。北京大学をはじめ、各大学では教職員の多くは北京を脱出して長沙で三校合同の国立臨時大学を開校、やがて翌年四月、雲南の地、昆明にのがれて国立西南連合大学を開校して、日本の占領に抵抗していた。



－教員室で清水安三先生と門田さん（左奥）－

すでに「十二月十四日、日本侵略者のお膳立てで華北傀儡」（前掲書）中華民国臨時政府が成立し、十八日、日本はこの政府を承認、二〇日中国政府は承認しないと宣言した。そんな中、戦争前二千人余だった北京の日本人は一九三九年末で三万余人に急増し（一九三八年三月の北平市人口は一五〇万余人とある）、一九四〇年には六万余人に倍増、穀物不足は深刻となり、物価は急騰した。

「支那之友」にも「北京は物価暴騰、天井知らずというところですが、…在留邦人の数、今や七万を以って数うるに到り、学童を容るる東城西城の三小学校は又も狭隘を告げ、西城新市街地区には何をさて措き、少なくも更に二校を増設しなければならぬという程です…」（四〇年五月二二日付）、翌年八月二〇日付同紙には「北京邦人人口は九万を突破しました」とある。

崇貞学園入学者数も増加し、一九四二年五月十日の同紙では、生徒総数は五百人となり、「生徒の中、二百七十名は漢人、百名は満人、回々は五十名、八十名は内地及び半島の日本人である…私共の学校及愛隣館も一昨日、華北政務委員長王揖唐氏から、各五千円の補助金をいただきました」とある。しかし経費増加に較べ、各地から寄付金も思うように集まらず、「従来は対支文化事業部（移管して興亜院）から五千円の補助を頂いていた…」（四一年十二月五日付）が一九四一年末で中止となって、「一昨年十二月御下賜金を拝領」（四三年八月十五日付）となった。

門田さんはというと、日本軍占領下の城門は七時になると閉じられ、城外にあった崇貞学園や棲寮に帰れないときは、日本の女性キリスト者による医療セツルメント、天橋スラム隣接地に建つ北京愛隣館（注16）に泊まった。愛隣館の医師池永英子は崇貞学園の校医でもあり、ここで日本料理（といっても、焼き魚にお味噌汁と漬物）を御馳走になったという。そこでは崇貞学園に通って来る子どもたち以上に貧しい人々が溢れていた。

「寄宿舎で中国の少女たちと寝食をともにする生活をはじめ、…一年半ぐらい経ち、言葉も少し出来るようになって、周りが見えるようになったとき、疑問と不安にかられるようになりました。どうして中国はこんなに貧しいのだろう。街に出れば気力を失ったような人が大勢道に蹲っており、洋車夫など働く人も、元の生地がわからないほど継ぎのあたった衣服を着ています。子どもた

ちは、すり・かっぱらいは当り前、物を売ったりしているのは、ましな方です。一方では日本人がどんどん増えて、街では中国人がどなられたり、車夫などが足蹴にされたりしているのを見せつけられます。その頃の私は、日本の侵略戦争ということを知りませんでしたから、こういう状況から、果たして中国は救われるだろうかと悩みました。そして私はもっと中国のことを知りたい、もっと大きな視野で、ものを考えるような力をつけたいと真剣に考えるようになっていきました」(注17)。

北京大学へ進学

「私は運のいい人間だと思います」と門田さん。「遺愛在学中に、東京女子大から来られたミス・ワグナー、一年のときは日本語を一切使わない英語の授業を受けた先生ですが、留学しないかといわれたことがあります。清水先生からは大学に行くのなら中国でなくてもアメリカはどうか、僕が演説旅行したとき知り合ったカリフォルニア在住の遺愛の卒業生で、留学するのなら費用一切面倒見てくれるといっている人がいるのだよという事でした。私は中国で仕事するからには、もっと中国を理解したいと北京大学にしましたが、受かるかどうか猛勉強をしましたよ。掲示板に自分の番号を見つけたとき、一人の女子学生が声を掛けてくれました。魏永儒(ウエイユンルー)という方で、入学してからはいつも行動をともにし、三年の二学期からはその方の家から通学させてもらうほどお世話になった親友です。河北省の大地主の娘さんでしたが、その地方が八路軍の支配地区になったため、お母さんと甥、姪の四人で北京で生活していました。」

臨時政府は一九三八年春から秋にかけて、脱けていって人数の足りなくなった四大学を統合して北京で「国立北京大学」を一部再開した。国立北京大学文学院教授で残留教授の一人となっていた周作人の立場は、北京脱出組からは、糾弾宣言や周作人への公開状が発表され、日本側からは表向き中国人による「中華民国臨時政府」要職への誘いかけなどで、非常に複雑だったと思われる(注18)。九月、アメリカ系ミッションスクール燕京大学の客員教授に就任していた周作人は翌三九年一月、「北京大学」図書館長に就任、八月、周作人を院長として「北京大学」文学院が再開された。

學園點描

清水郁子

1 北大入學の佐藤昌子さん

佐藤昌子先生がこの度國立北京大學文學部史學系の入試に見事パスされました。我等は心より女史の今日あること喜び、かつその前途を祝福してやまぬものであります。

佐藤さんを崇貞にお迎へしたのは一昨年の十月三十一日、女士が十九才の秋であつた。清水を頼つて來られた方清水の事業の故に來らわかき身を以て日本も、北海道の果てから、萬難を排してこられた女士を失望させまい、凡てを捧げて神に仕へやうと決心してこられた可憐な少女の心を傷けまいと、心を碎いた事は事實であつたが。昨年の三月末から新學期にかけて恰も時清水は渡米中のことと、先生は手不足、猫の手も借りたい同どの時であつたので、私は忽ち佐藤さんを大人に見立てゝ了つて、思ひつきり澤山荷を背負はせた。それでゐて、いつもはいゝ、何でもやつて見ませう！と厭や顔一つせずいつも、明るく朗かにやつてのけられたものである。今回、今一段の教養を積まんとて、北京大學史學系に入學されたのである。吾々しては今より北大卒業後の同女士の活動奉公の舞台として、ふさしき榛崇貞學園たるものを向上發展せしめなばならぬとすもひます。

× × ×

「支那之友」第50号（1941年10月５日付）に紹介された
北京大学入学の門田（旧姓佐藤）昌子さん

その激動の北京大学に、一九四一年九月、門田さんは入学。崇貞学園の日本人女子学生用の寄宿舎、朝陽門内の城壁近くにあった豆芽（まめもやし）胡同（フートン）寮に起居し、舎監のような仕事をしながら大学生活が始まった。

当時紫禁城の北東に点在していた北京大学は、一九二〇年春から男女共学を実現していた。北京大学のシンボル、「紅楼という赤レンガの建物は学生運動の象徴のようになっていたのですが、わたしが入学したときは日本憲兵隊が占拠していました。わたしは歴史を勉強するのが中国を知る近道だと思って、北京大学文学院史学系に入りました。当時の院長は周作人先生、魯迅の弟さんで、日本文学の研究者、エスペラントの研究者としても知られていました。私のクラスは十七人でしたが、卒業できたのは十二、三人と記憶しています。日本人は私一人、他に二人の日本人聴講生がいました。女性は中国人に七人いて、私をいれ八人でした。私は外務省の紐つき留学生でなかったからか、偏見を持たずにつきあって貰えましたし、…中国の少女たちと寝起きを

－同級生と日向ぼっこ－
左から２人目門田さん、
３人目魏さん

－同級生と春休みペダルハイク－
萬寿山（現頤和園）

ともにしたという経験があったので、すぐ同級生たちと馴染みました。…しかし今になって思うのですが、日本人の私という学生の存在で、先生も生徒も言いたくて言えないことがあったのではないか、やりたくてもやれないことがあったのではないだろうかと今も思っています。そんな中で一つさわやかな思い出があります。上海の内山書店の内山完造さんが日本から陸路、北京を通って上海に帰る途中で、清水安三さんの所に逗留されたことがあるのです。その時私に、ぜひ北京大学の学生に魯迅のことを話したいから、学院長に話してくれないかと言われたのです。まもなく日本文学系の学生を対象に講演することが決まり、私のクラスからも傍聴に行き、…本当に感動的な話だったそうです。おそらく魯迅の臨終のことなどをお話になったと思います。……学内は一見平穏に見え、授業も順調に進んでいましたが、その底流ではいろんな動きがありました。学校を辞める人、重慶あるいは延安に行くということで消えてしまう学生や先生方もいらっしゃいました。又いつも校門のところに、物乞いのような人がたむろしていましたが、それは隠しカメラを持った日本の憲兵で、学生を監視していたのです。後に私自身の写真をつきつけられて初めて分かったことです。そういうことが学内では、見えないところで日常茶飯事のようにやられていました……私の親友の一人に朱景明（チュージンミン）という男子学生がいて、秀才でずっと飛び級できたので年は若いのですが、私の文章に筆を入れてくれたりノートを貸してくれたり、日本語訳ベーベルの『婦人論』（注19）を読めと進めてくれたりもしましたが、その頃の私にはつまらなくて、すぐ図書館に返してしまいました。ある時、朱景明が奥地に行ってしまうからと訪ねてきました。奥地とは延安のことです。その友人とは二度と会うことはありませんでした。…こういう友人たちは敗戦が色濃くなって来た頃、重慶か延安（注20）に行くなら何とか道を開いてあげると進めてくれ、四五年の三月頃と七月にそろそろ行かないと手遅れになるよと誘いが来ましたが、三月のときは卒論をまとめるので断りました。七月の時も、うやむやにしている中に敗戦になったのです。卒論といえば、私は中国研究の一族で、当時北京大学史学系副教授の今西春秋（注21）先生につきました。先生から興亜院（注22）の中にある図書室を三年間も自由に使わせてもらって、卒業論文は「明末清

初の女真族の習俗」というテーマでした。先生にはお世話になりましたのに、確かご苦労されて最後は天理大学に席を置かれていたと思いますが、そのままになってしまって……。わたしの中国人の友人は「女性の埋葬の仕方」というテーマで書いています。のちに老舎（注23）研究などで名を知られた中山時子さんは北京大学の一年後輩です。お父さんが上海の同文書院（注24）卒業生で、彼女は青島（チンタオ）生まれ、敗戦のとき三年生だったので戦後東京大学に編入して学んでいます」と。

敗戦・帰国

食料品だけでなく日用品まで異常な物価高騰の中一九四五年七月、門田さんは北京大学を卒業、華北総合調査研究所に就職する。たまたま八月十五日は、青島から北京に疎開していた崇貞学園時代の友人が訪ねてくるというので休暇をとっていた。玉音放送も知らず、夕方、立ち寄った日本人の友人の薬局で敗戦を聞くが、短波放送で情勢に通じていた中国人からたびたび負けると聞いていたのでそんなにショックは受けなかったという。家に帰ると、華北交通に就職した魏さんが「今日会社で日本人だけが集まって放送を聞き、その後みんな長いこと泣いていた」とだけ話した。門田さんが「あなた方が勝ったのよね」といったら「私たちがついているからあなたは心配しないで」といってくれたのを今も覚えている。翌日は素晴らしい北京晴れ、いつものように出勤したが途中、小学生が青空に紙飛行機を飛ばして遊んでいて、珍しいことと思いながら大通りに出て又びっくり。日本人が使っていた箪笥、鏡台など道具類から衣類、台所用品までめちゃくちゃに並べて売りに出されていたそうだ。北京の街では日本人が襲撃や略奪にあったという噂を絶えず聞かされ、友人の薬局に住み込みで働いていて、帰国するときは日本に連れて行ってくれと哀願していた朝鮮の女性が突然いなくなったという。威張っていた日本人の後楯がなくなったときの惨めさがやりきれなく、今まで誘われるたびに聞かされていた中国の解放地区、女性の兵隊もいて、男性と全く平等に暮らしている、そういう新しい世界を見て帰るのも悪くないなと考えた。職場の同僚には、秋田の人で二回ほど解放地区に行って帰ってきた日本人もいて、行くことを進めてくれた。

「『昭和萬葉集　巻七』（注25）に、田辺冬青果（とうせいか）氏の〝北京大学史学系終へし佐藤昌子中共に入ると言ふとどめかねつも〟という歌が載っています。田辺氏は、北京でアララギ系の『短歌中原』という短歌誌を主宰している方でした。八月末に『短歌中原』の集まりがあり、私は日本人への別れというような気持ちで出席し、解放区へ行くということを話したので、そのときの歌だと思います。……私の解放地区行きは思わぬ早さで実現しました。国民党の攻撃が始まりそうだということで、例の青年が早く入らないと行けなくなってしまうと急遽、私はその青年の姉で、二人で田舎に帰るということにして、荷物は着替え程度でほとんど持たず、自転車で城門を出ました。途中国民党の部隊に出遇ったりして冷や汗をかいたのですが、夕刻無事前線基地に着きました。解放地区は別に特別な所ではなくて、崩れかけた大きな土塀に「勝利万歳」と墨で書いてありました。勝つという字は月扁に力という略字でした。私は今でもはっきり壁字が眼に浮かんでくるほど印象深く覚えています。そして私の解放地区での生活が始まるわけですが、国民党の攻撃が激しくなってすぐにそこから退却、夜、犬の遠吠えを聞きながら黙々とみんな歩いていく、…通る村々、行っても行ってもほんとうに何にもない。そこは日本軍の殺しつくし奪いつくし焼きつくすという三光作戦のやられたところでした。…いろいろな体験をしましたが、小遣いや綿入れの上着を支給されたことなど記憶にあります。解放区で初めて私は岡野進、野坂参三さんのことも知り、「民主的日本の建設」（注26）という論文を読み、マルクス主義の文献に接し、…のちに丁玲（注27）の『太陽は桑乾河（さんかんかわ）を照らす』という小説を読んで、私が見聞したのと全く同じだと思いました。私が解放区で感じたことは、『私はキリスト教信者として天国を信じてきたけれど、この人たちは地上に天国を築こうとしているのだ』ということでした。…その後、解放地区は割りあい落着いていたのですが内戦が始まる気配が強まっていました。国民党と中国共産党側が協定をむすんで、中共地区にいる日本人は、国民党地区を無事に通すということになって、私は敗戦の翌年五月に帰って来ました。八月から内戦（注28）が始まりましたから幸運だったと思っています。…」（注29）

一九四六年五月、門田さんは天津の塘沽（タンクー）港から引き揚

げ船に乗り、無事帰国した。二五歳であった。門田さんは一旦、母の故郷新潟県の村松（三番目の兄が養子になって跡を継いでいた）に寄るが、函館を引き上げ東京に移り住んでいた両親や妹は、長姉のいる兵庫県西宮（義兄が、キングレコード西宮工場長をしていた）に疎開していると分かり、そこでしばらくゆっくりしてから、川崎市にいた次姉を頼って上京する。

九月から民主主義文化連盟で活動を開始し、十月には共産党に入党し、門田恒久氏と結婚もしている。夫となった門田氏は獣医学校を卒業後、日本軍の獣医として天津駐在中、郊外へ馬で出かけたとき八路軍につかまって解放区に赴き、そこで日本解放連盟を作っていた人であった。

これ以降の門田さんの活躍については、又の機会に譲るとして簡単な歩みを付記する。

一九四七年　十月長男出産、当時は会計検査院の調査部に勤めていたが、ただ一人の大学卒女性として、給仕として永年勤務の女性とともに昇給。産前産後の休暇を取得した後に退職する。

一九四九年　烏山生活協同組合婦人委員会副委員長。地域の人たちと烏山保育園設立。

一九五〇年　平野義太郎らが創立した中国研究所に招かれ、七年余、常勤所員として婦人運動、婦人問題を担当する。専門はもちろん中国婦人問題研究。

一九六一年　小児マヒから子どもを守る協議会会長として子どもの問題に取り組む。

一九六三年～七三年、三期十年、世田谷区議会議員。

一九七三年～八五年　三期十二年、東京都議会議員。

一九八五年　六四歳で政治の世界から退く。

おわりに

門田さんは昨年お会いしたとき八三歳、東京都内の区営シルバー専用マンションに一人住まいである。年齢を全く感じさせない、気さくで活動的な女性という感じであった。若いころから創作されている短歌の、八・十五

を語る歌人の集いの話、野の草花や押し花の話、第一回から初期のころの日本母親大会の話、（宮本）百合子さんが、（富本）一枝さんが、中国から来日した李徳全が（注30）…と、話は尽きず、現役を退かれたとはいえ、今なお多くの活動に参加されている様子であった。

そのときの話は何本ものテープとなり、たくさんの関連資料をいただき（掲載写真は門田さんから拝借）、私のたびたびの問い合わせにも、毎回ハガキ、封書で丁寧にきちんと答えてくださった。四、五年前から書かせてもらいたいと思ってきたのに、紹介できたのはその人生の三分の一にも満たない二〇代半ばまで、平和な時代であればこれから社会に飛び立つという年代に、戦争時代の〝すごい〟青春を駆け抜け生きてこられた門田さんの、一端を伝えることができたとすれば幸いである。知識として私の中にあった、「一九三七年七月七日、北京郊外盧溝橋事件勃発から日中戦争始まる」が、その二年後に北京に渡った門田さんの話を再現していく作業の中で、生々しい現実として感受することもできた。

はじめにで挙げた山崎朋子氏の本には「崇貞学園に学んだ中国・朝鮮・日本の三つの民族の女性たちの生き方を、以上、朝鮮人の朴善永と玄次俊、中国人の藩基、日本人の門田昌子という四人に見てきたが、押し並べて見て、安三・郁子の学校がどのような教育をしたかが窺（うかが）い知れる。…略…崇貞学園＝安三・郁子の教育実践は、キリスト教信仰を根幹に、人間平等・民族対等・反戦平和の精神を植えつけた―と言ってよいのではなかろうか。」と書かれている。気持ちは分かるが、清水安三の「崇貞学園」を評価・美化しすぎの傾向があるのではないだろうか（注31）。門田さんの選んだ生き方を見てきたが、私にはそのように断定することに、やや戸惑いを感じてしまう。確かに中国に彼女を呼んでくれたのは清水安三ではあったけれど、崇貞学園を飛び出てもっと学びたい、もっと勉強したいという門田さん自身の前向きな行動力をこそ強調したい。門田さんは崇貞学園で働いた倍以上の期間を、日中戦争のさなか、日本軍占領下の北京、日本憲兵隊が占拠している北京大学で、各地から来た中国人学生に混じって学び、そこから何が真実か、何が変なのか等々を考えて行動に移していったと思われる。

『少女の友』編集長内山基は、興亜院（前出）の招きで一九四〇（昭和十五）年北京に渡り、崇貞学園を訪問し

た時のことを「はじめて逢った清水さんの印象は、私が神崎君（注32）の話を通じて、又その仕事を通じて描いていたものとは少し違っていた。清水さんはその頃はもう北京の名士であった。且つては人の知らないところでひそかに善意の仕事をしていた人が、国と国との関係の中で一躍ヒーローになっていたのだ。…〝北京の聖者〟、これが日本のマスコミの清水さんに冠した肩書きであった。〝北京の聖者〟は地元北京でより東京でいっそう有名になった」（注33）と書いている。事実としても、ややきつい調子の表現であるが、以下の裏話に納得がいく。門田さんの一生を決めたともいえる一冊の本、『朝陽門外』は、実は、内山氏が勤める会社から部数三万冊で出版の手配万端整った段階で清水氏から断られ原稿を返却したと。理由は「崇貞学園のため」で、大手の朝日新聞社の手に渡り、大々的に宣伝されて初版十万冊で二ヵ月後、題名「日本と中国に掛ける橋」として出版されたという（注34）。

最後に、内山氏が三年後、再び北京に行った時に北京飯店で出会った北京大学生門田さんの印象を紹介して、このささやかな小文を閉じたい。内山氏はその四年前、神田駿河台のＹＷＣＡ講堂で開かれた『少女の友』の読者の集いで、北京行きを話した門田さんを思い出しながら「佐藤さんはあの時ほど必ずしも明るくはなかった。清水さんへの尊敬は変わらないけれど、彼女の描いたものとは少し違っていたようだ。そして彼女は近く、別の世界を求めて遠くへ行きたいようなことを言っていた。それが何処であるかは余り語りたがらなかった。後で聞いたのだが、その後佐藤さんはその言葉どおり崇貞学園を去って延安に行ったそうだ。……私はジャーナリストという自分の仕事の罪深さを強く感じたのである。……」（前掲の「北京の聖者」より）。

最後になりましたが、この拙い小文を纏めるに当たり、門田昌子さん、折井美耶子さん、坂野学先生、内田静枝さん、山田裕美さん、故礒部智恵さんはじめ多くの方々に、ご指導やご教示、ご協力をいただきました。ここに厚く感謝申し上げます。

（注1）『道南女性史研究　第十一号』の「女性が初めて参政権を行使した頃の函館」参照

（注2）　礒部智恵さんは、庁立函館高女を一九三八（昭和十三）年卒業。戦後桑沢デザイン研究所卒業。交通事故で入院し意識を回復されないまま、二〇〇二年秋に残念ながら他界された、八二歳。「礒部様は、多分私が北京に参ります年の夏、函館で少女の友の会を御一緒に企画した方と存じます。…お元気でいらっしゃったらどんなによかったでしょう」と、門田さんは私への便りで悔やまれた。

（注3）　『朝陽門外の虹』、二〇〇三年七月、岩波書店発行

（注4）　イギリス人聖公会宣教師ジョン・バチェラーとその夫人は、一八七七（明治十）年来道し、以来六〇年余、布教とアイヌ研究に情熱を傾けた。養女としたバチェラー・八重子をはじめアイヌの中に多数のキリスト教信者を育てた。アメリカの宣教師ピアソンとその夫人は一八八八年（明治二一年）に来日、四〇年間の本邦生活のうち三五年間は北海道を、南から北へ都会から農村へと伝道。小樽と札幌では本道初期の女子教育に貢献し、札幌農学校の学生も教えた。旭川では、軍人伝道・廃娼運動・監獄伝道・アイヌ伝道・学校教育の振興に尽し、一九二八（昭和三）年の春、十五年間住み慣れた北見からアメリカへ帰国。

（注5）　同年一月、アメリカからメソジスト教会牧師、M・C・ハリス夫妻が来函、夫人が始めた日々学校が遺愛の基礎となる。

（注6）　門田さんが一九四八年度の「都政新報」に寄稿したもの

（注7）　二〇〇四年、本の泉社発行、遠藤寛子著『「少女の友」とその時代－編集者の勇気　内山基－』より。

（注8）　このことは、東京の弥生美術館の学芸員内田静枝さんからご教示された。当時の『少女の友』は、現在各地の図書館でもほとんど所蔵されておらず、閲覧さえ困難な状態だが、内田さんからは掲載された聖銀鐘さんの記事コピーを送っていただいた。

（注9）　久慈京子さんは、（注2）の礒部さんと同期、庁立函館高女一九三八年の卒業生。東京に健在で、問い合わせに「嘉悦孝子校長の女子高等商業学校に進み、華道家元として今も青山に教室を持っています」と。ただし、函館で開かれた友ちゃん会に関しては、友待草というペンネームに関しても、記憶にない様子であった。

（注10）　北京朝陽門外の貧民街の子どもたちを救済しようと、清水安三・美穂（前夫人）夫妻が一九二〇（大正九）年

に建てた半工半読の学校から出発。一九三三（昭和八）年に崇貞小学校として北平市（北京市）政府に登録、三六年崇貞女子中学校設立、三八年男女共学の小学校として崇貞学園と改名。三九年崇貞日本女子中学校設立。四三年崇貞高等女学校設立。

（注11）　昨二〇〇四年十一月、遺愛学院は「創基百三十周年記念式典」を行った。出席した同窓生の一人、石館とみ氏は門田さんの五年先輩で、一九三四年に遺愛を卒業後、青山学院に進学し「小泉郁子先生に英文学を習いました」と話してくれた。青山学院女子専門部教授小泉郁子は、一九三六年四一歳のとき清水安三と結婚、北京に移る。

（注12）　朝陽門外芳草地に所在した崇貞学園が毎月一回発行した新聞で、この貴重な新聞コピーを、私は「戦前、遺愛から北京の崇貞学園に行った女性のことを調べている」と話したお陰で、三年前に堺市在住の女性史研究者で山岡家文書刊行・保存会の山田裕美さんから送っていただく。

（注13）　昭和六二年八月発行の『桜美林学園創立四〇周年記念誌史料集　第三号』より。

（注14）　富坂キリスト教センター編『女性キリスト者と戦争』二〇〇二年、行路社、所収の出岡学「大陸政策の中の北京愛隣館」参照。

（注15）　岩波書店、一九九一年発行。北京で刊行された北京市政協文史資料研究委員会編『日偽統治下的北平』の翻訳。これによると、蒋介石の指揮する北伐が完成した一九二八年に北京は北平と改称され、傀儡臨時政府が北京に再度改称すると決定した後も、中国政府と人民は承知しないで相変わらず北平と称したという。そして、一九四九年に中華人民共和国が成立して北平を北京と改称した。

（注16）　一九三九年一月から医療活動を開始した医療セツルメント。事業母胎は日本キリスト教連盟時局奉仕部婦人委員会で、委員長は久布白落美、現地顧問には清水安三・郁子夫妻が就任していた。（注14）の出岡論文参照。

（注17）　「八月十五日その時私は」―記録「八・十五を語る歌人の集い」―（一九九一～九五、生活ジャーナル発行）所収の門田昌子「北京大学の青春」より。

（注18）　岩波書店、二〇〇四年発行、木山英雄著『周作人「対日協力」の顛末』は「目ぼしい知識人が次々と姿を消し

ていった北京に、名実ともに第一級の文人であり、かつ国立北京大学文学院教授の肩書をも帯びた身で、最後まで居残り、居残ったばかりか、抗日地区へ避難した大学の抜け殻の上に「再開」された「偽」北京大学の文学院長から、更に協力政権の文部大臣に相当する閣僚職に就きさえしたのが、周作人であった。その名前は、今の日本では、高名な魯迅の実弟ということでかろうじて一部に知られるにすぎぬが、彼のこの事件は、中国文化界の由々しい痛手として、戦中戦後にわたり、深刻な物議の的になった。それというのも、この人が中国近代精神発育史上の綺羅星の一つであり、かっては、文壇の声望を魯迅と二分するにも足りたほどの存在だったからである」と書いている。魯迅は一九三六年、五五歳で逝去するが、上海内山書店の内山完造と親交があった。

（注19）　ドイツのベーベル著『婦人論』（一八七九年刊）は、マルクス主義女性解放思想のバイブルといわれているが、最初の日本語完訳は一九二三年山川菊栄が、最初の中国語完訳は一九二七年沈端先（夏衍）が行い、それぞれ独語→米語→日本語、独語→日本語→中国語という重訳であるということを『中国女性史研究　第八号』（一九九九年）で教えられた。

（注20）　日中戦争時、重慶は国民党の臨時首都、延安は毛沢東率いる中国共産党の根拠地であった。

（注21）　東洋文庫『異域録』によると、今西春秋は北京大学の教員だったとき、清朝使節の一員トウリシェンが書いた旅行記、満文の『異域録』に出会い、終戦の頃を境にその前後三、四年をかけて翻訳、北京で刊行するつもりだったが恩師銭稲孫に続いて一九五一年北京法廷にとらわれて一九五四年保釈、身一つで帰国する。原稿類は、北京大学教授陳信徳の下に保管され、後日の返還を約束された。一九五五年郭沫若学術団一行の来日の際に事情を訴え、翌年返還されて、天理大学おやさと研究所満蒙研究室時代の一九六四年に、やっと異域録の研究書『校注異域録』を発行。一九七九年没。その現代語訳が今西春秋訳注・羽田明編訳で一九八五年東洋文庫『異域録』として出版されている。

（注22）　興亜院は、戦時日本の中国占領地における政策決定、経済開発、思想文化統制などを企画・執行する中央機関として一九三八（昭和十三）年、近衛文麿内閣のもとで

設置された国家機関である。昭和十七年大東亜省の設置に伴って廃止、わずか四年足らずで消滅しているが、その間、情報・資料を収集して執務の参考とするため興亜院調査月報を配布している。

（注23）　一八九九年北京生まれの小説家・劇作家。日中戦争期北京を離れ、一九三八年中華全国文芸界抗敵協会の総務主任として抗戦文芸発行に献身。文化大革命の嵐の中で世を去る。代表作に『駱駝祥子』、『四世同堂』などあり。

（注24）　東亜同文書院大学といい、十九世紀末中国を訪れた近衛篤麿貴族院議長の、アジア連帯の立場の学校設立の提案を、劉坤一両江総督が承認して上海の租界外に設立。その後半世紀、五千人の学生が学んだが、一九三七年の上海事変の戦火で校舎は消失。翌年からは中国の上海交通大学を借りて仮校舎とするが、敗戦により中国からの撤退を余儀なくされ廃校となった。

（注25）　昭和五四年　講談社発行、七五ページ。

（注26）　当時延安にいた野坂参三（岡野進はペンネーム）が中国共産党第七回大会で、一九四五年四月、日本の共産主義者の政策として発表したもの。一九四六年一月二五日、東京で野坂参三帰国歓迎会が開催された。

（注27）　中国の女性作家、夫が国民党に殺された後一九三六年逃れて延安にたどり着き、抗日宣伝活動に従事、作品『霞村にいた時』『医院にて』などの小説で、解放区の矛盾を背景に女性の自立を追及した。

（注28）　中国国内における国民党政権と中国共産党解放地区との戦いは一九四六年六月～八月にかけ全面内戦となる。

（注29）　（注17）の資料、及び私の聞き取り

（注30）　第一回日本母親大会は一九五五年六月開催。前年三月の第五福竜丸ビキニ事件で三たび原水爆被害を受けた日本女性の実情を世界の人々に訴えたいと、当時国際民主婦人連盟副会長であった平塚らいてうの呼びかけで世界母親大会が五五年七月スイスで開催決定。これを受けて全国から二千人が東京に集まった。

宮本（旧姓中條）百合子は小説家。一九三一年日本共産党に入党、宮本顕治と結婚。三三年検挙後、夫は敗戦まで獄中に、百合子も投獄や執筆禁止を受けたが非転向を貫く。戦後は民主主義文学の創造を目指し〝歌声よ起これ〟と呼びかけ、日本共産党の再建、新日本文学会

や婦人民主クラブの創立に尽力した。『伸子』、『播州平野』など作品多数。

富本一枝は〝尾竹紅吉〟の名で『青鞜』の表紙や詩文に才能を発揮したが、吉原見学が原因で退社、『番紅花』を主宰、陶芸家富本憲吉と結婚する。高井陽・折井美耶子著『薊の花』に詳しい。

李徳全（一八九六～一九七二）は日中戦争下の一九三八年、武漢に成立した「中国戦時児童保育会」の中心メンバーとして孤児救済のために奔走。新中国成立後の一九五四年、中国赤十字会（赤十字）代表として、中国からの邦人引き揚げ支援に対するお礼という形で招聘来日する。

（注31）　清水安三の崇貞学園をどのように評価するかは別の問題であり、ここはその場所でもないが、『歴史学研究』№785（二〇〇四年二月号）に、一色哲氏の『女性キリスト者と戦争』書評が載っている。その中で、加納美紀代論文は、「国際的視野をもつ『フェミニスト』・小泉郁子が夫・清水安三とともに経営していた北京崇貞学園を日本の軍事力を背景にした「日支親善」機関であったとして、彼女の限界を論じている。同学園については山崎朋子氏による『朝陽門外の虹―崇貞女学校の人びと』があるが、その手放しの評価とは対照的に、加納論文は小泉たちの事業の問題性を明らかにしているといえる。」と記している。ご自身の論文も収録されているこの本の書評について早川紀代さんからも教示された。

（注32）　評論家。日中戦争開始前後北京に渡り、訪れた清水安三夫妻の崇貞学園のことを最初に内山氏に伝えた人である。一九四二年、三学書房から出た『現代日本婦人伝』に、神崎清取材・記録の「清水郁子」が収録されている。

（注33）　内山基一周忌記念号、昭和五一年十二月、ファッション誌『モード・エ・モード』新春号の中の「北京の聖者」と題した編集者の想い出から。門田さんによると、戦後中国から帰国し、中国女性問題研究者として活動していた彼女のことを、姓が変わっていたこともあって内山氏は知らず、亡くなるまで彼女のことを気遣っていたと内山氏の娘さんからあとで伺いましたと。

（注34）　（注33）の一周忌記念号、及び本書120ページの酒井のあとがき参照。

戦争の時代を生きて

― 青島（チンタオ）、長岡、函館の記憶 ― 豊田文子さん

四ッ柳　敦子

はじめに

豊田文子さんは、新潟県長岡の生まれ。子どものころ家族とともに中国の青島に暮らし、女学校のとき戦火の足音のきざした青島をあとに、一人長岡に戻った。結婚後は夫の応召、それに長岡空襲を体験された。

戦後まもなく移住した函館で保育園を開設し、その後も幼稚園を開設するなど、一貫して子どもたちの保育に力を尽くしてこられた。豊田さんに青島、長岡、函館での体験を通じて戦争とその後の生き方や思いを伺った。

青島（注1）での記憶

私は大正三年、浄土真宗の寺で父親が工業高校の、母親が小学校の教師で五人の子どもの三男二女の長女として生まれました。小学校六年のとき、父が中国、青島の日本人女学校に勤務することになり、父母、弟妹の一家七人で移住しました。

青島は、第一次大戦時にドイツの支配下にあった地で、赤屋根、白壁の洋館が立ち並ぶきれいな街でした。街にはドイツ人やロシア人もいましたが、それぞれ居留区があり別れて暮らしていました。私たち一家は日本人街に住んでいました。そのころ目撃して忘れられない記憶が

あります。

当時、港町である青島には、街を警備する日本兵たちがいました。ある日学校の友だちと買い物に行ったときのこと、露天商が立ち並ぶ店からでると、日本兵が二、三人ずつたむろしていて、中の一人が売り物のスイカを取ってそのまま行こうとしました。店主の中国人が「金を払ってくれ」と言うと「ここにある物は皆日本のものだ」といい「こうするぞ」と言って短刀を抜いてそこにあったスイカを手当たり次第切りつけたのです。

女学生だった私にとって、日本の兵隊は神様のような存在でしたから、日本兵がこんなことをするのかとショックでした。

またこんなこともありました。女学校の帰りみち、やはり友達といっしょだったとき、トラックの無蓋車に荒縄で手足を縛られた中国人たちが大勢乗せられ、大声で泣き叫んでいるのを、日本兵が剣を持って見張っていました。泣いて命乞いをしているのだと、かわいそうに思って見送りました。泥棒でもしたのかと思って人にきくと、スパイ容疑とのことでした。そんなトラックが列をなしていました。あの人たちは、はたして本当にスパイだったのか、また、ちゃんと裁判を受けられるのかしら、と友人と話しました。

住んでいた日本人居留区では、中国人を悪く言う人はいなかったと思います。それだけでなく、日本兵があまりにひどい仕打ちをするので、自分たちの手柄のためにするのではないかと、批判する人もいたくらいです。

町外れの岸壁に「首切り場」がありました。罪人は首切り台に座らせられ、日本兵が剣で突いて殺すと言うことでした。住民が見物にいきましたが、兵隊が見物人を追い払ったので最後の場面は見ることはありませんでした。私も見に行ったことがありますが、何か異様な感じを持ちました。ここでも、日本兵は神様と思っていたのに、こんなこともするのか、と思いました。私にとって青島での忘れられない記憶です。

それからまもなく治安悪化を理由に学校の規則で外出禁止になったのでこのような光景も目にすることはありませんでした。

再び長岡へ

女学校四年のとき、祖父が亡くなって寺を継ぐものがなかったので、長女だった私が青島から長岡の祖母のもとにもどり、長岡女学校に編入しました。

寺のまわりは、見渡す限りの田圃で、地主に畑を借りて小作が米を作ったんです。米が採れても地主にとられて、あのころの小作はあわれでした。

女学校には入る人は少なかったと思います。昭和九年、女学校を卒業後、僧侶の資格を取るため京都の西本願寺に講習を受けにいきました。半年ほどだったと思います。男は兵隊にとられていたので、葬式や法事など女性の僧侶がこなしたのです。うちの寺の檀家は一〇〇軒ていどでした。

結婚は昭和十二年のこと。私が二三歳、夫正雄は三〇歳のときです。夫は小さな寺の生まれで十二人兄弟の末っ子で長男ではなかったので、寺を継いでもらうためでしたが、お互いどこか気に入ったところがあったのでしょうね、意気投合するところがありました。両親は時局柄帰国できなかったので、結婚式は檀家の人達が協力してくれました。

昭和十六年に長男が生まれ、続いて長女も生まれましたが、その後、夫は召集されて終戦後の昭和二一年まで帰ってきませんでした。その間、はがき一枚来なかったので、二一年の六月になってひょっこり帰ってくるまで生死も分からない状態だったのです。

その間私が寺を守ることになったのですが、あの空襲で大変な目に会うことになりました。

長岡空襲（注2）

長岡は海軍山本五十六元帥の出身地です。空襲の前のことですが、ある日空からビラが落ちて来ました。アメリカの飛行機からでした。日本語で「山本は戦死したが、その仕返しにかならず長岡をつぶす。国民に恨みは無い。大急ぎで疎開しなさい。長岡攻撃は近づいている」という内容のものでした。当時の新聞は、「あれはデマだ。デマに惑わされるな」と報道したので、大方の市民は日本の新聞を信じていたと思います。ところがビラはデマではなかったのです。後になって、真珠湾攻撃の仕返し

ではないかと人々は言いあったものです。

八月一日夜のこと、夏の暑い盛りなので子ども二人と祖母と、蚊帳を吊って寝入ったばかりのころ、突然ラジオがガーガーと鳴りだしました。飛行機が来ている、空襲だね、と祖母と言い合いました。ラジオの報道は「敵機は柏崎まで来て攻撃している。すぐに長岡まで来るだろう」という内容でした。

急いで子どもたちを起こして防空頭巾を被り、祖母が上の子の手を引き、私が下の子をおぶって庭に出ました。そのとたん、空から焼夷弾が降ってきたのです。あとでみるとそのあとが三〇ほども残っていました。

道へでてみると街の中心部に爆撃があったのか、大きな音がして、市中が火の海になっていました。信濃川の方では、親が子を、子が親を呼ぶ声がこだましていました。

防空壕へは入らず、そこの木の下、あそこの木の下へと避難しましたが、見ている前で竹やぶが焼けました。子どもと祖母にケガをさせないようにとそれだけ思って逃げました。最初は松の林へ、次にツバキの林へと逃げました。逃げ惑ううち、女こどもと年よりと、どこへ逃げても死ぬときは死ぬ、と思って腹をくくりました。それで林のなかでじっとしていました。二時間近くもたったかと思いましたが、実際は十分くらいの間だったのでしょうね。

爆撃で身体に火がついて信濃川へ逃げた人は、川の流れに流されて死んだ人が多かったそうです。覚悟を決めてツバキの林に逃げて、命だけは助かりました。しかし、寺は土台しか残らずに焼けてしまったのです。

翌日、長岡市内は一面の焼け野原でした。檀家の人達はどうしたかと町中を歩いてみました。黒焦げの死体があちこちにころがっていてそれを跨ぐようにして歩きました。髪の毛も焼けこげ、男女の区別もわかりませんでした。公園では石灯籠に抱き着いたまま真っ黒になって死んだ人の焼死体も見ました。ふと見ると、うつ伏せになった大人の死体の下に赤ちゃんの死体がありました。母親が子どもをかばって覆いかぶさるようにして二人とも焼死したのです。それを見たとき初めて涙がでました。

あれだけたくさんの死体を見た後は恐ろしくて何日も眠れませんでした。今でも目に浮かんで来ます。

寺を焼かれ年寄りと子どもを抱えてこれからどうやっ

て生活しようと途方にくれましたが、焼け残った公会堂を檀家の人が借りてくれて、しばらくそこですごしました。そのうち田舎で農家をしている父方の伯父が寺の焼け跡に藁葺きの小屋を建ててくれました。畳がないので藁を敷いてその上にムシロを敷きました。

終戦の玉音放送は借り住まいの公民館で村の人といっしょに聞きました。ラジオの音がよく聞こえなくて何を言っているかはわかりませんでした。日本はいつかは勝つのだと思ってはいましたが、戦争が終わったと聞いたとき、内心ほっとしてああよかったと思いました。村の男衆に「今に米兵が剣をさげてやってくるぞ。女は乱暴されるかもしれない、髪の毛を切って男装しろ。」といわれ恐ろしかったのですが、政府が守ってくれるはず、そんなにおろおろしてもしかたがない、と思いました。そんなことはありえないと思っていましたが、後で聞くと、佐世保や沖縄などはそんなこともあったようですね。結局長岡には米兵は来ませんでした。

出征兵士の妻

戦争中のことで、今でも心に残り、誰かに聞いてもらいたいと思っていることがあります。

終戦間際のこと。田中さんという、夫婦と幼い子ども三人の農家の夫に召集令状がきたのです。いつも赤ちゃんをおいて夫婦で農業をしているのに子どもと妻だけで田圃をつくらなければならなくなって、どうしていくのでしょう。兵隊に行く人も辛いし残された家族も辛い。私は国防婦人会の役員をしていたので田中さんの出征のとき、村の鎮守様にみんなで集まったのですがたまたま会長がいなかったので私に万歳の音頭をとるようにいわれたのです。私はそのとき、妻子をおいて出て行く夫の気持ちを考えると、何でこれが万歳かと思いました。それで、「頼まれても万歳だけはできません。勘弁してください。口では言えないから皆さんで考えて下さい。」と言いました。妻子を残して戦死しなければならないのに、と言ったら共産党だと思われます。それは言えませんでした。出征する兵の妻は涙を見せてはいけなかったのです。皆けなげなものでしたよ。何が万歳なものか、と

思っても天皇陛下の御ため、といわれれば、二の句はつげませんものね。

ずっと後までこの一家のことが気になって、長岡の寺を継いだ息子に消息を聞いたことがありましたが、子どもたちも大きくなって元気にやっているとのことでほっとしました。

函館へ

終戦後、昭和二二年になって、両親と弟妹が青島から引き揚げて来ました。弟は青島の中学から早稲田大学に入り、学徒動員されましたが無事でした。末の弟は特攻隊にあこがれ習志野の基地に入隊したのですが終戦間際に乗る飛行機がなくなって訓練だけで終わったそうです。

夫は、二一年の六月に復員していましたが、狭い仮住まいに大勢ですし、「ここにいても仕方がない、北海道へいけばなんとかなる。クワ一つもって行こう」と言いました。

始めは帯広に開拓農家として行くつもりで夫が一人で先に出発し落ち着いたら私たち家族も、と言う段取りでしたが、帯広に行く途中で、縁があり函館の西本願寺の寺を手伝ってくれということになりました。それで私も函館に行くことになりました。

出発にあたって長男は寺を継がせるために祖母のもとに残しました。幼い長女と、二二年に生まれた赤ん坊の次男の二人を連れての旅です。

幼子を連れて満員ですしづめ状態の列車に乗ったのですが、長岡で乗り込むときには窓から子どもを乗せてそこにいた人に「お願いします、お願いします」と言って預かってもらい、私は後から列車に乗りました。車内は身動きできないほど混んでいて、トイレに行きたいと言ったら、そこでしろと言われました。男の人で列車の屋根にまで乗っている人もいました。青森駅に降りたとき、乗客は皆、進駐軍の兵士に消毒の白い粉をかけられ、手の甲に判を押されました。

これは是非話しておきたいことなのですが、青森駅でのできごとです。青森に着いて函館行きの連絡船が出るのを待っていた時、祖母がなけなしの配給米で作ってくれたおにぎりを食べようとして袋を広げると、横から真っ黒い棒のような手がにゅーとでました。長い間洗っ

ていない子どもの手で、みると小学二、三年生くらいの男の子でした。戦災孤児だったのでしょう。駅のまわりに大勢いました。少しわけてやるとまた別の子がやってきて、そうしているうち自分の食べる分がなくなってしまいました。向こうの方に大きい子がいて親分だったのか、その子が合図すると皆お辞儀をしてどこかへ散って行きました。

いまはもう戦災孤児のことなど覚えている人も少ないでしょうね。でも、この青森での戦災孤児たちとの出会いがそののち私が保育園をはじめるきっかけになったのです。

保育園を作る

函館では千代ヶ岱に落ち着きましたが、慣れない土地で近所の人達の親切にたすけられました。近所の人が「奥さん、今日は魚が安いから買いにいくべ」とさそってくれるんです。私は平野の真ん中で育ったので魚などあまり調理したことがなかったのですが、イカなども、ちゃんと食べられるように開いてくれて、調理方法も教えてくれました。函館の人の親切に救われる思いでした。

函館に来てから子どもに次々めぐまれ、函館で三人生まれました。

それにつけても忘れられないのが青森での戦災孤児たちのことでした。何とかしてあのような子どもの面倒を見たいと思い、思い立ったのが保育園でした。昭和二三年に児童福祉法(注3)ができたことも気持ちを後押ししました。

そこで渡島支庁に出かけて行き、保育園を作りたいといったんです。今思うと、子ども

昭和25年　五稜郭町の子どもたち

をおんぶした、こんなみすぼらしい姿のお母ちゃんを、係の人は追い返したりもせず、まともに取りあってよく話をきいてくれたと思います。当時の課長だったその人は、保育園を作りたいという私の話を喜んでくれて、今ここで約束はできないが、もう少ししたら国から補助金が出るからと教えてくれました。土地はあるのかと聞かれたので、借りるつもりだと答えました。当時の亀田村にキングベークが所有していた土地があり、社長さんが四〇〇坪の土地を貸してくれました。社会福祉のために使うのだから補助金がでるまで地代はいいからと言ってくれて、五年間、ただで貸りられたのです。

昭和二五年、五稜郭保育園はこうして開設することになりました。何しろ資金がないので土台と柱は大工さんに頼みましたが、後は夫が力を貸してくれました。床張り、窓枠など、毎日こつこつ作ってくれてまさに手作りの建物でした。

札幌の講習会に出て保母の資格試験を受け、一度で取得できました。函館からの合格は二人だけでした。やはり子どもを育てながら必死の思いでしたから意気込みが違ったのかもしれませんね。とても嬉しかったのを覚え

昭和25年　設立当時の五稜郭保育園

ています。

念願の保育園はこうして創立なったのですが肝心の子どもがなかなか集まりません。当時は保育という考え方がまだまだ定着せず親の理解もなかったのです。そこで子どもの募集に一軒一軒訪問してまわることにしました。一緒に働く保母の先生が、園長先生一人では大変でしょうから、といってついてきてくれました。農家がほとんどだったので農作業が終わる夜にでかけました。

そのころの農家のお母さんたちはよく働いたんです。朝早く、馬車に乗せられて漁場に「イカさき」の出面取りに行き、帰ってから農作業をするんです。今なら考えられないほどよく働いたものです。

親が働く間、小さい子どもを一人で放っておいて良いはずはない、ぜひ保育園に入れて、と説いてまわったのですが、当時はまだ保育園のことがよく理解されていなかったので大変でした。

「何いってんのさ、うちの子は、七つにもなれば親の留守にもちゃんとストーブたいて、おつゆ温めてとうさん、かあさんの帰りまってるんだ」と言われたりもしました。小さいうちから家の仕事を手伝うのが当たり前で、保育園は子どもを働かせなくていい金持ちのいくところだ、と思われていたようです。

それでも熱心に訪問したのが功を奏したのか子どもは少しずつ増えていきました。

五年後の昭和三〇年にやっと補助金がでました。ただ、出るには出たのですが、それではとても足りません。三月までの石炭代を十二月で使い切ってしまうほどでした。

当時先生は私を入れて三人でした。私自身の給料はもらったことはありませんが、先生方にも給料は遅配が続きました。あのころの先生たち、本当によく協力してくれたと感謝の気持ちでいっぱいです。

それに村の人達にも助けられました。石炭代の補助をもらうため保育園の父母が、仕事を休んで村議会の傍聴に一緒にいってくれたのです。「園長先生、先頭にならねば、おらだち、入って行かれない」と言われ、引っ込みじあんの私も先頭に立って行きました。

夫は最初、保育園を始めたいと相談したとき、やれるならやってみればいい、とだけ言いましたが、実際はじめてみて、いろいろ協力してくれました。私が忙しいので子どもたちのおむつも替えてくれましたし、園のため

昭和30年４月　後列右はじ正雄さん、後列右から４人目文子さん

にも、製材会社からリヤカーいっぱいおが屑をもらってきて冬の燃料にしたり、また、五稜郭保育園の建物に垣根を作って豆をうえたり、園庭でアヒルやにわとりを飼ってくれたりして、その豆や卵が給食の食材になりました。

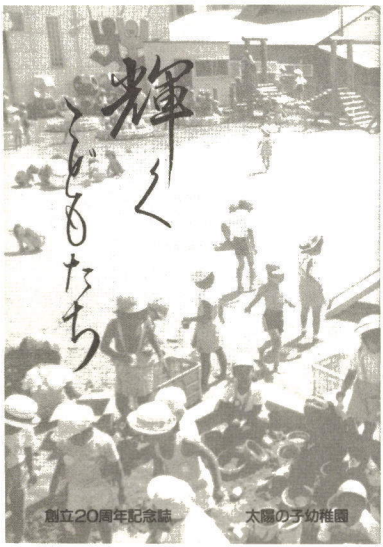
食材といえばユニセフ（注４）にも脱脂粉乳を援助してもらいました。脱脂粉乳はおいしくはなかったので、子どもたちから「先生、また脱脂粉乳なの」といわれましたが、それでも何一つない者にとってはありがたかったのです。今、そのときのささやかな恩返しと思って会費を払ってユニセフの会員になっています。

お金が無いので、さまざま工夫しましたね。紙芝居も子どもたちに見せたかったのですが買うお金が無かったので、先生と二人でお話をつくり、絵をかいて紙芝居を作りました。子どもたちは何度でも同じ話を聞きたがりました。

その後国の政策で補助もでるようになりましたし、子どもの数自体もふえてゆき、園の運営も楽になってきました。地域に子どもの数が増えたこともあって園児募集の際に寒い中希望者が列をなして並ぶようになりました。

保育園も一杯になって先生方の負担も増えたことと、父母からの要請もあり、幼稚園を作ることになりました。当時、親御さんには保育園も幼稚園も区別がなく、とにかく子どもを預ける所が足りなかったのです。まるで保育園の延長のような幼稚園でした。夫が奔走してくれて昭和四一年、三五〇坪の土地をやっと借りて「太陽の子幼稚園」が開設されました。この頃亀田村から亀田町になっていました。函館市には幼稚園がたくさんありましたが亀田町にはそのころまだ幼稚園がなかったのです。

その後も「なかよし保育園」、「風の子保育園」、「第二太陽の子幼稚園」と運営する園は増えて行きましたが、



太陽の子幼稚園「創立20周年記念誌」
題字　文子さん揮筆

私にとっては五稜郭保育園が原点だと思っています。

それまで、大変な時期があって「何でこんな因果なことをはじめたのだろう」と思ったこともありましたよ。今までやってきて、ああすればよかった、こうすればよかった、と後悔することもあります。

でも、私にはこれしかできることがないから続けるしかない、と思って今までできました。夫ともよく口喧嘩しましたが、それだけ保育園のことを思って一生懸命やってくれたからだ、と今にして思います。

夫が亡くなった後も仕事を続けて、少し前まで運営する園全体の理事長をしていましたが、高齢になった今は引退して子どもたちが跡を継いでくれています。

おわりに

豊田さんは、六八歳のとき、社会福祉事業功労者として道内でただ一人厚生大臣賞を受賞した。三一年間の児童福祉一筋の半生が報われたできごとだった。

豊田さんが繰り返しこれだけは話しておきたい、と言われたことが二つあった。それは戦争中の出征していく

農家の夫と残された妻と幼い子どもたちのこと、それと青森での戦災孤児たちのことだった。

万歳三唱に送られる出征兵士の、泣くに泣けない妻の気持ち。若い妻子を残して出征して行く人に万歳とはとても言えなかった、という豊田さん。それは同じように夫を戦地に送った自分自身の体験と重なり、より強く印象に残ったできごとだったろう。

また戦災孤児のように大人に見守られることの無い子どもたちを、なんとかして守ってやりたいという思い、それは自身も子の親として、切実に願うことだった。そうしてその思いは後の保育園開設につながっていった。

「戦争は二度と嫌ですね。国と国とが話し合って戦争をしないで済む方法を考えてほしいです」と言う豊田さんの心の中には、この二つの体験がずっと消えずに焼き付いている。それが、戦後、縁もゆかりもなかったこの函館の地で、自身も幼子をかかえながら保育園を創設し長年にわたって子どもたちの幸せを願い保育にたずさわってきたその原動力になっていたのだと理解できる気がする。

（注1）　青島（チンタオ）

中国山東半島の西南端に位置し総面積一〇六五四平方キロ。一八九七年、ドイツが派兵し、租界地とする。一九一四年第一次大戦時、日本が占領、ドイツに代わって植民地統治を行う。一九二二年中国が青島を回収し開放都市とする。一九三八年日中戦争で再び日本が占領。一九四五年国民党政府に回収、特別区に指定される。一九四九年中華人民共和国成立直前に開放される。

（注2）　長岡空襲

昭和二〇年八月一日午後十時三〇分ころから翌二日の午前〇時十分までのおよそ一時間四〇分間、米軍爆撃機B29の襲撃によって市街地の八〇％が焼け野原と化した。市民の犠牲は学童三〇〇人を含む一四七〇名余り。罹災戸数一一九八六を数えた。昭和二〇年当時の長岡市の人口は七四五〇〇人余。爆撃機数一二五機投下爆撃量九二五トン。「長岡戦災資料館」より

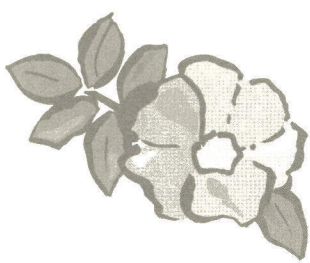
（注3）　児童福祉法

一九四七年公布。憲法が規定した基本的人権の考え方に基づいて制定された。児童が心身共に健やかに育

成されるよう努める国民の責務と、それを具現する国、地方公共団体の責任とが明確にされている。この法律により、保育所は児童福祉施設として公的に位置付けられた。

（注4）　ユニセフ（国際連合児童基金）

一九四六年、第一回国連総会で設立。当初、戦争で荒廃した欧州の児童に対する緊急援助を目的とした。一九五〇年に入り、開発途上国、被災地への援助機関に変革される。一九六五年、ノーベル平和賞受賞。日本も戦後の一時期（昭和二二年～三七年）ユニセフの被援助国となり二〇七万ドル相当の、脱脂粉乳、毛布、医療器具等　肢体不自由児施設への援助を受けた。



韓国人の誇りを胸に
―曺（チョ）末順（マルスン）さん―

大場　小夜子

昭和五五年、函館の繁華街、本町に焼肉店『寿松苑』がオープンした。寿松苑は当時焼肉店が少なかった函館では、本格的な焼肉料理店だったので、お客さんが入りきれないほど繁盛したという。店の経営者の曺末順（チョ・マルスン）さんが函館に来たのは四九歳の時。函館は初めての土地だったが、新しい商売をする新天地としてやってきた。マルスンさんは店で三年前まで働いていたが、今は引退し、息子の金正勇（キム・ジョンヨン）さん夫婦があとを継いでいる。そのチョ・マルスンさんに、半生を伺った。

日本に来たのは四歳の時

私が日本に来たのは四歳のときで、昭和九年、戦争前のことです。父が専売公社に勤めていて、その関係で一家で韓国から神戸に移ってきました。

生まれは韓国の清道です。父と兄、姉は先に日本に来ていて、私は母と二人の弟と後からきました。当時、日本には渡航証明がないと来れなかったんです。当時は渡航証明をとるのも大変だったようです。

第一次大戦後の経済恐慌下で、日本は不況を極め多くの失業者が出た。この状況で朝鮮から労働者が来ると失

業者が増大するということで一九二四年に今までの自由渡航制を廃止し、許可制になった。

（『在日、激動の百年』　金賛汀著より）

一番初めは神戸にいて、次に大阪、そして疎開のために石川県の山中温泉に移りました。私が小学校に上がる前のことです。よその家では子どもだけ疎開しましたが、私たち家族は、知り合いの朝鮮人の紹介で山中温泉に家を買って、家族で疎開しました。山中温泉には、大阪やほかの所からも人が移って来ていました。

姉は神戸に嫁に行っていましたが、終戦一年前に韓国に戻っていました。というのは、神戸に爆弾が落とされ、子供二人をそれで亡くして、「日本にいたら死んでしまう」と姉の姑が言って、韓国に引き揚げたんです。日本に残ったのは、両親と私と二人の兄、弟でした。

数年の後、私は小学校（のち山中国民学校と改称）に入学、入学したその日のことです。クラスで先生が生徒の出席をとりました。全員出席をとっても私だけ名前をよばれなかったんです。私が「名前をよばれていません」と先生に言いました。先生が「お前の名前は、日本人と違う。日本の名前があるはずだ」と言ったのです。その日は、結局最後まで名前をよばれませんでした。家に帰って母に先生にいわれたことを話しました。母は私をひざに座らせて「名字と言うのは先祖がくれるもの。名前は親が一生懸命考えてつけてくれるもの。その名前が名乗れないなら学校に行かなくていい」といったんです。明くる日学校であったことは、今でもわすれません。藤沢先生という方だったんですが、その先生が「なるほど」と言って、そのまま「チョ・マルスン」で通しました。その後小学校の六年間チョ・マルスンで通しました。

あの頃、学校に朝鮮人は十二、三人通っていましたが、本名で通したのは私だけです。学校から家に帰ってきた時、母は「ただ今」というと無視するんです。「ハッキョ、タニョワッスムニダ（学校から帰ってきました。ただいま。）」と韓国語で言えば応えてくれたんです。外では日本語、一歩家に入れば韓国語を話しました。韓国語、日本語のどちらも話せるのは、母のおかげと思います。

母は、ずっと朝鮮の服で通しました。ある時、道で憲兵隊から服に墨汁を振り掛けられてたことがありました。朝鮮の服を着るなということでした。しかし母は、「朝

鮮人が朝鮮の服を着てなぜ悪い」と言って、色を染め直してまた着るんです。そうして最後まで通した人でした。今考えれば母は偉大な人だと思います。

朝鮮の文字は父に教わったり、終戦後、民族学校の塾ができて、ここでもハングルを習いましたから、字も書けるようになりました。

私は運がいいのか悪いのか、山中温泉では空襲が無かったですから。国民学校六年の時は挺身隊にかりだされて、飛行機のねじを作る工場に行かされました。その頃は土曜日だけ学校に行ってちょっと勉強して、後は工場に行って働かされほとんど勉強をしませんでした。工場は町の中にあるので、仕事が終わると家に帰るという生活でした。給料はもらいませんでした。そして土曜日は学校に行って、学校の固い土の運動場を開墾してじゃがいもを植えたり、カボチャを植えたり、堆肥をもってきて入れたり、子供達が皆でしたんですよ。

夏休みになると、軍馬に食べさせる秣(まぐさ)を、まだ小さいうちに刈り取るために行きました。当時、近所の子供全員がそれをしに行ったので、近所中が全部草だらけでしたよ。刈り取った草を干さなければいけないから、家に持ってきて干して、納めるのは何貫目って決まっているので、それを納めるために一生懸命刈り取って干しました。ちゃんと納めないと怒られるので、親が手伝ってくれたんですよ。草刈り作業のため手が傷だらけになりましたね。それが運動場に山のように並んでね。それを憲兵がトラックで持って行きました。

次はイナゴです。学校からイナゴを採りに行かされるんですよ。とっているうちに要領良くなって、取り方を工夫して、竹の筒に袋をくくりつけて、田んぼで入れるんですよ。そうすると竹の筒から下の袋にイナゴが落ちるというわけです。その袋の紐を結んで、熱い湯に入れてゆでて、干して、イナゴの足と羽根をとりました。夜は空襲警戒のために電気をつけられないですから、電灯に布をかぶせているので、電灯のすぐ下しか見えなくて、そこで羽根と足をとって学校に持ってゆきました。

食料はすべて配給でしたから、「かたやまず」というところまで行って、海の水を汲んできて、家の樽に入れて、醤油の素を入れて、醤油らしきものを作りました。少しも美味しくなかったですけど。あの時のことを考えたらどんなことでも辛抱できると思います。戦争が終わった

時、私は十四歳でした。一番苦しい時が育ち盛りでした。

解放そして引揚げ

終戦の時、朝鮮に引揚げるつもりで、家の物を全部売り払ってお金を作りました。お金は決められた金額以上持っていてみつかると没収されるので、バケツなどに二重底にして隠したり、子どもに朝鮮の服を着せて、その綿入れにお金を隠したりしました。そのように支度をして、引揚げの船に乗るつもりで山中から山口県下関に家族で行ったんです。そこには、引揚げのために日本全国から大勢の朝鮮人が押し掛けて来ていて、すぐに船に乗れそうにもありませんでした。

一九四五年八月十五日を境に一変した在日朝鮮人の境遇。解放に沸いた在日朝鮮人たちの多くは祖国に帰るために、帰還船が出るといわれた下関、博多、仙崎（山口県）、佐世保、舞鶴、函館を目指した。下関を目指した人々は、関釜連絡船に乗るため、その他の人々も漁船を雇い入れて朝鮮帰国を目指したが、台風や機雷に遭い遭難した人々も少なくない。また、それぞれ集結した地域では、朝鮮人を収容する準備をしていなかったので野宿で自炊する状態になり、衛生面で問題がでて赤痢やチフスが発生し、朝鮮に帰還した人々が伝染病を広めることになったという事実もある。こうして一九四六年の時点で一三〇万の人々が帰還した。この人数は日本政府の予想をはるかに越えていた。

（『在日、激動の百年』　金賛汀著より）

そこで、すでに住人が引揚げて空家になった家を兄が二軒ほど買っていたので、そこに入って、様子を見ているうちに帰れなくなったんです。あの時帰っていたら、朝鮮戦争に巻き込まれていたと思います。朝鮮に帰っていた姉は朝鮮戦争で家を焼かれて、山の中に逃げて二、三ヶ月山で暮らしたりして、大変な目にあったそうです。

私達はそんな状態で、いつ帰れるかわからなかったんです。始めの頃はすぐ帰れると思っていたので、靴を履いて立派な格好をしていたんですが、最後はゴム草履を履いたりするようになりました。大人は仕事がなくて、それで引揚げる人が国に鍋や釜を持って帰るというので、

父が鍋とか食器類を大阪で闇で仕入れて、下関の町で屋台みたいな店が路地に並んでいたところがあったので、そこで売って商売しました。山中温泉で用意したお金は全部使い果たしていましたので、商売するしかなかったんです。仲間の朝鮮人は餅屋をやる人もいれば濁酒作って売る人もいれば、皆必死でした。私は子どもだったので苦労もしなかったのですが、家の無い人はテント生活をしている人もいました。今でいうホームレスのようでしたけれど、当時はそれが普通だったんです。

終戦直後、職を失った朝鮮人は闇市で統制品を売って生活する人が多かった。よく売られていたドブロクは取り締まりの対象だったので、警察の厳しい摘発を受けたが、職のない朝鮮人にとってはぎりぎりの生活の糧だった。(『在日、激動の百年』より)

あの頃、お金のある人は闇で船を雇ってそれで帰る人もいましたけれど、航海の途中で機雷とかにやられて、沈没する船も随分ありました。沈没した船が積んでいた荷物が、下関の波打ち際に流れてきました。布とか死体もいっぱい流れてきたんですよ。一家全滅した人もいました。あの頃人が死ぬのが普通でした。

朝鮮人が集まって住んでいたところで牛を飼っていたことがあって、牛をみなで潰して食用にしたり、骨をオンドルの燃料にしたりしました。近所の畑には不発弾がいっぱい落ちていて、私たちは不発弾なんて分りませんから、畑の柵にしたりしました。拾ってきて、火をつけるとぱーっと火が出たんです。

終戦の頃におもちゃの飛行機に時限爆弾をしかけて、プロペラを回せば爆発するという遊びをしたことがあるんですが、それで友達二、三人死んでます。危険って知らなかったんです。そういう爆弾が海辺に落ちていて、うちの弟も、六歳か七歳の頃、友達と下関の武久という海に行ったんです。そこでラムネの瓶を拾って、そこからビー玉をとって弟にやるんだと中の玉を取ろうとして、波打ち際の石に投げたら、それが時限爆弾でバーンと爆発して、それで口の辺りを歯茎がみえるほどの怪我をしました。手で顔を抑えたから手にも怪我をしました。それを見たどこかの農家の人がよもぎの葉をつけて、手当てをしてくれたらしいです。その時、私はどこかに行っ

て家に居なかったんですが、帰宅する途中で「あんたの弟が死んだ」って知り合いから聞かされました。急いで家に帰ったんですが、学校の先生が病院を探して走り回ってくれたと聞きましたが、その日に限ってどこも休みで、病院で見てもらえなかったそうです。結局病院には行けずに、自然に治すしかなくて、家で消毒して治しました。

私たち家族は下関にしばらくいたんですが、大阪で商売していた兄が、たまたま下関に来ていた時のことです。朝鮮総連と韓国系で喧嘩がありました。兄がたまたまそこにいあわせて、警察が撃った流れ弾にあたり、警察から兄が流れ弾に当たったと連絡してきたんです。朝鮮戦争が始まった頃ですから兄が二六歳のときで、ちょうど子供が生まれたという時でした。連絡があってすぐ病院に行ったんですが、家族が病院からちょっと家に帰った時に、葬儀社から連絡があって、亡くなったと言われました。警察の流れ玉で撃たれたんですけれど、なんの補償もなかったですね。

もう一人の下の兄さんは、軍属でテニアン島に行き、戦死しました。骨もこないし、遺族年金もありません。日本は韓国政府に補償したというけれど、我々にはなにもないですから。何年か前に、申請しなさいということになって、補償金が一律二〇〇万円ぐらい出たらしいです。それは弟が申請しました。

兄が亡くなって、下関にいたくないと母が言いました。息子二人もなくして先祖に申し訳ないって言って、国には帰れないと言ってました。その後、金沢の知り合いが家を用意しているから戻ってこいと言ってきたので、そこに行く事になりました。そこに結婚するまで住んでいました。

結婚そして八戸へ

結婚してからは八戸に住んだり、岩手の久慈にいたり、三沢にもいました。函館には八戸から来ました。娘、息子、下の娘と子供達は皆八戸の学校を出ています。

結婚相手は韓国人で、寿司屋、パチンコや、芸能プロダクションなどいろいろな仕事をしていた人でした。結婚は見合いで、私が二〇歳で夫は十八歳年上でした。私は若い時は体が弱くて、親が心配して占いに観てもらっ

たんです。そうしたら、年寄りのところか、後妻か、後は嫁に行かないかしかないと言われて。そうでなければ、長く持たないといわれたんです。私は十五歳くらいまでは、学校でも体操もさせてくれないほど弱かったんです。戦争中で何もない時でも母がどこで集めてくるのか不思議なくらいに、漢方薬とかいろいろな薬を毎日の様に飲ませてくれました。だから今は丈夫なんですね。女の子一人なものだから、母は神経使ってくれました。それで結婚は年長者ということで十八歳年上の人のところに嫁にいったんです。

結婚はバタバタと決まりました。親のいう通りにするものだと思っていましたから。夫になった人は、何回もの結婚経験者でした。夫は十三歳の時に日本に来ていろいろなことをしてきたらしく、結婚した時は、三沢にいました。私は結婚するまで家の事しかしてなくて、外で働いた事はありませんでした。母は嫁にいって何もできなかったら家の恥、習ったことがその家で必要がなかったら捨てれば良い事だからといって、韓国の服の縫い方、お餅の作り方、法事の仕方、全部教えられました。裁縫も母が仕込んでくれました。家では朝鮮式、学校では日本式で縫うことを覚えました。あいさつも朝鮮式でなければ叱られました。ぞうきんの絞り方一つでも煩(うるさ)かったんです。母は日本式でいえば大名の家に預けられ、礼儀作法を教わった人なので、私への躾もきっちりとしていました。韓国に育った人より厳しく教わったと思います。だから私は韓国にいっても恥ずかしくないです。

今、韓国に行って韓国の人に色々教えると、「おばさんどうしてそんなに知ってるの」って言われます。今は韓国の方がひらけていて、できる人が少ないですね。どんなうちでも娘を大学に入れますから、キムチ作れない人はいっぱいいます。私は法事の料理の作り方から全部教えられましたから、昨年、韓国民団で行ったフェスティバルをしたときに、法事の食器を全部並べて、私が法事の料理を作りました。法事の食器のある家が少なくて函館ではうちだけかもしれません。法事用の器は韓国で十年前に買ってきました。この食器は固い木でできています。器にろうそくを立て、果物、揚げ物、餅などをのせます。祭祀のビデオもあります。全部行うのは大変ですが、本家は全部やるんです。四代前までの先祖の法事を家でします。だから韓国では本家の嫁は大変なんです。

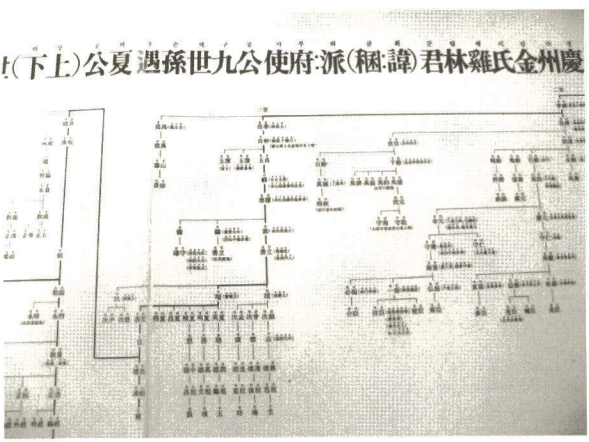
韓国で買った祭祀用の器

五代から九代までは一年に一回で、秋の新米のできる頃。日にちはその家によって違います。時期になるとあちこちの家で行うものです。

チマ・チョゴリ（朝鮮半島の民族服）は、昔は皆作りました。先日の民団のまつりでは、私の服を出して皆さんに着せました。最近は韓国に行って誂えてきます。昨年清尚学院（函館の女子高校）でユネスコが行った催しで韓国の料理を作りました。百人位の人が参加して盛大な集まりでしたが、その時、料理の指導をしました。

韓国のマナーを教えるということもしています。韓国の服を着ても紐の結び方が分らないとか。チマ・チョゴリをきたらやはり韓国の足袋はいて靴を履いてとしないと恰好になりません。私は韓国の服を着たら必ず韓国の足袋と靴を履きます。

韓国では還暦になれば必ず自分の死装束を作ります。これは息子夫婦が作るもので、娘が作るものではありません。韓国では娘を出家外人と書きます。娘が作ると死んだ時に着せません。娘しかいない時は家を継ぐのは父親の弟とか一番近い人になります。娘の婿には家を継がせません。



韓国で作った家系図

私が死んだ後、子供達が家の事を分らなくなるので、家系図を韓国で作ってきました。族譜というのが韓国にありますが、それは難しいので族譜

ではなくて「慶州の金氏の王様の派閥が先祖」の系図です。系図には女はのりませんが、息子二人はのっています。娘は載らないけれど娘の夫がのります。これをもっていれば韓国に行っても、親戚が誰かわかります。

韓国人を誇りとして

私は小さい時から母に仕込まれていたので、韓国人ということを恥ずかしいと思わなかったし、隠したことはありません。私はどこに行っても韓国人と言いましたから、かえって友達が出来たと思います。息子は日本名でしたが、その子ども達は本名にすると言って、金と名乗っています。

芸能人やスポーツ選手にもたくさん韓国の人がいますが、本名を名乗る人は少ないですね。最近少しずつ本当のことを言う人が増えてきましたけど、韓国人ということで随分いじめられましたから、本名は言えないですよ。私も昔子どもの頃、親のかわりに配給のお米を取りにいった時、自分の番が来てもらおうとしたら、「ハイ、あんたは後ろに行って」と言われて、また順番が来ても、また後ろに行ってと言われて、結局米がなくなって、もらえなかったということが何回もありました。小さい頃は「朝鮮人、朝鮮人」といわれるから、どこが違うのだろうと思って、お風呂屋さんに行った時、頭から足の先まで、よその人の体を観た事もあります。嫁に行った姉が、「おまえ何をみているんだ」って聞くので、「朝鮮人朝鮮人っていうけど、朝鮮人も中国人もなにもかわらないじゃない」と言いました。本当に朝鮮人ってよく虐められました。

小学校の同窓会に五、六年前に卒業以来初めて行きました。その時は、ちょうど五〇人集まったんですが、同窓会の前に、私が小学校の先生に手紙を出したんです。「今やっと落ち着いて、山中温泉の小学校の同窓会に行きたいと思う」と書きました。そうしたらすぐに返事がきて、今年五〇年記念の同窓会を開くからと知らせてきました。それが石川県の新聞に載って、私のことが紹介され、五〇年ぶりに山中温泉まで行きました。私は帽子をかぶって行くからねって言って、それが目印です。

同級生の名前も覚えています。どうして覚えているのって聞かれましたけど。昔私は級長に選ばれたんです。

先生は朝鮮人でも級長にしてくれたんですが、級長のバッジをもらってくれれば、同級生が朝鮮人のくせにって虐めるんですよ。先生は「おまえら、朝鮮人に負けて悔しかったら勉強してみろ、なんで朝鮮人に負けるんだ」っていうんですよ。そうやって先生は味方してくれたんです。それで、山中温泉の友達が、「チョさんどうして覚えていたの」っていうから、「田中さんは級長だったから覚えているし、上田さんと佐野さんは私を虐めたから覚えている」と言いました。そうしたら「私、そんなに虐めた」と言うんです。「虐めた人は忘れるけど虐められた人は忘れない。でも今こうして会ってみると懐かしい」って話したんですよ。そうして、新聞社が取材に来たり、亡くなった人もいたので慰霊祭をしたりして、一晩泊まって楽しんできました。

戦争が終わって、韓国に帰るといって山中温泉を引き揚げたので、同級生達は私が韓国に帰ったものとばかり思っていたんです。だから再会をとても喜んでくれました。今では、電話や手紙がよく来ます。会ったら、虐められたことは忘れました。

私の生まれは韓国だけれども、故郷はどこだといえばやはり山中

同窓会に出席したマルスンさん

韓国出身の曺さん

50年ぶりクラス会

山中で友人らと再会

旧制国民学校

第二次大戦中に山中町の旧制山中国民学校に在学した韓国・慶尚北道出身で北海道函館市に住む毛鋼の曺末順さん（82）が十七日、クラス会に出席するため五十年ぶりに山中町を訪れ、国民学校時代の友人らと再会した。曺さんは、友人らと国民学校の思い出などを語り合い、旧交を温めた。

五月中旬、同町上野町の山中小八国民学校在学当時、クラス会での再会が実現した。

小松空港を経て山中町に到着した曺さんは、同町湯の出町の恵栄寺で営まれた同級生物故者の法要に列席し、焼香した。このあと、同町東町一丁目の旅館で開かれたクラス会には、男女の級友五十人が参加し、チマチョゴリ姿の曺さんを囲んで夜のふけるまで歓談した。

曺さんは「親しい友だちに会え、ふる里に帰った気がする。町が発展し、昔とすっかり変わったのに驚いた」と話した。

チマチョゴリ姿で級友と50年ぶりに語り合う曺さん（右から2人目）
＝山中町東町1丁目の旅館

50年ぶりのクラス会を伝える新聞
北國新聞　平成7年（1995）8月18日付

温泉ですね。日本にいれば韓国人の目で日本を観るし、韓国に行けば日本の目で観るし、両方の目をもっているんです。本名名のれない韓国人は皆苦労してます。でも、子どもにもいいますが、アメリカだろうと日本だろうと、どこに住んでも名前は変わらないはずです。名字を変える事自体がおかしい。戦争中は北も南も真っ赤にぬられてみな日本で、終戦の時偉い人、長と名の付く人はすべて日本人でした。戦後このままだと混乱するからといってアメリカが北は蒋介石に預け、南はアメリカがみるといって、一時分けてすぐ一つにするということになったけれど今だに分断されたまま。戦争に負けたわけでもないのに、朝鮮民族は大東亜戦争の犠牲者です。

昔虐められた人たちは、どんどん亡くなっています。今の韓国の若い人は小学校に入れば歴史で過去の事を習うけれど、経験していません。でも年とった人は今でも忘れません。恨み骨髄に達しています。韓国の故郷に行くと、当時、新婚まもない若い人で、田んぼにいるとき強制連行された話を聞きます。夫を強制連行で連れていかれてそのまま帰ってこなくて行方不明とか。残された妻は若いのに舅姑や子どもの面倒を見て一生一人という人が沢山いるんです。昔の「二夫にまみえず」っていう考えから、ずっと嫁ぎ先にいて再婚してません。強制連行されて日本に来た人は、終戦になったから国に帰ろうとしたら金がない。一旗揚げて帰ろうとしているうちに一人でいられなくて日本の女の人と結婚して子どもができて、やっと落ち着いたから国にかえってみたら、妻がまだいたと。子供も一人前になっていた、なんていう人はいっぱいいるんです。韓国の家族に家を建ててやったりして二重生活している人がいっぱいいます。昔は米など良い物は皆日本に持って行きましたから、韓国には食べる物がなくて、草とかをとってきて食べてたんですよ。今の北朝鮮みたいでした。今、国に帰ると私のことを、日本で苦労しているでしょうと言う人がいます。昔と違って、在日韓国人は豊かになって、会社を経営したりして日本人を雇っている人もいる、と言っても信用してくれないんですよ。昔のことが頭にあるから。

日本人に虐められたけれども、母からよく言われたのは、「頭で勝て」と。勉強して頭で勝ちなさいと言われて、それで学校の勉強を一生懸命して、負けないってがんばりました。いつも学校に残されて、兵隊さんへの慰問文

を毎日一〇枚書かされました。勉強の出来る人が書かされたんです。成績が良いと母も喜んでくれました。

八戸から函館へ

八戸から函館に四九歳の時にきました。今の寿松苑の主人をしている息子は二〇歳でした。夫が遊び人で、どうしようもなくて、占ってもらったら北に行けと言われました。それで札幌に行くつもりが夫がお金を使ってしまって、結局函館の夫の知り合いを頼って来ました。それで店を建て、二年後に今の四階建てのビルにしました。店の切り盛りはすべて私がしました。夫は何もしない人で、いろんな商売をしましたが、店に出てきたことのない人です。私が、子どもを学校に行かせ、車の免許も取りました。店の仕事をして、家事もして、睡眠時間を少しとって、また子どもを学校に行かせ、と休むことがないです。いつも夜中の三時まで働きました。それでも大変と思いませんでした。子どもを大きくしなければという一心でしたから。

店はすごく繁盛して、お客さんの座るところがないくらいでした。足が悪くなったので三年前に店を退き、夫は十年前に亡くなりました。ある時、夫に雪かきしてというと俺は雪かきのために韓国から来たんじゃないというんですよ。家の事や仕事は絶対にしませんでした。

店や家を建てるために銀行からお金を借りることもありましたが、すべて期日にきっちとかえしました。信用が大切だからです。家を買うのも私が決めました。嫁にきたときは、商売で夜は着物を着なければならなくて、着たことがないからどうしようと、夜にならなければと初めは思っていました。私は女の子は働かないで、親に行けと言われたら嫁に行くもんだと思ってましたから、相手のことはよく知りませんでした。名前も知らない人のところに来ても、嫁にきたらなんでもしました。

今、韓国に、法要で一年に一回は必ず行きます。韓国に行けばすぐ韓国語で話します。普段日本語で話しても、韓国に行けば自然と韓国語で話をします。韓国に望郷の丘というところがあって、ベトナムで戦死した人とかが埋葬されているところですが、そこに父と母と兄を埋葬しています。故郷に帰れないと言っていた母ですが、故郷に埋葬してあげました。

報告

秩父事件一二〇周年記念作品映画「草の乱」上映にかかわって

清野きみ

① 実行委員長を引き受けた理由の大部分は埼玉県、群馬県にほぼ十年余り公務のために居住し、特に秩父地方、秩父路を歩いたことがあるからだが、請われたことを機に、明治現代史や明治維新によって古い体制が音をたてて崩壊していく変革の嵐の坩堝（るつぼ）を知りたいと思ったからである。秩父事件の舞台となった秩父は関東ローム層に広がる薬草の宝庫、板東三三観音霊場があり、一年に一五〇位の祭りがある。連なる山脈と歴史が踏み固めた峠があり、早くから養蚕、製糸、絹織物などの農家副業が発達していたが、維新以後の商品経済の発展、変動の大きな影響を受け、小生産者や小地主らが大量に没落、高利貸が横行し、高利貸の負債に苦しむ貧民を中心に、困民党、負債党とよばれる組織がつくられ、利率の引き下げや借金の据え置き運動を起こしていく。「借金の十ヶ年据え置き、四〇ヶ年賦を柱としたそのプロセスこそ、秩父事件の全体像に欠落させてはならないものがある。中・上農層をもふくめた一万人の世直し運動である。世（よ）均（なら）し運動ともいわれる。」ことに打たれたからである。『女たちの秩父事件』（五十嵐ら　新人物往来社　一九八四）のなかに、「人間が生きていくのは並大抵のことではない、まして世の中が不景気になれば権力なし、武力なし底辺の庶民に生活の重圧がかかる。秩父困民党と自称する」という部分があり感動を覚えたからである。

② 神山征二郎監督は、「月光の夏」「ハチ公物語」「郡上

一揆」で知られているが、「草の乱」は、監督が三〇年間暖めてきた構想であり、秩父・多摩地方出身の研究者の成果を調べ、秩父事件の全体像がようやく示されたのが戦後、それも昭和四三年（一九六八）井上幸治著『秩父事件』によってであることを知り、確かめつつ製作に入ったという。その製作態度に深い敬意をもったことと、市民サイド、地域のなかに一二〇年前の秩父事件を映画にしようとした大きな勢い、流れがあり、市民の出資で製作資金四億三千万円が集まり、ボランティアのエキストラはのべ八〇〇〇人にのぼったという。「秩父事件では民衆が刀を持って立ち上った。この映画も民衆の力でできた」と監督はいう。「今の日本は大きな曲がり角にいる。止められるのは民衆の力しかありません」と。明治政府に対する農民らの武装蜂起「秩父事件」、その指導者で事件後は北海道に渡って潜伏、一九一八年（大正七年）北見で死去した井上伝蔵を中心に、事件を民衆側から見る監督、そうした姿勢の内側に、民主主義の源流を求めようとする強い意思を感じたことが二つ目の理由である。

③　道南、函館に、秩父事件の歴史的意義を明らかにしようと秩父事件の検証をすすめている「今金歴史を探る会」の古俣芳衛氏、山寺利男氏がおられ、豊かな実績をもっておられたこと。困民軍の会計長、井上伝蔵の参謀格とされる小柏常次郎が、桧山管内今金町で五年間？暮らした史実があり、同会事務局長である山寺氏からは「秩父事件と北海道、今金の小柏常次郎」と題する講演を頂き、小柏の足跡を学習することができた。大きな収穫を得た。

④　実行委員会は多彩な方々から構成され、多くの上映協力者を得て、上映当日の二〇〇四年十一月三〇日（火）を迎えることができた。しかし実行委員会の発足は同年十月七日で、この難しい映画を市民の方々にどう宣伝し、わかってもらえるか、短期間の勝負に、正直頭を悩ませた。上映実行委員会では〝一二〇年前に埼玉県秩父で「自由自治元年」の願いを掲げ、圧政に抗して立ち上がった名もなき人々の姿を描いた真実のドラマです〟を核にして、毎日新聞取材（10／9）、函館新聞の月曜トーク（11／22）、北海道新聞のいさり火（11／10）、NCV函館センター（11／20）、FMいるか（11／22）、NHK函館放送局ラジオ（11／25）、HTB函館支社テレビ（11／24）と手分けして臨み、有楽町スバル座における「草

の乱」先行ロードショウでは総入場者数二六一一四名となったことなどを添えて市民の皆さんにお知らせした。

（情報誌「ぴあ」の〝読者が選んだ好きな映画はこれだ〟の二位に「草の乱」がランキングされ、一ヶ月間のホームページアクセスは十万を超えたと映画ＪＯＵＲＮＡＬで報じたことも加えて――）十月四日トークショウに出席してくれた神山監督は、このような動きを〝もうがまんがならねぇ〟は実は若者たち自身が腹の底に秘めている言葉なのかも知れないと東京での成功を分析してくれた。

こうした情報の交流も加えられて、実行委員会と協力者の方々そして私もがんばることが出来たのである。第一回打合会に出席された、太田誠一、板谷順治、遠藤芳信、古俣芳衛、山寺利男（都合で欠席）、川口英孝、佐々木公子、そして東郷征二、吉野敏明、広瀬等、太田正春、船矢朴郎の各氏、字幕・手話の方や一五〇人近い協力者の方々に、紙上を借りて厚く御礼を申し上げる。

当日の映画鑑賞者は一四〇〇人、上映時間二時間の長さも苦にならず大きな感動に包まれた函館上映会となった。

・映画「草の乱」函館上映会日程表から

二〇〇四年十月七日（木）
第一回実行委員会（上映委員会発足）
二〇〇四年十月十四日（木）
試写会／午後六時三〇分から
（函館市芸術ホール大ホール）
二〇〇四年十月二四日（日）
「草の乱」シネマトーク／午後一時三〇分から
（函館白百合学園ホール）
二〇〇四年十月二五日（月）
第二回実行委員会／午後六時三〇分から
（於 函館保健企画）
二〇〇四年十一月八日（月）
第三回実行委員会／午後六時三〇分から
（於 函館保健企画）
二〇〇四年十一月二二日（月）
第四回実行委員会／午後六時三〇分から
（於 函館保健企画）
二〇〇四年十一月二九日（月）
上映準備／午後六時～
二〇〇四年十一月三〇日（火）
上映日（函館市民会館大ホール）
午前十時半～、午後二時～、午後七時～

☆試写会アンケートから

去る１０月１４日、映画「草の乱」の試写会が開催され、約７０名の方が参加されました。アンケートに記入されたご意見の一部をご紹介します。

◆とても多くの人で創った映画でその人たちの想いを強く感じました。

◆秩父事件のことは全然知らなかったです。すごい人たちがいたんだなと思いました。

◆シネマトークの柱は何になるのかな？圧制に立ち向かう民衆の心かと思うが、明治維新のドタバタしているときの山県（長州）のどうにでもして政治（専制政治）を自分のものにしようとする思いが強く感じられた。

◆こういう人民の闘いが（蜂起）あったのには感動した。各地の闘いを勉強したい。
友人４名がエキストラで出ている。そのうち一人が函館出身です。

◆司会や解説の方のお話を簡単にまとめて字幕で出来ればと思います。
ラストのシーンがいい感じです。

◆民の力。自由と権力。とても考えさせられる作品だと思います。

◆真実を知る機会をもらったような気持ちです。

◆農民の終結力がものすごい人数のエキストラの出演で表現されていて大迫力だったと思います。

◆史実にもとづいてよくつくられていると、思いました。困民党に集まった人々のすごい心意気に感心しました。展望をどうひらいたのか、それとも展望などなかったけど、それより道はなかったのかもしれませんね。

◆非常にわかりやすい映画だと思いました。いろいろ考えさせられました。本上映まで日にちがあるので、よく考えて見たいと思います。小柏氏の立場は複雑のように描かれていた。

◆世界中の人に見てもらいたい。子どものうちにこういう映画をみることも大切だと思います。

◆最後は血を見るのでしょうか？お役所は今も昔も気質が変わらないんですね。

・映画『草の乱』上映実行委員会ニュースNo.１（2004・10・24）試写会アンケートから

2004年（平成16年）10月25日（月曜日）　道南 24　北海道

映画「草の乱」

『秩父事件を通じ日本の農民描く』

明治十七年（一八八四年）に埼玉県秩父地方で起きた「農民の武装蜂起」秩父事件を扱った映画「草の乱」の函館上映を前に二十四日、神山征二郎監督と、後に今金町に移り住み小柏常次郎役の俳優石田信さんらのシネマトークが函館白百合学園で開かれた。（上田貴子）

映画への思いを熱く語る神山監督（右から2人目）

来月上映前に函館で神山監督らがトーク

厳しい撮影 裏話も

市民でつくる同映画上映実行委員会の主催で、約六十人が参加した。

自身も農家の出身である神山監督は、「農業が機械化される前の日本の農民の姿を映画にしたかった」と、監督インタビューした一九七一年から「草の乱」の構想を練っていたことを振り返った。

ほかに、元「今金歴史を考える会」の会員で、江差町在住の山寺利夫さんが小柏常次郎の生涯について講演した。

「草の乱」は、十一月に函館市民会館大ホールで上映される。

「草の乱」シネマトーク

上映会場風景

甲
秩父困民党軍律
革命本部
革の乱
120年前の日本に凄いやつらがいた!

長留村
横瀬村
下吉田村

般若村
大滝村
風布村
日尾村

困民党の掲げた要求
120年前の日本に凄いやつらがいた!
120年前の日本に凄いやつらがいた!

革の乱
120年前の日本に凄いやつらがいた!

⑤　さいごに――。

平成十七年一月十日北海道新聞記事に、秩父事件の中心人物とされる井上伝蔵（一八五四～一九一八年）の、石狩に住んでいた時の俳句仲間らと写した写真がありました。〝石狩時代の伝蔵見つかる〟という大見出しです。道内では逃亡の身故、他人と一緒に写真に納まることは避けていたといわれていましたから、貴重な写真です。一瞬、秩父事件はまだ終わっていないと思いました。

いまひとつ、「草の乱」上映キャンペーンのため来函されたシネマトークの講師、神山監督は、その日心から切ないお顔をしていました。伺うと、中越地震の当日でしたし、山古志村で自身のデビュー作「鯉のいる村」を撮るためにそこに二ヶ年程滞在し世話になったとのことでした。後刻、新潟中越地震被災者支援チャリティ映画会をよびかけるひとりとなって、私どもの気持ちをお届けいたしましたことを申し添えます。

『草の乱』をご鑑賞された皆さま方に改めて、厚く御礼を申し上げます。ありがとうございました。

なお、稿の末尾に、実行委員より提供された学習資料集一覧及び主要参考文献とコメントをつけましたのでご覧頂ければ幸いです。

映画「草の乱」上映のための実行委員より提供された学習資料集一覧（書名・発行及び発行年）

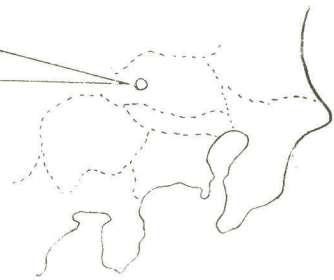
・秩父事件と北海道　自由自治九五年記念
人権と民主主義を守る民衆史掘りおこし北海道連絡会／北海道歴史教育協議会桧山支部・今金歴史を探る会
・秩父事件の助っ人―屋根板職人・小柏常次郎（埼玉土建組合機関紙）
・秩父事件「草の乱」映画鑑賞学習資料（山寺利男氏　二〇〇四）
・秩父事件はどんな事件だったのか（吉田町石間交流学習会　二〇〇三・十・七）
・今金に住んだ小柏常次郎―自由民権百年の記念ＮＨＫＴＶ放映資料（今金歴史を探る会　一九八一・十・七）
・秩父事件九五周年北海道今金集会記録映画講演資料（記録映画作家　藤林伸治氏　一九七九・一）

秩父事件95周年 北海道今金集会

講演 藤林伸治 氏（記録映画作家）

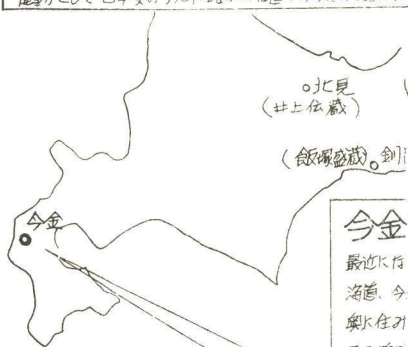
95年前 秩父では…

明治の中ごろ、農民は、年貢と地租、高利の借金にあえいでいました。地租の軽減を求める農民と、当時の自由民権運動と結びつき、次々に蜂起しました。その中で最大のものが、明治17年の秩父事件でした。事件後、主要な指導者はとらえられ、極刑に処せられたのです。「火付け、強盗の類」とされた秩父事件も、現在では自由民権運動として日本史のうえに確かに位置づけられようとしています。



秩父から北海道へ

秩父事件の後、秩父事件の指導者であった井上伝蔵、飯塚盛蔵が北海道に逃れ住んでいたことが明らかにされ、民衆史掘りおこしの運動の中でその生涯が、発掘され、顕彰されています。



今金に住んだ小柏常次郎

最近になって、今一人、秩父事件の指導者、小柏常次郎が北海道、今金町に住んだことがわかりました。常次郎は今金の山奥に住み、日蓮宗の祈祷師をやっていたらしいのですが、当時、和別尋小学校（現今金小学校）の保護者会で、国賊犯としては駄目のことだといわゆる「講演」を行っています。常次郎を通じ、また一歩、秩父事件の姿が鮮明にされてきております。

小柏常次郎を通じ秩父事件を一層深くとらえましょう。皆様の協力をじっくりお待ちします。

秩父事件95周年　北海道今金集会（1979年10月21日　北海道今金町民センター）
記録映画作家　藤林伸治氏　講演資料より

・戸籍によると、小柏常次郎は今金に５年住む。常次郎一家は、簡単な入植者の家をこしらえ、家の前に神社（現熊野神社）を創設し、青年団にソロバンを教える。大正２年、一家は娘セツの夫と樺太へ渡る

主要参考文献とコメント

・「秩父騒動」　堺　利彦　改造十月号　昭和三年（一九二八）

・「秩父騒動」　江袋文男　秩父新聞社（一九五〇）

・「自由党史」上下　自由党総理　板垣退助監修（明治四三年公刊）

・「自由自治元年」秩父事件資料・論文と解説　井出孫六編著　現代教養文庫一一八六　社会思想社（一九八七）

・「井上伝蔵・秩父事件と俳句」　中島幸三　芭書林

・「中島幸三　井上伝蔵とその時代」　田島一彦（秩父文化の会代表）埼玉新聞社

・「秩父事件」　秩父事件研究顕彰協議会編　新日本出版社（二〇〇四・八）

・「秩父事件」　井出幸治　中公新書一六一（一九六八）

・「埼玉の女たち」　韮塚一三郎　さいたま出版会　（一九五四・十二　初版　昭和六〇年）

・「児玉町の文化財」児玉町教育委員会　児玉町文化財保護審議委員会（昭和六三年）

・「苧麻（チョマ）・絹・木綿の社会史」　永原慶二　吉川弘文館（二〇〇四）

——競進社模範蚕室県指定を期に（清野注）

『埼玉の女たち　歴史の中の二五人』の中の、二五人のひとりに、函館とゆかりの深い新島襄の母とみ　の記述がある。次に①、②として抜粋しておく。

浦和市仲町の出。コレラ患者をも平然と看病。その愛が、襄の「心」を育む。

25 同志社の創設者新島襄の母　とみ

新島襄[1]は明治維新の大目的である近代国家建設をリードした教育家である。彼が新日本を夢みて、幕末、国禁を犯して函館からアメリカに密航、熱烈なキリスト教徒となって十年後に帰国、明治八年、キリスト教主義の大学同志社を創設したことは、多くの人の知るところであろう。

（1）呼名を七五三太。明治八年一月上旬から襄と称した。

彼は真正なる自由と良心をこの上もなく重んじた。今、同志社の正門のところに「良心の碑」とよばれている碑が建っているが、この碑文が示すように、彼の教育上の理想の人間像は「良心の全身に充満したる丈夫」にあった。彼によればこのような「丈夫」こそ真の英雄なのである。

彼は明治二十三年一月二十三日、天寿を全うすることに至らず四十八歳で長逝したが、彼の精神は今も生きていて、没後九十余年を経ているにもかかわら

274

①同誌p274より　傍線に函館あり

弘化四年（一八四七）十一月十五日、袴着初祝がおこなわれると、とみの兄金蔵は金弐百疋を贈った。この祝金は親類縁者中最高で、鍵屋の裕福ぶりを語っている。なお六之丞の死は天保十二年（一八四一）二月八日である。安政四年（一八五七）十一月十五日、七五三太が十五歳となったので元服の式をあげた。しかし浦和からの祝儀は届いていない。それはどういうことだろうか。

ところで、その後の中田家は明治六年九月二十一日、鍵屋金蔵が没している。なお金蔵の妻はこれより先、嘉永四年（一八五一）正月十一日に没した。金蔵没後の中田家については「鍵屋」という屋号を用いての記載は過去帳の上では見られない。明治九年九月九日に中田富蔵なる者が没しているが、これがおそらく金蔵の子ではなかろうか。その後の中田家については現在のところ杳としてわからない。ただ、浦和分署（のちの浦和警察署）は明治九年にこのあたりの民家を買い取って設置されたものである。この民家がおそらく、とみの生家、中田家であろう。（『警察風土記』参照）

元治元年（一八六四）三月十二日、七五三太快風丸に乗り品川出帆、函館に航す。この時父母の承認と、祖父弁治の奨励を受ける。この年七五三太は六月十五日、幕府の禁令を犯して、函館を脱出、六月二十四日の夜には上海に向う船中で断髪した。翌年の慶応元年（一八六五）七月二十日にはボストンに到着。時に七五三太二十三歳。

慶応二年（一八六六）二月二十一日、この日七五三太父民治宛第一信を送る。

「小子ひそかに謂ふ。此挙敢て君父をすつるに非ず、且つ、飯食栄華のためにあらず、全く国家の為に寸力を竭（つくす）さんと存じ、中心燃るが如く、遂に此挙に及び候」

285　同志社の創設者新島襄の母　とみ

②同誌p285より　傍線に函館あり

「自由党史」によれば、井上伝蔵のひととなりについて次のように記されている。

ひととなり沈毅剛胆、而も容貌婦人の如く挙止極めて嫻雅なり

「自由自治元年」　井出孫六編著から

・現代史出版会から一九七五年に刊行されたが同社（社会思想社）解散後入手困難となったため、最初の上梓から一三年の歳月を経過しているにも拘わらず、本稿に盛られた諸論稿の価値はいささかも変わっていないものと信じ刊行した（あとがきより）。

・井上幸治氏の「秩父事件」が一九六八年発行されて始めて秩父事件の全体像が示されたが、それと相前後して、江袋文男氏「秩父騒動」（秩父新聞社一九五〇）を知り、改めて「自由党史」をみて驚いた。極端なまでに矯小化されているのをみたから――、これとひきかえ、古書展を探し歩いて入手した（一九二八年　昭和三年）十月号の「改造」に掲げられた堺利彦の「秩父騒動」からの感動は強烈であった。同じような感動は、井上伝蔵の死の直後、大正七年の夏「釧路新聞」に「秩父颪」が連載されていてそこからも言い盡し難い感動を受けた。

世界大百科事典（一九三四年）には、チチブソードーの項のみ。一九七二年の平凡社発行で、秩父事件となる。遠山茂樹担当

（維新以後の商品経済の発展、社会主義運動の開花と、急速なファシズムによって抑圧された秩父事件の扱い方を示すものといえよう。（清野補））

秩父事件を、高利貸、村・県・政府に対する要求を掲げ、政治の改革を求めた事件として、また自由民権期最大の武装蜂起としての評価がなされ、秩父事件研究顕彰協議会が、一九八五年一一月に結成され、定期的に研究会やフィールドワークなどを行っている。（あとがきより）

秩父事件の郷では、秩父錦本醸造に、草の乱と名付けたお酒を販売し、秩父事件とはの解説を加えている。（函館上映実行委員が入手したもの）

総合女性史研究会大会に参加して

酒井嘉子

二年振り、会誌『道南女性史研究　第十五号』を出すことになり、ほっとしている。

この間東京で二回、昨年今年ともに三月「総合女性史研究会大会」があり、参加した。

今年九月には、奈良女性史研究会の尽力下に「第一〇回全国女性史研究交流のつどいin奈良」が開催されるのを楽しみにしている。このつどいは、一昨年九月の新潟での集い以来二年ぶり、だいたいこの間隔で開かれている。それには毎回参加するようにしているとはいえ、札幌からも離れた函館のような地方にいると、女性史研究者は勿論、聞き書き中心に女性史を学んでいる人との交流でさえもなかなか無い。そんな環境に住む者にとって、専門的な女性史研究者の参加が多い総合女性史研究会大会は、報告が難しい内容のものもあるが、年一度の学習と交流の場として貴重な機会であった。

以下、二回の大会のプログラムを紹介しておく。

昨年は、三月二七・二八日、埼玉県武蔵嵐山町の国立女性教育会館ヌエックで開かれた。大会テーマは「文字と女性－女性が読むこと、書くこと、その歴史と意味－」だった。

男性に較べ女性に関する「文献史料」が少なく、かつ女性自身による「文字」記録が少ないという制約を踏まえて、ジェンダーの視点から「文字と女性」の歴史的意味を捉えなおすことで、女性史研究における「文献史料」、

さらには「口述史料」（一九七〇年代以降欧米やアジアの諸地域では「オーラル・ヒストリー」として社会的にも認知され、学問として確立している）の分析方法と新たな研究課題を探ることであった。

二日間の報告は古代の「漢字表現とジェンダー」。中世の「古文書にみる仮名と漢字－ジェンダーは存在するのか－」。近世は、庶民レベルの女性たちの残した史料から『萬覚帳』と主婦」および「遠州地方の女性と文字」。近代は、一九一〇年韓国併合以降の「植民地朝鮮における女性の識字率」および、諏訪地方の「製糸女工のリテラシーと人間的発達」。そして、現代は「中国残留孤児の日本語学習－私の体験から－」であった。

いずれも興味深かったが、特に、私とあまり年も違わない斉藤弘子さんの体験が、一番胸に響いた。一九四五年旧満州で敗戦を迎えたとき満鉄職員だった父はすでに亡く、母はショックで失明、八路軍の人に助けられながら母を看取り、六歳で残留孤児となり、養父とともに働きながら苦労して教師になる。何回も何回も日本の厚生省に手紙を出して、四五歳のときやっと日本にいる姉と連絡が取れて、中国での暮らしを捨て、中国人の夫と三人の子どもをつれて一九九一年に帰国する。が、その時まで全く日本語が分からず話せなかった。仕事は無く、日本政府は無策…、「わたしは五二歳、日本人なのになぜ日本語が話せないのか？書けないのか？悔しい！」。その思いをバネに、日本でのゼロから出発した十年あまりの苦闘を、持ち前の明るさと驚くほど上手な日本語で語った。彼女は、中国帰国者東京連絡会の副会長であり、一五〇〇人の残留孤児「国家賠償請求訴訟」原告として活動している。

懇親会で斉藤弘子さんを真ん中に、左は塩野さん
（2004. 3. 27）

夜の懇親会のとき下手な中国語でご挨拶したら、とても喜んで私を抱き締めてくれた。

もう一つ、金富子さんの報告「植民地朝鮮における

女性の識字率」について。一九三〇年の朝鮮国勢調査での識字調査によれば、朝鮮人女性の非識字率は九二・〇％で、ほとんどの朝鮮人女性が読み書きできなかったことになると報告。日本でも近世江戸時代の女性の多くは読み書きできなかったと思われるが、昭和五年のこの統計は朝鮮人男性の非識字率六三・九％、在朝鮮日本人女性二四・〇％、同男性一七・五％である中でも際立って高い比率で、「極端な民族格差・ジェンダー格差があったのであり、この趨勢は植民地末期まで基本的には続いたと思われる」と話した（注1）。金学順（キムハクスン）さんが一九九一年八月に韓国で初めて、日本軍の元慰安婦だったと名乗りあげることが出来たのも、彼女は字を新聞を読むことができたからと指摘した。誰かが言った「国はことばの戦争責任も取っていない」が耳に残っている。

今年は、三月二六・二七日の二日間、高田馬場の早稲田大学本部キャンパスの教室を借りて行われた。大会テーマは「『家族』再考1－女性の死と埋葬－」であった。現在、法的な「家族」と実態「家族」のズレが様々な形で認識され、日本の女性たちの間で、自らの「最期」を、既存の「家族」の枠組みに縛られないで自己決定したいという動きが顕著である。その背景には、現在女性のありようと「家族」に関わる問題、国家政策のあり方が問われている。そういう状況を踏まえて、今回は「女性の死と埋葬」をテーマに、南アジアや東アジアの女性と「家族」の実態、日本の前近代～近現代の実態「家族」の変化をジェンダーの概念を導入して追うことであった。

初日、二六日の午前は総会。最初に昨二〇〇四年度の活動総括として、研究活動の推進につとめ、女性史研究における国際的交流の取り組みを行ったことと、会員内外の情報提供のため、会のウェブサイトを立ち上げたことが報告された。米田佐代子代表から、彼女も会員の日歴協（日本歴史学協会）で女性研究者の実態調査をしたいと考えている、女性会員の比率、女性会員の論文比率、女性会員の生活実態調査－多くは非常勤で、科研費の申請すら出来ない現状にあると発言があった。昨年末にはジェンダー史学会が設立され、「人類の歴史に関わる諸学問領域を、ジェンダー視点から研究しその普及を図ること（規約第二条）」である、との報告もあった。ジェンダーの定義として、「肉体的差異に意味を付与する知」（J・W・スコット）、なるほどと思った。

戦後六〇年の今年、憲法問題は九条とともに、二四条が「女性のわがまま勝手を招いた」といわんばかりの攻撃を受け、「家族共同体の重視」や「家庭の保護」というようなかたちで女性の権利を制限しようとする動きが強まっていること、東京都では「ジェンダーフリー」の用語を禁止するに等しい決定が行われたなど…も活動方針案の中で紹介され、女性史研究者の課題は何かを考える必要を訴えた。会として憲法第九条の改悪に反対し、第二四条を守り発展させることを求める声明を出すことになった。

午後からの報告課題は

①「中国歴代有力者の墓葬と女性」

②「中世公家の墓制にみる夫婦」

③「葬送墓制からみた江戸の身分と家族」

夜は大隈ガーデンで懇親会があった。北から南まで、日本だけでなくイギリスから帰国したTさん、インドからのAさんたち…の多種多様な話題が飛び交った。私は早稲田に来る前に寄り道してきた夢の島の、第五福竜丸展示館で見せてもらった函館の十六歳の少女の書いた「奇跡の手紙」のこと（注2）を話した。今も気に留めているが彼女がその後どうなったかは分からない。

翌日は

④「墓葬・墓のない死：インドにおける女児殺しをめぐって」

⑤「死と埋葬－女性・家族・法－」

⑥「墓における脱『家』現象－ジェンダーの視点から－」

時代によって国によって、国内でも地域によって、古い時代ならば身分・階層とか、権力・財力等々とかによって、女性の死と埋葬は非常に多様であること、「家族」のありようも多様であることが報告され、やはり興味深く聞き入った。昨年報告者中一人だった男性は、今回は六人中三人が男性報告者であった。

今年は会場が東京都心で、八〇人余りの参加者はその近辺からの参加者の方が多かったからだろうとは思うが、宿泊は個々人ばらばらで（私は仙台の佐藤さんと同宿）、懇親会は楽しかったけれど昨年に較べれば十分な交流は出来なかったと思う。一昨年、昨年と会場は宿泊ともにヌエックであったため、大半の参加者は朝起きてから寝るまで交流できたといえる。安い宿泊費も地方からの参

加者には有難い。

昨年私はヌエックに前日から宿泊した。食堂で同席した東京の折井さんに何気なく「区議会と都議会の議員だった門田昌子さんをご存知ですか、函館の遺愛出身の女性なんですが…」と話しかけたことで門田さん取材（注3）のきっかけをいただけた。札幌女性史研究会の林さんからは、一九四六年四月誕生した「三九人の女性国会議員」の一人柄沢とし子さん（注4）の話をたっぷり聞くことができたし、仙台の佐藤さんは函館出身で、「いつか『道南女性史研究』に寄稿したい」といってくれたことは今も大きな励みになっている。愛知の伊藤康子先生には私たちの会誌に原稿を依頼（注5）して以来、いつも暖かく見守ってもらっているという甘えがあり、塩野さんは毎回東京の情報を送ってくれる。

市川房枝を研究している九州の国武さんは渋谷区代々木の「婦選会館」から「函館婦人時局研究会」資料のコピー（注6）を入手してくれた。懇親会のとき、現在最も活躍している女性史研究者の一人早川さんに、彼女の論文の中で紹介されていた「宣撫活動として抗日勢力の帰順式に臨む矯風会会員」と説明された写真（注7）を見て驚いたと、思い切って話しかけた…等々、他から見ればささやかな事であっても、私にとっては大切な交流の場でもあった。以上、簡単な参加の記とする。

（注1）　統計数字は『総合女性史研究　第二二号』（二〇〇五・三）による。

（注2）　一九五四年三月の第五福竜丸の事件を知って、久保山愛吉さんの遺族に宛てた多くの手紙、その中に九月二五日付けの函館の少女の手紙もあった。同九月二六日の台風で沈没した洞爺丸に積まれていたが、引き上げられて奇跡的に久保山夫人すずさん宅に届けられ、発見された手紙で、今年二月札幌クリスチャンセンターでも公開された。函館の少女の名前は〝高橋妙子〟さん、どなたか彼女をご存知でしたら教えてください！

（注3）　本号の酒井の小文「戦前、単身北京に渡った遺愛の卒業生」をご覧下さい。

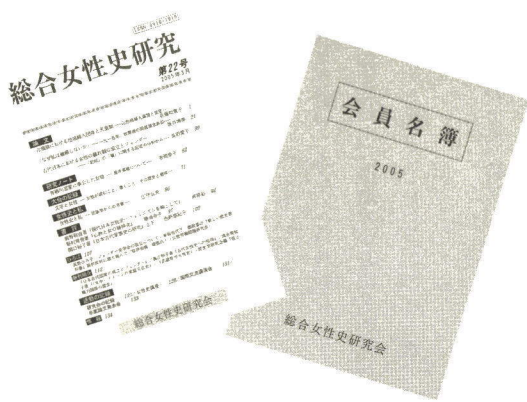
（注4）　『女性史研究ほっかいどう　創刊号』（二〇〇三年）に、林さんの「初の女性代議士柄沢とし子小伝」が、『道南女性史研究　第十一号』（一九九八年）には柄沢（現松

島）とし子さんの講演記録が収録されている。

（注5）『道南女性史研究　第十号』に伊藤先生の玉稿「地域女性史研究の意味」が収録されている。

（注6）市川房枝記念会所蔵「婦人参政関係史資料」マイクロリール〇〇二九、コマ五〇九～五二二

（注7）その矯風会会員は、神野洋二著『祖国はいずこ』や朽木寒三著『馬賊と女将軍』に登場する韓又傑（ハンヨーチエ）こと中島成子その人だったからである。このことがきっかけで、各種資料を送付してもらう。



寄贈図書・会報目録（二〇〇三年八月～二〇〇五年六月）

『女性史研究ほっかいどう　創刊号』、札幌女性史研究会
尹貞玉著『平和を希求して』、出版社白澤社を通じて尹貞玉さんから
会報「花ひらく第六〇～六六号」及び『奈良女性史研究会　二〇〇三年Vol.Ⅶ』、奈良女性史研究会
『人権確立を求めつづけて～愛知女性のあゆみ・第四集～』、愛知の伊藤康子さん
『区民が語り、区民が綴る杉並の女性史』、日本婦人有権者同盟の阿曾のぶ子さん及び杉並区立男女平等推進センター
「クロノスVol.十九～二二」及び『女性歴史文化研究所紀要　第十二～十三号』、京都橘女子大（現橘大学）・女性歴史文化研究所
ビデオ「函館の路面電車　走れぼくらのチンチン電車篇」、アウルビジョンの高橋氏より資料提供のお礼として
『第九回全国女性史研究交流のつどいinにいがた　報告集一』と『〃　報告集二』、第九回全国女性史研究交流のつどい実行委員会
「市史編さん室だより　No.二～四」、函館市史編さん室
お茶の水ブックレット『教育と平和』、『ライフワールド・ウオッチセンター』及び安達すゑの著『七飯町で見られる万葉の植物』、会員清野きみ
『神山茂著作集』、神山茂郎氏・函館文化会から
『北海道女性史研究　第三九号（終刊号）』、北海道女性史研究会の高橋三枝子さん
「王子製紙争議を語りつぐ女性たちの会」資料、美瑛町の岸伸子さん
「函館支部だより　No.二四～二五」、日本キリスト教婦人矯風会函館支部
「佐世保女性史の会だより　二二～二三号」、佐世保女性史の会
『しずおかの女たち　第七集』、静岡女性史研究会の勝又千代子さん
『蘭灯　第四号』、室蘭女性史研究会

あとがき

第二次世界大戦終戦の前後を学生として過ごした私たちは、人間讃歌を知らなかった。人間の心の襞、心の紆余曲折の情景を何で学んだか、ひょうひょうとした友人Nの死によって目を覚まされた。いままでの戦いや苦しみは何であったのか。その疑問を少しでも解きたいと強く思ってきた。就職して大先輩の吉村・盛山・神田・羽田先生らと大学婦人協会で女子大学、女子教育、家庭教育を話し合ったのも、日本母親大会実行委員長河崎なつさんに出会ったり、大山柳子さんに話しを聞くときもその答えを導き出したいためだった。本誌で函館の女教師諸先輩から伺った教育懇談会も同様の願いから企画されたものであった。

終戦六〇年の節目にあたり、自由・平等・平和に近づく私たちの共通認識がもっとも大切で、政府は国民を守る責務があると強く思う。そのことが人間讃歌の中味だと思う。さまざまなシステムの落とし穴に気付くことがいま一番大切なことかなと思っている。

清野きみ

この度、わざわざ選んで遺愛に学び、崇貞学園に行ったという門田さんについて、やっと纏めることができた。

十九歳の佐藤（現門田）昌子さんの人生を決定したとも言える一冊の本『朝陽門外』（昭和十四年、朝日新聞社発行、三六七ページに図版）を、私が中国語の先生から拝借して読み出したのは、二〇〇一年五月十四日。十七日読了とメモしている。四日間で読んで私も感動した。私が読んだ本の表紙（本書62ページに写真あり）は『朝陽門外、清水安三著』とあり、佐藤さんが一九三九年、函館の本屋で購入したときは『朝陽門外』もだが「北京の聖者　清水安三」が目に留まったと書いている。そして『少女の友』編集長内山基の文章の中では、「それから、二ヵ月後、朝日新聞社からその本は出た。題名は『中国と日本にかける橋』というのであった」と書いている。

今年六月、パソコンで全国の図書館を検索したら、書名『朝陽門外』副書名「戦火を越ゆるもの」とあった。国会図書館には一九三九年発行と昭和十四年発行と二種

類あるような表記である。わたしが読んだ本は古書店から入手されたそうだから帯が無くなったとも考えられるが？？？　六六年前の本のミステリーである。

内山氏は発行十万冊という数字を挙げているが、実際にはどのくらい発行されたのだろうか？定価一円三〇銭は、函館市の尋常科本科正教員（女）の月俸が四七・八九円だった当時、かなり高価だったとも思われる。

酒井嘉子

私たちの女性史研究十四号が出た二〇〇三年の暮れに日本でも発売され話題になった絵本がある。『茶色の朝』は、フランスでベストセラーになった寓話絵本。普通の人々がいつのまにか権力の意向にさからえなくなっていくさまを淡々と描いていて、とても重い、そして今日的な問題提起になっている。

筆者のメッセージは「やり過ごさないこと、思考停止せず考え続けること」。

今回、聞き書きさせて頂いた豊田さんは、六〇年前の戦時中、妻子をおいて出征する人を万歳で送ることはどうしてもできなかったという。本当のことは言えない時代、それはせめてもの、しかし勇気のいる抵抗だったろう。「今、また、戦争になりそうな状態ですものね。こんな時こそ、私の経験した戦争の事をぜひ話しておきたいと思います。」と豊田さんは言う。

庶民のまっとうな思いさえ届かなくなる世の中にしないために目を凝らし耳を澄ませて日々を送ること。『茶色の朝』前夜を思わせる出来事が次々おこっている今、改めてその思いを強くしている。

四ッ柳敦子

戦争終結直後、日本にいた朝鮮人が国に帰還しようと日本各地の港に殺到したが、帰国希望者があまりに多くて船に乗れない人が続出したということを今回の聞き書きで初めて知った。このことはなにを意味するかを考えた。当時それだけ多くの朝鮮人が日本にいたということと、日本政府が朝鮮人を責任もって国に帰還させようとしなかった。そのために結局帰れなかった人が多くて混乱したのだった。日本人の中に、在日韓国・朝鮮人はなぜ国に帰らないのか、日本に対して批判するなら帰ればという人が少なくない。韓国や中国で反日行動が起こる

と必ずそういう批判をする人がいるが、チョさんのように戦後の混乱で帰還できなかった人も多かったということを知らないのだろうし、知ろうともしていない。その責任は日本政府にあるにもかかわらず。あの頃国に帰っても、朝鮮戦争でどうなっていたかわからないというチョさんの言葉に、戦争の被害者であったのに、苦難の道を歩まざるを得なかった朝鮮の人々の歴史をあらためて思った。

大　場　小夜子

十五号出版と長女の出産が重なって、右往左往の毎日だった。一人の人間が誕生するのに、長女夫妻はもとより、多くの人々が係わり、誕生を待っている。

今、私は自分が出産した時の私の母の気持ちになっている。心配、不安、そして喜び、母が感じたこと、体験したおなじ道をたどることで、そうなのかと納得し、当時のことが鮮やかに蘇ってくる。

永田さんのお話しの中で捨てろといわれた乳飲み子を、必死に守り、樺太から引き揚げて来たときのことが特に心に残った。いつの時代も、愚かな大人の戦争の犠牲にされるのはこどもたちだ。

心の奥に封印されていた真実を、戦後六〇年の長いときを経て語る、その重さを真摯に受け止め、次世代を担うこどもたちに伝えたい。

そのためにも戦争をはじめとする過去の、それも女性「母親」の歴史をきちんと書きとめておかなければと思う。孫の誕生で脈々と続いて来たいのちの連鎖を実感している。

作　山　すみ子

住所録

大場　小夜子	函館市青柳町三三－六 増田ハイツ三〇三
清野　きみ	函館市人見町十一－十六
酒井　嘉子	函館市高丘町二八－十六
作山　すみ子	函館市柏木町八－九
四ッ柳　敦子	函館市杉並町十九－十六

道南女性史研究第十五号

二〇〇五年八月十五日発行

編集と発行　道南女性史研究会　頒価　七〇〇円

連絡先　042-0955　函館市高丘町二八－十六　酒井嘉子

電話（〇一三八）五七－一〇〇五

郵便振替口座　〇二六四〇－〇－七〇一六

印刷所　(有)三和印刷　函館市海岸町八－十一　電話（〇一三八）四五－〇八四五

ISSN 0386-1406

読者の皆様へ

この度は『道南女性史研究第十五号』をご購入いただきありがとうございました。

当会は道南の女性の歴史を記録に残し、時代と共に忘れ埋もれてしまうことのないようにしたいという願いのもとに会誌を発行してきました。

今後も聞き取り調査、聞き書きなどを通して道南の女性の歴史を調べていきたいと思っております。つきましては、読者の皆様のご意見、ご感想、聞き書きに関する情報などございましたらお知らせいただければと思います。合わせて一緒に活動する会員も募集いたします。添付のハガキでご投函ください。なお、お寄せいただいた情報等は本会の活動以外には使用いたしません。よろしくお願い致します。

二〇〇五年八月

道南女性史研究会

郵便はがき

恐れ入りますが50円切手をお貼り下さい

〒042-0955

函館市高丘町一八一十六

酒井方

道南女性史研究会 宛

『道南女性史研究』バックナンバーのお知らせ

左記バックナンバーの在庫があります。
ご購入希望の方はご連絡ください。

『道南女性史研究』第十号　（定価六〇〇円）
同第十一号～第十三号　（定価六五〇円）
同第十四号　（定価七〇〇円）